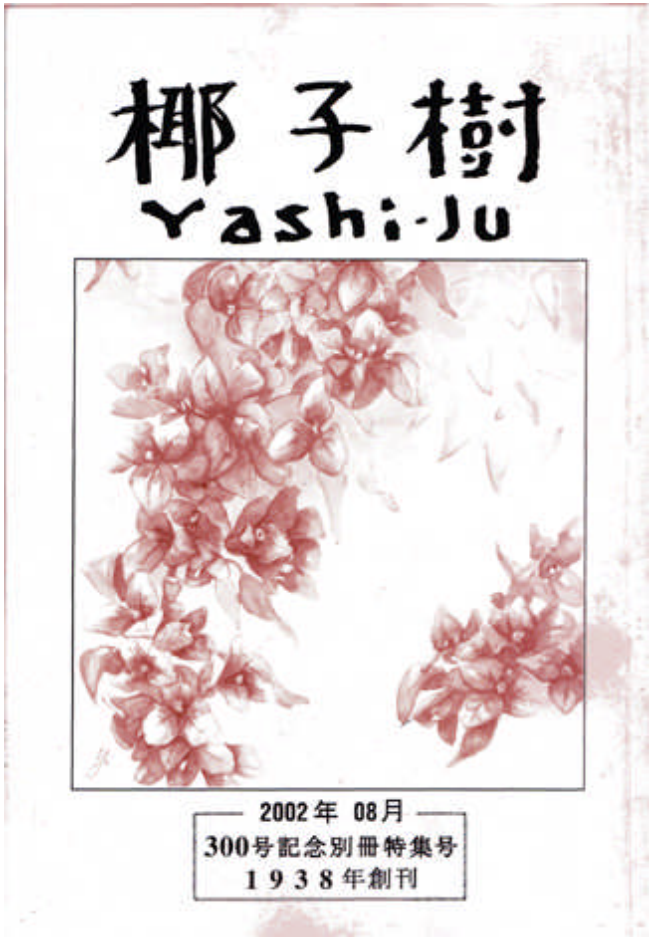
『椰子樹』三〇〇号記念号



目次　『椰子樹』三〇〇号記念号

今、思いめぐらすこと　清谷　益次　4
友ありき　米沢　幹夫　6
『椰子樹』略歴　10
祝『椰子樹』三〇〇号　三浦　千里
『椰子樹』三〇〇号をお祝いして　細江　仙子
『椰子樹』の未来に期待する　小塩　卓哉

作品　12

ブラジル「移民短歌」の現況　清谷　益次　156
『椰子樹』運営委員会　編集部
歴代の担当者　安良田　済　170
創世紀の人々の点描
祝三〇〇号記念号
座談会　編集部　227
二五〇号以降の物故者と作品　陣内しのぶ　272
厨房をおあずかりして　岡本喜代子　305
遥かなる歳月の譜　307
思い出の短歌・その背景　梅崎　嘉明
遍　歴　青柳　房治
パイース・ド・フツーロ　井本　格
短歌との出会い　宮本留美子

自らが光らねば　小野寺郁子
幻の歌集　藤田　朝寿
発表作品数上位者　341
『椰子樹』に期待を寄せて　渡辺　光
『椰子樹』三〇〇号に寄せて　敦賀　葵花　342
思いつくままに　阿部　玲子
盲者蛇に怖じず　田中　朝子
不死鳥　酒井　祥造
全号出詠者
猪名川堤からの挑め　藤田あや子
人集・推薦欄掲載回数上位者　369
武本由夫先生に短歌を学んで　高橋　暎子　370
地方歌会だより　381
タウバテ短歌会　田中　朝子
サンパウロ短歌会　鎌田　英雄
あらくさ短歌会　高橋よしみ
モジ同好短歌会　中村　教二
福　博　短歌会　杉本　鶴代
カンポス短歌会　春名　宏文
全伯短歌大会　一九九四年以降の記録　上妻　博彦　397
数字に見る『椰子樹』の動き　上妻　博彦
随筆・寄稿・連載他　上妻　博彦　406

宮中歌会始　入選歌及び佳作　小池みさ子　４０８
岩波菊治短歌賞
「老荘の友」歌壇の現状　水本すみ子
コロニアの短歌関係著作　上妻　博彦　４１１
明治記念綜合歌会　特選・入選・佳作　小池みさ子４１４
会員名簿
『椰子樹』命名について
この八年間のできごと
あとがき　上妻・多田　４２１

今、思いめぐらすこと

清谷　益次

本二〇〇二年六月発行で「椰子樹」は三〇〇号に到達した。一九三八年十月の創刊だから六十四年の歳月を閲（けみ）した訳である（第二次大戦期のほぼ六年を休刊）。

この戦時期は別としても「椰子樹」の歩みは必ずしも平坦ではなかった。まず発行費の問題、編集をめぐる数々のいき

さつ等々を凌いで存続し得たのは（ちょっと改まった言い方をすれば）

「短歌による真実の自己を表現する営み」を、心から信じ、志した者の集いであったからだと、今ふり返ることができる。かりそめの心おごり、恣意を抱くことから生じたいきさつは「椰子樹」の持つ自浄の働きによって度々克服されたのであった。一〇〇号に達した時点で「椰子樹」は廃刊とし、新しい結集によって新しい誌を創刊してはどうか、という提案が「椰子樹」創刊の担い手であった先達二、三からあったことも記憶する者はもはや少ないだろう。「椰子樹」という名のもとでの強い連帯であったのだから、廃刊は決して好結果をもたらさないだろう、という考えが大勢を占め、続刊となり、その折、従来の同人・会員制を改めて会員制とし、すべての参加者は等しい場に立つものと定められて、今日に到っている。このようなことも過去にはあったことを知っておくのも無意味ではないと思われる。

ブラジルの短歌の将来についてはいろんな見方があるだろうが、情勢が極めて厳しいことは直視しておく必要があるのではないか。その認識を如何に生かして行くかが、私たちすべての肩にかかる重荷であるだろう。

巻頭におくものとして、ふさわしくないのは承知で、敢えて記してみた。三〇〇号記念別冊刊行への協力を感謝する。

二〇〇二年七月　記

友ありき

米沢　幹夫

私がアサイに移ったのは、戦後のどさくさが少し落ちついた一九四九年であった。皆既日食のあった年で、技けるようなアサイの空に懸ったコロナの神秘を忘れない。

恰度北パラナ一帯は珈琲の絶頂期で、誰も彼もが熱に浮かされ、珈琲貴族になる夢を見た時代でもあった。私も憑かれた一人で、馴れない手に斧を握り、開拓の真似事をやり、金の成る木を植えてはみたものの、契約農の悲しさ、幸運の神様のほほえみに預かることはできなかった。

私は不運にして珈琲貴族にはなりそこねたが、アサイに移ったお陰で得難い三人の歌友にめぐり会うことができた。孰れも私の蒙を啓き、斯道の暗示を与えてくれた兄貴たちである。残念ながら今では三人とも幽明を異にしてしまったが、当時のアルバムから記憶を呼びもどしてみよう。

私の入植したセードロ区に浜津正夫がいた。曾て、聖州新報の文芸欄に詩名を馳せた「毛利なか」は彼のペンネームである。穏やかな微笑と翳りある風貌、学者タイプのまじめな印象が焼きつく。

文芸関係の造詣が深く、詩・俳句・短歌ｅｔｃ…特に風土をとり入れた民謡詩に共鳴したのは私だけではないと思う。日本で童謡が数篇レコードに吹き込まれていることは、知る

人ぞ知るである。
仕事の余暇を割いて農村サークル誌を出したのも楽しい思い出の一つである。
私は彼の手解きで、俳句の味に溺れかけたことがある。下手の横好きにもまぐれ当たりはあるもので

乱菊や先駆移民の墓々に

の句を、念腹に拾ってもらい、些か面目をほどこしたこともあったが、素質がなかったのと、熱意が足りなかったことなどで、残念ながら私の畑には俳句も川柳も育たなかった。
彼、浜津正夫は『椰子樹』同人であり、歌壇のホープでもあったが、戦後は如何なる心境の変化か、短歌とはすっかり疎遠となってしまった。聖報歌壇にマリリアを詠嘆した頃が短歌活動のピークであったかも知れない。
私はアサイに移って行路を少し踏み違えたような気がする。と言うのは、苦労して植付けた珈琲が漸く実を結び始めた頃、農年契約が切れたのを期に、百姓の足を洗って山室商店にころがり込んだ、と書けば、不逞の韻がこもるが、店主の山室新太郎（晶山充）に乞われるまま、彼の店で働くことを承諾したのである。訥弁で、内向的で、とても商売などに向くはずのない私を、どうやら商人らしく仕上げてくれたのは彼で

あり、この恩を忘れることはない。

晶山充（山室）が『椰子樹』同人になったのは四九年であるが、彼の名は『椰子樹』二号からその圭角を現しており、駆け出しの私などには遥かなる存在でもあった。彼の店で働くようになってから、周囲の刺激にもよるが、私にも作歌熱が高まりだしたのを覚えている。

その頃、『トレス・バラス移住地開拓史』編纂の用務で来植していた池田重二に発破をかけられて、長い間中断していたアサイ短歌会が再出発した。集る歌人は多くはなかったが、けんけんがくがくを続けたことは書くまでもない。

私が彼の店で働いたのはわずか一年余りに過ぎない。トラブルや不平があった訳でもなく、誰に頼まれたのでもない。ただ何となく無計画のまま辞めてしまったのが本音である。彼は紳士であったから私の我侭については何も言わなかったが、折角優遇してやったのが裏切られ、心の中ではかんかんになっていたのは想像に難くない。

本庄研一（真木研一）と親しくなったのはいつ頃であったろうか。何事にも几帳面でポジティブな彼が、多分にバックワドネス的な私と気が合ったのが不思議でならない。人生意気に感ず、そのようなエレメントがあったのかも知れない。彼は如才のない社交人ではあったが、主張は絶対に枉げないという一徹なところもあった。次のようなエピソードがある。

第三回パラナ短歌大会をアサイで催したときの事である。

プリントされた応募歌の中に既発表作品がまじっているという投書が舞いこんできた。調べてみると岩波先生の歌である。未発表作品と規定してあるのに「何事ぞ」と、早速クレームをつけた。岩波先生から

「私信の中に書いたもので、公に発表したものではない」と釈明があったが、彼は強引にオミットしてしまった。

本庄とは短歌の上でライバル同志ではあったが、お互いに吸収したり、されたりの仲でもあった。

私は五二年にアサイを去った。同じ年に彼もアラポンガスに去った。山室・本庄・米沢のトリオで始めたアサイ歌会誌『南回帰線』も三回でポシャッた。

歳月は記憶を風化する。パラナペンクラブのメダルが一つぶら下がっているが、過ぎし日の感激を醒すこともない。

『椰子樹』略歴

一九三八年　創刊

一九四九年　第一回全伯短歌大会

一九五〇年　坂根賞創設（四回）

一九五七年　五〇号

一九五八年　椰子樹賞創設（十回）

一九六八年　岩波菊治賞創設

一九六八年　一〇〇号

一九七七年　一五〇号

一九八六年　二〇〇号

一九九四年　二五〇号

二〇〇二年　三〇〇号

祝『椰子樹』三〇〇号　　三浦　千里

『椰子樹』三〇〇号をお祝いして　　細江　仙子

『椰子樹』の未来に期待する　　小塩　卓哉

（文庫編集部・以上３篇　短文につき省略）

作品

遠き瞳

サンパウロ

阿部　玲子

椰子のさやぎ見下すホテルの庭広し表彰式に子等
と来たりて
朝日背に孫と歩めり小波の寄する浅瀬に貝がら拾
うと
表彰をさるる息子に続きゆく晴の舞台に脚光浴び
て
カップ受け謝状をも受け胴上げをさるる息子に絶
えぬ拍手が
三世なる丈高き子が胸を張り壇上に立ち謝辞のべ
ており
謝辞のなかに亡父の教えを語りつつ遠き瞳をせり
壇上の子は

雨に煙り揺れる街路樹出水を憂い見ており濁流の路

雨音に混り声高に路をゆく人語親しく聞こゆる夜を

「ズボンより服が似合う」と言いし夫がふと胸よぎる暑き日の午後

街を離れゆくバスの窓にみずみずと緑の樹々が光をかえす

風の盆唄　　モジダスクルーゼス

青柳　房治

民謡も山車も出るとの招待が届けばいつか八尾の盆唄

病む母を見舞わんとゆく飛行機の二十四時間もどかしくいる

杖つきて日本の旅行く駅ごとに吾を悩ます階段がある

拒みては又受けていつ酒の座に竹馬の友と夜の更け知らず

花あかり仄かに灯る山百合の露しとどなる杣道をゆく

パライバの早稲の香りは故郷の利根たたしめて吾のみの秋

朝市の客の薄きを確かめてバンカの陰ににぎり飯食う

幾年も野良に履きたる思い出の古靴芥と共に焼かるる

年金は僅かなれども有り難し余生過ごすに多くいらねば

追憶は粉雪となりて古里に眠れる父の碑に降りかかれ

緑の風　スクルーゼス　　青柳　ます

進学の夢を抱きて寮に入る吾娘の背に差す初日が
眩し

くり返し詠みたる短歌を口ずさむひとり鶏舎に車
押しつつ

水害の水しらしらと見ゆる畑吾がかなしみの外に
陽は照る

吾が壮さのついの農ぞと気負いつつ哀しきまでに
日焼けせる夫

継ぐ者もきまらぬ農を拡げゆく夫に寒日の味噌汁
を炊く

キャンピングの一夜は明けてカイサーラの持ちき
し蝦を目分量で買う

「まだ生きていたか」と夫と旧友が野辺の送りに肩
たたき合う

走りゆけば間にあうバスも見送りて足弱き夫に歩
調を合わす
年金の手続きすみて公園の緑の風に吹かれて歩む
ふるさとの山路をゆけばひぐらしの声にまじりて
鶯の鳴く

衝撃のテロ　　サンパウロ

安良田　済

日本の特攻魂踏襲せるテロの敢行に世界は震撼
未来国の惨状さながらニユヨークの高層ビル二つ
の崩壊
小説より奇なりテロらの作戦は世界中の意表を衝
きて
子供らに銃器を持たせ抗戦を構えるタリバン軍隊
はや
コンピュターウイルス発生の混乱は電脳文化の意

外な落し子

幼らが夢中にあやつるビデオゲーム見ているわれ

にはおもしろくなし

ひと日がら牧草食みいる牛の群食うために生きる

は真理にあらん

牧場よりつよき臭いをおくりくる黒き雨雲意外に

ちかし

緩慢な動作に獲物を隅に追いレオン・ペイシエは

電撃の技

風景のひとつとなりたり老夫婦われらの日課朝の

散歩は

生きる幸せ

タウバテ江頭　初夫

横文字の国に縦書の短歌詠み誇りに思うブラジル

に老い

ふるさとの土産包みし新聞を皺のばしつつ匂いまで嗅ぐ

時経しもあの感激は忘れまじ芦ノ湖よりの富士の霊峰

幸せの日々に揺られて生きゆけば異国に老えど心明るし

まだ遠き天国などと思いしにわれを残して友は逝きたり

やるだけはやったと思い振り返る米寿となりしわが誕生日

牧場となりたる農地廃屋に名残とどめてパイネーラ映ゆ

君眠る墓もしとどに濡れいむや窓の雨音心に沁みる

ののめのめと八十八まで生きのびて嬉しきなかに淋しさかげる

思わざるおふくろの味もてなされ歌友の情けの心にしみる

歩道橋　サンパウロ　　遠藤すみえ

車多き日曜日なり街道に完成されし歩道橋を渡る

フランボイアンの花盛り見に来よというリベイラ河畔に住む娘の便り

民謡話大会上位発表者の中に年に一度逢う歌友の名があり

新刊の椰子樹誌めくりつつあるはずもなき亡弟の歌稿を捜す

さ庭べにアガパンサスの実が熟れて苗を植えたる亡父憶いおり

亡き父が常に泊りし東洋街のホテルの広告懐しくみる

山岸の池の古木に鷺止まりウルブーの群が旋回を

なす

娘の家の坂道行けば招く如く里芋畑の広葉そよげり

山を焼く煙あたりにたちこめて夕暮れの坂娘の家に行く

目交の山脈拓かれ畑となり青々として稜線つづく

音なく濡らす　　スザノ

藤田朝日子

静かなる朝の街路を三本足の犬がす早く過り行きたり

梅雨明けの風さだまりて大川の堤のあら草かたなびきする

おみなより長き頭髪背に垂らすニヤケ男を前にバス待つ

前山の雑木林はけぶらいて雨沛然と舗道を濡らす

都営バスに関取ふたり乗り込みて傍の人ら子供の
如し

つややかな髷に凛々しき顔立ちの力士は陣幕関と
知りたり

雲間洩る冬の朝日が丘の上の一団の家を明るく照
らす

朝けより静かなる雨降り出でて庭の芝生を音なく
濡らす

子の飼える箱のつがいのモルモットロ笛吹くがに
晴れし日は鳴く

一莖に五つの花を咲かせたる貴なる百合の白さ目
に沁む

歩　み　　カンピーナドモンテア

レグレ　　藤田あや子

糖尿の父を囲みて四十余年励まし援け歩み来たれ

り

糖尿も悪しくはあらず芋作るを止めて財産捨つるを防ぎぬ

若き医師と争う息子は父親の看病三十年と胸を張り居る

始むれば風荒るるまで停まらじと飯も食わずに薬液の噴霧

降り続く雨の止み間に脱穀し乾燥作業は夜休まずに

隣人が眞似してくるるを励みとし農に研鑽を積む息子たち

待ちし雨の音を聞きつつテレビ見る息子は日焼けの顔を和らげ

丹誠をこめて培いし土壌なり視察の技師は眼を瞠る

元日の雨は嬉しと息子等は昼寝のびのび英気養う

日本語の読み書き出来ぬ子は云いぬ書き遺し置け
老いて学ぶと

野沢菜　　サンミゲールパウリスタ

蝉の声聴かざる夏の久しかり都塵の中に住みて侘しき

藤原よし子

柴漬けを作りて出せば懐しと子は語り告ぐ信濃の日々を

県人の集いで野沢菜頂けば浅漬けにして夕食すすむ

今年の味噌仕込めば遠き故里の味噌玉刻みし春の日偲ぶ

色付けの玉子で祝いし日は遠く復活祭の卓にチョコレート盛る

孫在らばどんな顔かと想いつつ花首揃いしアマリリス見る

目溜りでハーモニカ吹く媼いて老いもまた良しと佇みながむ

キリギリス真昼の庭に鳴き出せば季の移ろい思いつつ聴く

気紛れな風に吹かれてイッペーはカンバスの如く庭をぬりゆく

時長く使わざりしが形見なる時計を手に取り今朝は螺子まく

北空に　　サンパウロ

古屋　泉

病舎より逝きたる人は運び行かれしぐるる夕べ白梅匂う

堤琴の松脂匂う孤独の夜流るるメロディー秋は逝きけり

ふる里の風鈴の主逝きし今しのび鳴るごとあるな

しの風に
訪う人も稀なる孤独の我が住み家小雨とともに冬
は来にけり
舞雨にはるか湖面も白ずみて雨だれ奏でるプレ
リュウド
対岸の灯はさざ波にゆれながら一人夜釣りに佇み
ており
暗闇の湖面は寂としずもれりかわずの声の遠く聴
こえて
人心も浮世も遠くはなれいて生くるすべてを無心
に待てり
北空に強く輝く星のあり何か我が身に暗示せるご
と
星影も何時か移りて時流る獲物なき身に夜風のむ
なし

むらさきの水草　オウリーニョス

古山　孝子

むらさきの水草一茎匂いたつ蒲群生の湿地の中に
とどまりて心安らぎ見ておりぬ水草一茎がま原の
中
目の前に黄の花ありて留まりぬ触れれば小さき棘
のささりぬ
この湿地すぎれば河畔に着くと言う一足一足ふみ
しめて行く
ようやくに河畔に着けばとうとうたるパラナパネ
マの広がりに会う
美意識も価値もはげしく変りたり時の流れは非情
にも以て
美しく老いてゆきたし夕ざれの茜の下にしばし佇
む
如何ようなる終の日あらむ何人も解らぬままにひ

たすら生きおり
この吾を妹の如しと言う友の九十になりて少し弱りぬ
手をとりて手まりのさし方教えくれしやさしき友は病めるとぞ聞く

切符　福博

原　君子

待ちに待ちし皇孫愛子さま生まれまして一入めでたき春の屠蘇くむ
新年にたがわず咲けるさるすべり娘の家の庭に際立つ
肥満をば嘆かう友の賀状にて文字の細きに思わず笑う
心臓と肺の処方箋手にしつつ傘寿までではとひたすら願う

朝起きて一、二時間を経しころに霧の晴れゆく如き体調

尋ねゆく旅の不安にかられつつ切符をしかと握りしめおり

逝く秋の名残り惜しみて古里の銀杏ひと葉を日記にはさむ

一人居の炊事も楽し気が向けば煮しめを作り友に電話す

ようやくに思いどおりの浅漬けの色あざやかな茄子のむらさき

幸せと思う光がみな吾に差し来るごとき今朝の太陽

結核療養所　　カンポス

春名　宏文

改築に浄財よせし人々の名をしとどむるこのプラ

カード
レントゲン機解体されて片隅によせらる長きコードひきずり
放射能鉛の壁に反射して肌に冷たきレントゲン室
気胸台に今も残れるプラチナの針ふとぶととにぶく光れる
息つめて暫し耐えおり医師の手に赤く焼かれしプラチナの針
壁にある肺解剖図に目をやりて医師は諭しぬその病状を
五千人を越えし入院患者等のカルテは今も整然とあり
年月をかけて作りし住所録代がわりすれば切り捨てらるる
結核病棟解体されて養護院老人痴呆日々に増しゆく

向日葵の咲き終りつつ首たるる養老院の庭のむなしさ

モジダスクルーゼス

時過ぎて

平田　政子

老いの身の醤油欲りつつ死にたりとその妻を言い昔を語る

呼び寄せの君は一人の師たりしに災禍に帰らず柿若葉の頃

塩鮭をと常思いしに訪日も叶わず二世の夫は世に亡し

異国にて嫁ぎ涙の朝夕に諌めし姑も余生になつかし

白衣にて戦火くぐりし姉の便りを支えに異国に我は生き来ぬ

黄ばみたる日記帳繰れば書き留めし離郷の思い昭

和二十七年
時過ぎて祖国に出稼ぎに行く人にもはや時間は優しかりけり
いつしかに母の齢に近づきてよく似る顔の姥となりゆく
故里の柚子たっぷりの雪の夜の湯に入りたりを初湯に思う
平穏に日々を過ごして時過ぎぬなお控え目に此の国に老ゆ

愛

サンパウロ

井垣　節

諦めは愛とかわりて混血の係を抱けば婆と呼びくる
初夏の陽に早も乾きし濯ぎものとり入るる娘の二の腕やさし

塀ぎわに埋めておきしひね生姜思わぬ時に役にたちおり

眼鏡かけ間違い直しつつ編み上げる孫のジャケツの一年がかり

犬小屋に野良猫親子陣どりて主は吠える春雨の中

書く文字の行が左へひだりへと傾き行くも老の証か

這いはいの出来ぬ曾孫は両手つき片膝まげていざりて微笑む

思い出を喪服につつみ我が夫の遺骨の壷をいだき帰伯す

煮凝りとなりし太刀魚孫たちはジャンケンまでして競いて食ぶる

我が肌の染まるかと思うカンポスの風吹く若葉の緑に息す

シャボン玉　　サンパウロ

井本司都子

車より下りたる野路の足元に黄のタンポポはひそやかに咲く

眼を閉じて過ぎたる日々を描きおり日暮れ近づく窓辺の椅子に

ポルトンを忙しく出入りせし子らを想う久々に来しジヤサナンの家

坂のぼりつめたるオルトの墓原に佇てば大空間近にせまる

この墓地にいつ来てもいるキジに似し足長き鳥われに慣れしか

亡夫の声かすかに聞こゆる心地して灯影に座して歌集繰りおり

枕もとの机につみ置く数冊の本少し読めばすぐねむくなる

朝の陽の射す壁ぎわにてシャボン玉無心にとばし
し幼なき日の吾児
五線紙にならぶ音符は高く低くわがすぎ去りの起
伏のごとし
さまざまな草花しげる寺の庭くちなし一輪くきや
かにあり

モンタナ・ロッキー　　サンパウロ

井本　格

さわさわと春はめぐりて運びくる遠い友らの楽し
い思い出
朝の陽に白い翼は輝やいて冷たい空気のそらには
ばたく
うたのある夏の夜空の瓶詰とビュッテの友らを大
切にしよう
透き通った河は真昼の陽をうけて残りの雪をゆっ

くり解かす
山河を越えて辿りしビュッテの町黒雲わきて雷の
音
冬風にダラスの星を見上げては願いをいくつか考
えている
わがゆかむ道を定めるひと時にコインを高く投げ
てみている
その歌の心に宿る温かさ君の命のこめられた韻き
陽を受けて立てばロッキーの山も立ち背伸びをす
る春の日射しに
久々に陽を受けて立つモンタナ・ロッキー春の匂
いを空に放てり

水の流れ　　サンベルナルド

入江　美津

しみじみと年の終りの夜が過ぐ吾が生命線の薄る

るままに

幼らの夢に輝く聖樹の灯倖あらしめよ来る年もま
た

ユーカリの樹皮剥がれいて開拓の畑荒涼と甦りく
る

濡れながら草を喰みいる牛群を巡りて低唱の如き
春雨

拓魂の碑を仰ぎつつ風の中ひとりし佇てば杳き幻
聴

混迷の世相に心惑いつつ春夜のテレビ黙して見つ
む

春浅きさ庭にはらから集りて祝いてくるる米寿の
よわいを

さながらに水の流れの一生とも早し野の涯に消え
し夕虹

こもり居の心貧しくこの真昼古き書棚の本の位置

替う

アカシヤの咲く日となりて噴きいづる吾がかなしみの消ゆることなし（亡夫の忌）

今昔こもごも　　サンパウロ

陣内しのぶ

父母と六つ差のある妹とあれば満ち足り故郷出でし日

家族共々在れば浮き浮き船旅の楽しかりにし彼の移民船

兄とわれと小さき妹庇いつつ線香花火に興ぜし一夜

その夜よりひと月を経ず逝きし兄幼顔見せし数えの十七（欠水病にて逝く）

ひと夜さに逝きたる兄に茫然とはた黙然と添寝せし父母

一昼夜病みて逝きたる長男を忘れんとブラジルに
来たる父母かも
辿りおれば今は口惜しも少女期に唯唯と故里捨て
て来しこと
六十七年縷縷（るる）とつづきし移民の譜懐旧すれ
ば顕づ線香花火
二、三世の子孫の家族に唯一人日本語で通すかた
くなな吾
遥かなる肥後の津森のわが生地十五年の記憶まぼ
ろしめくも

折りおりの歌　サンパウロ

上岡寿美子

春近き風に木立ちはさゆれつつ朝の日差しに若葉
ひかりて
良き雨に稲のまき付け始めたる八月今朝は朝顔を

まく

街路樹の黄の花は散り冬ながらハイビスカスは紅
あざやかに

八つ折りの古新聞をよくのばしこんな記事がと読
んでいるなり

若くして寡婦となりたる人おもう夕顔の花一輪咲
けば

外燈の光とどかず黒ぐろとブタンタン区の森のし
ずもり

アパートの十三階の窓により夜更けの街の静寂に
いる

彩りの良き日本食眼で食すおすしのケースはあき
ることなし

晴れし夜は星座のことなど語り合いし亡き父と兄
の遠き思い出

ふるさとのわが家の裏の柚子の木は枝もたわわに

実りているや

折々に

コンタジェン

金子　静江

隣人の小さき庭に唯一本カフェーの木有りて赤味を増せり

貧しさにただに道辺に屯する隣り近所の子供ら思う

毎朝の散歩のたびに想うこと路傍のコスモス少なくなりぬ

朝毎に老いの楽しむ散歩道コスモス削られ工場建ち行く

我が足の今朝は重たく上げ逸れてつとつまづきぬ路傍の石に

再会を約束せしが果せずて一人二人と同航者逝く

我が家で約束せしこと一つあり誰人たりとも嘘を

つくなと

冬空の高き星座に光る星かぎりなき想い出弘中先生

病弱の体に耐えしが新世紀二千年に入り活気満ち来ぬ

痛みなき体となれば夢を持ち希望湧き来る二十一世紀

アチバイア

昨日の如く

加藤　操

何のため生きる我かと思つつ今日も散歩す昨日の如く

櫛の歯の欠けるが如く友垣の逝くなり老いたる吾を残して

黒髪を風に吹かれて走りゆく幼は母の名を呼びにつつ

高所より見る界隈の樹々の間に並べる家の深き静もり

七十年の隔たりありて新しき日本の雑誌に知らぬ語多し

旱にて野菜の素枯れし中ほどにたんぽぽ一つ白きが目を引く

風落ちて平となりし潮は白雲一つを抱えて暮れる

夜食後をテレビ見ていて唐突におそう眠さに老いしを知りぬ

人夫等の草刈る大鎌ときにして未だ明るき夕陽をはじく

老いてゆく身を肯ないて行く散歩人等に道をゆずりながらに

古　里　　マリンガ　　川上　美枝

吾が過去を思い出させるこの宮居池を見下ろす絵

馬堂も古り
俎の上に切られし茄子の香は古里を呼ぶ亡き母を
呼ぶ
巨杉の木影によれば遠き世の人の声とも樹水の葉
ずれは
水族館大ザメ真近により来れば吾が身も浮きゆく
青き水中
むくむくと阿蘇の火口の白煙は地底の怒り思わせ
のぼる
だいせんの山高々と雲の上十年ぶりなる古里の秋
艶やかな長髪ゆれる乙女等の春の声のせバスは過
ぎゆく
いくたびもあかず花々を巡り見る心やしないくる
るこの庭
日だまりの花の小鉢にみぢか日の寒の没り日がし
ばしはなやぐ

雨上り庭の梢の小鳥群朝の対話かそれぞれに鳴く

マットグロッソの旅　サンパウロ

河村　武雄

どこを見ても山一つなし平らなる草原続くマットグロッソの原野

通り過ぐる雨は白々すじ引きて森を越えつつ彼方へと去る

見はるかす草原果てなく続きいて遥か彼方は空にとけ合う

写真機に写さんとする間もあらず駝鳥はとぶごと瞬の間に去る

人を見て驚き逃ぐる鹿の群たちまちにして彼方へと消ゆ

行くほどに墓傾むける叢に住む人もなし荒れ果てし野は

伝え聞くパラグァイ戦の偲ばるる野に傾ける限りなき墓

行きずりに振り返り見る土人等の日本人に似たるその顔

名ばかりの小屋に住みいる土人等と我と並びて写真をとりぬ

小屋の中のぞけばただの土間のみでハンモックらしきが一つかかれる

遠街・ほか　　サンパウロ

清谷　益次

確実にさらに一度の会いはなきふるさとびとを門に見送る

われよりも半世紀若きふるさと人いと軽々とタクシーで去る

速く伝う都街の音はリズムありてわが心音と時に

疑う
遠街を想うすなわち甦りくる戦時下五年八百屋たりし辺り
白熱光瞬時放ちて巡るらし遠き家並の鉄塔の尖
邦字紙の記者募集広告の条件に「パソコン編集者」という一語あり
起きぬけに「よく眠れた」と告げ合いて始まる朝の心は優し
二十一世紀初の便りは級友の三、四はいまだ存（ながら）うと伝う
三人の息子のうち孫ひとり生みくれし長男は三千キロ北の地に住む
八月も終るひと日の暁闇にはやもサビアの遠き雅な鳴き

日に日に

オザスコ　小池みさ子

加速する人との別れまた今日も予期せぬ人のふいの死に遭う

「舟うた」のうたに顕ちくる千賀子姉艶なる声音によく唄いしか

ダイアナ妃の酷き最後よわが子には久しく待ちし初子宿るも

お金さえあらばすなわち倖せと疑わざりし若かりし日よ

いかように手入れするとも夏の花日に日に衰う残暑の庭に

わが窓の視界狭めて増えしビル入り日美し向いの丘に

「コレハナニ」とうるさいほどに好奇心示す三つの児のエネルギー

山間の険しきなだりも耕せる欧州移民のワインの
里に
四キロにわたり広がるイグアスー瀑布の真うえへ
リ低く翔ぶ
地平まで大豆稔れる野の果てに一期と燃えて落つ
る太陽

石の間の

サンパウロ　近藤　照

石の間のかぼそき若木春の陽に達しく育てと願い
つつ通る
サビア啼き陽は春めけどいつまでも寒気去るなく
重ね着つづく
線の無視書きつぶしも多き文字のなかに健筆もあ
りて師の老い深む
海を越ゆる一声聞きて病経し友への気づかい瞬時

に解けぬ
つぶらなる苺は赤く輝きて煮るべきなれどためら
いもちぬ
カナリヤの凛と澄む声ひびきくる壁にてへだつア
パート住まい
車道には暑き夏の陽御者の背まるく馬ひづめかば
うがに往く
書を学ぶ人の意図極みなく「かな」に魅せられしロ
シアの婦人
平均点十に近いも思わるる孫らの経ゆく長き未来
が
朝まだき梢ゆらしてにぎにぎし小鳥のむれに秋の
陽映えて

歩いても

サンパウロ　小蒲　柚子

歩いても日本へ帰ると泣きし日よ父の御墓に花あふれ挿す

移民等が集いて唄う「赤トンボ」霊歌の如し更け行く闇に

美味しいと云わせるシチーウ煮つづけて紬ぎて行かむ家と云う布

亡夫への交誼を謝するその言葉心に決めて喪主の座につく

戦友と吾を呼びたる夫も逝き白旗かかげ生きて行かなむ

朝顔の花の大きさその色も仏に告げてコーヒ供う

どの花も何処に咲くより美しく彼岸の墓地は春の陽の中

湯タンポの火傷の跡のありし脛思いつつ洗う夫の墓石

望郷を折りてたためる扇とも思える程に月日は過

ぎぬ

かっこう良く死にたしと云う話題のせ復活祭の明るき食事

卒寿まで

バウルー　小坂　正光

わが趣味は短歌・カラオケ・将棋なり卒寿まで十年余りつづけ行かなむ

あれこれと悲惨なること相次げどこの世は善事が断然多し

地球上の人口過剰を憂えども何十億とは決って居らず

人類はどれほど増えても杞憂なり巨大な地球にはたかが知れてる

「雨降って地の固る」テロ組織やがては自滅平和境来る

亡き姉が好まぬ候補者にとつがざりしことがせめての報いとなりぬ

植物短歌古き榔子樹誌にわが詠みしマンガの歌が遷され驚く

比の国も英才教育推めいる五、六歳の園児等の国歌合唱

四十年振りの電話は歳の暮会いに行くとの嬉しき友の声

四十年振りに会い得し旧友の手を握り越え来し歳月しのぶ

あま風

サンパウロ　上妻　博彦

もろもろの繁葉しずまる日くだちに我の鼓動を聴くべかりけり

唐胡麻の簇生したる塀のうち緑葉の照りて昼ひそ

かなり

あま風のまろびて吹くを聴きおるにはるけかりける母の声する

夕立のせまり青葉を吹きしくを窓に見ており身疼くまでに

いかづちの青葉をはじき降りしくは幼かりにし日にきたりし

挿然と石の大都をつつみ降る宇麻志阿斯詞備もえいでむかも

地芭蕉の葉の群立ちを吹く見つつ群雄割拠の世のありにけり

へごの葉を濡らしてふりぬいつしかに前頭葉にさわやかな風

春の雨よくふりけるに鼠黐ゆたかに実るほどのたのしさ

夏去りて緑はつかにおとろうるあわいの風を見つ

つ身は澄む

草のいのちに

サンパウロ　久保　静子

朝露をこぼし剪りゆくプロッコリ緑の精気は身に
ほのかなり
朝の陽に剪り採るキヤポの無限花序秋立つ日々も
黄に咲きつぐ
風匂う生姜畑の雨上がり稚き蜻蛉秋告げに来る
葉より落ち死を装える小さき虫儚き保身の術を知
りいる
うち捨てて時経し榾木より椎茸の群がり芽吹く秋
雨の中
夕暮れの野に葉をたたむえびす草汝のいのちに指
ふれてみつ
夕焼けに染まる野に佇ちわが生の日々の磨耗を憩

う束の間
松大木伐られし視野の拡がりに今宵の北斗居ながらに見ゆ
夜半をさめ確かむる四脈一呼吸一生絶ゆるなきかすかなる音
インターネットもパソコンも知らず終るべし知りたき意欲も今は持たなく

すみれ

サンパウロ　釘宮　香代子

我が庭のイペーの黄花この年は花弁すくなく心弾まず
その昔偲ぶよすがに藁ぶきの三棟残る日本大使館側
待ちあわす人いまだ来ず会葬に間にあわぬ悔しみ沸々とたつ

母の日にあまたの賜り物に囲まれて親思いの子等
に言う音葉なし
犬連れて一時間ほどの散歩にて夜毎心地よく熟睡
するなり
ひと月の早産なりし曽孫にして体重三キロ頼もし
頼もし
もの忘れいよいよ強くいつくしむすみれに水をや
らぬ日を重ね
きょうもまたいつもの小鳥群がりて窓辺に鳴くは
いとしきものか
今日もまたメトロの中に乗り来りさもあわれげに
銭乞うひとり

しきたり

クリチーパ　久米　光春

携えて来ししきたりも年毎に失いゆきて移民古り

たり
新年のしきたりうすれゆくことも異国に溶けゆく
一つの過程
元旦とあれば些細な迷信に気をかけている弱き人
間
人の運命占なう札をついばみて渡す小鳥の動作よ
あわれ
温泉を恋う里心裡ふかく体温より低き出湯に浸る
人集め賑わうはずのこの湯宿さびれしままに鉄骨
さびて
湧水は導かれいる高さより落つる時までに温度失
う
いくらかは温みのこもるこのプール硫黄度強く肌
にまつわる
報われている表情も素朴にて貧しき出湯に浸る老
移民

華やかな水着に映える陽をさけて何を顕たすと眼
をとじる

歩幅広く

アチバイア　松尾　紫郎

歩幅広く歩いてみたしよいよいになりたる吾のは
かなき願い
いつの間にか古希を越えたり肩幅と同じ歩幅とな
りて久しき
廃線となりし鉄路が甦り観光列車が三キロ程走る
遠く聞く汽車の汽笛は懐かしく思わず歩み止めて
聞き入る
かなしぐも又懐かしき汽車の音あたりに響かせ胸
にも響く
町中の河は幾つも暗渠あり暗渠の水は汚れて臭う
無遠慮にブザーならして物乞いが物乞いて行懶き

午後を
道の辺の十字架一つも見えずなりぬ道路複線工事
の為か
公園に点るがに咲く歓喜樹の下にヒッピー物拡げ
売る
凧を操る少年の眸の澄みていて無我の境地に入り
ているらし

思い出

サンパウロ　松下　睦子

千転の漫画に似たる人生を歩み来たりてブラジル
に住む
この国に移り来て久し思うには消えてはかなし七
色の夢
人里を離れて暮せし年もありうろおぼえ手で桃木
の剪定

古びたるアルバム取り出し眺め入る思い出だけに
支えらるる夜
時折りは一片の昆布夫と分け母国の味をかみしめ
たりし
美しき人の和見たり会館の落成式に臨むうれしさ
新しき靴と時計を棺に入れ夫の手にかくるじゆず
も忘れず
今生の思い出となる旅に出て皇居を拝し靖国社参る
吾も早八十路の坂を見上げつつ子らの手をかりと
ぼとぼのぼる
年毎にいや栄えゆくサンパウロいらかの棟よ樹木
のみどりよ

雨の中

クリチーバ　宮本留美子

帰宅時突然降り出す雨の中濡れながら私はゆっく

り歩く
雨に会う人等はみんな急ぎ足私だけ濡れたくゆっくり歩く
この雨は四方八方に降ってきて傘さす人も濡れざるを得ず
傘さして歩いてもまだ濡れるので傘なんかもう捨てたいくらい
稲光その後突然降り出したこの大雨は止みそうもなく
パラパラと優しく私の窓を打つ雨も時には荒々となる
少しだけ窓に隙間を開けておき寝ようとすれば雨が入り込む
蒸し暑い真夏の夜に窓を打つ雨音聞けば喉まで乾く
止んだかと思えば再度降り始め夕べからの雨もう

飽きた頃
出かけるか出かけまいかと迷う間に天気は再度崩
れ始める

背の曲り

サンパウロ　三浦　千里

卒寿越え生くる奢りと身めぐりの素枯を歌に詠めば
厳しく
老い父母も妻・児も置きて移民一家の初めの墓と
なりしわが夫
移民なる貧しさを背水の陣となし命なりにき夜毎
の眠り
移民苦の何も過ぎ去らぬこの重み負うべく生きし
わが背の曲り
窓枠に木彫の老爺年古りぬ忘れられたるものの淋
しさ

億万土の彼方の原始に帰りゆく吾子の夢みき明け
近き頃
混血の孫継ぐ家系それのみのたつる音澄む秋の風
鈴
八時より八時までを独り居て帰り来る息子の靴音
を待つ
何待つとわれの老ゆるや人は逝き時去り身の辺寒
き十月
わが経たる長き一と代の哀楽を共に歩みし傷だら
けの杖

肥後すみれ

サンパウロ　三浦久和子

身に近く肥後のすみれを咲かしめてあしたタベに
よりて安らう
つつがなく又春に会うさきわいのつつましくして

すみれ紫

とまどいて一つ花咲く冬すみれこの日溜りにより

ゆく吾も

あるがまま成るがままなる安ら居にそと返り咲く

肥後すみれ花

ありふれしすみれに肥後と名をきせて後のモツコ

ス吾恙なし

西行が愛でてうたいし野のすみれ幾代をつぎて咲

く歌ごころ

手をやきし登校拒否児が生き残り吾を懇ろにもて

なしくるる

いじめ禍は昔もありぬひたすらに耐え貫きたり幼

なじみは

身の程もわきまえぬ自がおろかさの恥かきすてて

祖国を去りぬ

古人は言う「白髪は栄の冠」と一つまみの白髪をす

きつつ詠う

樹　魂

サンパウロ　水本すみ子

あたたかき容にめぐる丘陵の涯（はた）てにたちて
眩し積雲
透くばかり山の気配に盈ちながら単純となるわれ
の思念の
食婪に吸い溜めていき山の気の澄みきわまりて苑
に満つるを
寂かなる森の下辺のゆきもどりわれより滲じむ青
き滴り
沼百合の薙ぎ倒されしひとところ犯されしまま花
は香にたつ
いくばくの残花淡々咲かせつつ痛みに似たる春め
ぐりきつ

噴くばかり花溢れしめし日もありき乱るるなく迎
えむわが凋落の日々
白日に巨幹あらわに曝されつつすでに空洞となれ
る過ぎ去り
かそかなる命脈支う老木に慈愛のごとき今日の落
暉は
幾百年永らえてきし樹魂秘め暮色の中の老い寂か
なる

使　命

カンビーナス　森　久子

寝つかれぬ夜は逝きたる友数え夜更の床に寝返り
をせり
伯人の嫁と意見の通じぬを殊更良しと恣意の日を積
む
笹の実をふくみ畦道歩みつつ不作の年と義姉は嘆

きぬ

「ただいま」と弾みし孫の声聞けばわれにまだある使命を感ず

人ひとり葬り帰途の街の灯はあたたかき現世の救いとも見ゆ

紫の穂草のゆるる丘の上今在るいのちいとしみて佇つ

僅かなることに苛立つこの日頃暑さのゆえとばかりは言えず

年齢を問われてさかさに答うれどやはり老齢七十八歳

異国にて桜や梅の咲く里のそぞろ歩みは郷愁そそる

来し方を顧みる日の多かりき独り言云いつつ濯ぎものする

老の日々

バストス　森重　季好

町住みの古き家跡のやせ土に菜園つくり老の汗かく

やせ土を耕し水かけいたわれど陽光そそげば強くかたまる

マンガ樹とアバカテ大樹の散る黄葉の木蔭は涼し老いしこの身に

落葉をば肥料にせんと穴堀りて投込むことも生甲斐の一つ

やせ土に鶏糞入れれば蟻群が道をつくりて運び行くなり

殺しても殺しても増える蟻の群その巣探してデテホンあびせる

既に播きし野菜の種が発芽して生のよろこび老身に伝わる

いつの間に蝶が産みしか青虫がコーベ若葉を喰い
荒しおり
病む腰を幾度もたたき働きて木蔭に休む老のやす
らぎ
若き日の無理はきかねど程々に汗かく日々よ卒寿
も過ぎて

車窓の雨に

バストス　森重　扶美

遠く隔たる日本といえ目のあたり佇つがに吾娘の
声が受話器に
桜吹雪のさまを伝うる孫の声受話器に聞きてほの
ぼのと居る
久々に望む山々の連なりに吾が眼潤う聖市への旅
油草野を彩りて秋という寂しさ払う華やぎを持つ
心通わぬ人となりたる哀しみを持ちて旅ゆく車窓

に雨が
條なして車窓に雨の滴るをわれの泪と見つつ旅ゆく
何時の代にも「いじめ」はありき「ヤソの子」と嘲られたり今亡き吾子も
鮮烈という他はなし火焔樹は燃え咲く花を天に掲げて
香料のほのかに匂う浴室に一と日のよごれ泡なし流る
繰返しオルゴールのねじ巻きて聞く幼心となりて今宵は

麦の穂

ウライ　室伏　誠二

幾挺か秤りて最も軽量の最小型の鍬を買いたり
数日を続きし雨に麦の穂は清しく白き根を出して

居つ

夕空に雨雲少し浮び居てレンズをとりて気圧計見ぬ

夜々日々に大きくなりゆく甘藍の玉を五指もて押えてみたり

拝賀式高年層の多くして若年層の少きを憂う

月明の麦穫りし畑白く続くユーカリ林にウルタウの啼く

日本字の新聞を購読する者は吾が村に二軒のみとなりたり

鍬の刃に鑢をかくるわが側に野飼の若鶏近よりて来ぬ

雑作の地帯となりし此の周辺チコチコの鳴声絶えて久しき

月明のユーカリ林に繰り返し啼くウルタウの棲息を喜ぶ

雑　詠

サントアンドレ　　中井　喜躬

記念号祝福こめて歌詠めば古き表紙の樹蔭懐かし

年数を重ねて伸びる椰子の幹葉蔭に実る伯国短歌

新聞の古りし切り抜き黄色みて父の遺作と我が歌もあり

半世紀過ぎし全伯大会の歌稿に残る我が歌を読む

忙しき職務に追われ作歌せぬ時代も過ぎて停年を詠む

生活の粥とて慕う日常の小さな詩情我詠みいくも

低く聞く隣の風鈴爽やかに夏の日暮れに涼しさを呼ぶ

停電の階段昇る旋回に目眩覚えぬ高き住まいは

公務員の停年過ぎて久しかり昔の部下に時折は会う

月毎に会員集う昼食の談話に伸びる社会交流

朝顔の花

モジダスクルーゼス　　中村　教二

履歴書など生涯に書きしことのなし農に生ききて
八十五歳

視力いたくうすれし妻が手触れつつ朝顔の花数え
ていたり

落日の隠るるまでを見ていたり寒のゆるみし日だ
まりのなか

連れそいて六十余年こもごもに犒いの言葉きくべ
くなりぬ

八十をこえて生くるに老二人生命線などにふるる
ことなし

見ゆるとも見えぬともはや半盲の妻と見ており昼
のバロンを

今は早帰ることなき故里を異境の如く思うことあ
り

この国に骨を埋むる我なれど言葉は遂に身につかざりき

去年今年遂に見ざりし蛍火を話題となして秋たけんとす

ペースメーカーつけたる後の確かなる心音をたのみわが日日のある

朝の合唱

ロンドリーナ　中西　静世

朝光の広場に集い時間待ちハミングはいつか合唱となる

エナメルの光る手指にふと思う濃きアメチストの指輪欲りし日

ふと肩をたたかれ応ずる挨拶の新鮮と思う今日の集会

紫の支那服にあこがれし若き日のありて思い出今

も華やぐ
カルナバール放映にも飽き休日の所在なくいてなが
き一日
問う事も応ずることもなく独り節電停止のニュー
スきく夜
街路樹に陽を避けながら真昼時今日が期限の支払
いにゆく
思わざる疲れに外出を悔いながらペーパナイフの
小さきを買う
適者生存厳しき世代と思いつつ別るる孫と肩抱き
あう
体調の悪しきことなど書き止めて日記いささか愚
痴めくものか

孫　　サンパウロ　中野　光雄

孫を待ち名付け乞われて新婚の息子の電話に心浮

き立つ

ファックスで日本の孫の名を付けて親父の実感噛みしめにけり

五月晴れガルボンプエノに鯉のぼり端午の節句孫は日本に

初孫は日本生まれの男の子強く育てよ祖父の願いぞ

初孫にうぶ着を送る楽しさよすくすくのぴよの願いをこめぬ

初孫を抱きしめて泣く喜びを亡き妻と分かつ豊橋の駅

初孫をみることもなく逝きし妻墓前で語る孫の可愛いさ

絵が売れて日本の孫にプレゼント小犬のついたカミゼツタ選る

孫たちとにぎやかに語る我が友の白髪に滲む生活

の詩（うた）
孫たちとたわむるる友ほほえまし我が孫日本でいかにありなん

肩はば

コチア　中沢綾椒子

桜園に吟行せし日のこの一葉師も歌友らもすこやけくあり
師を囲みさくらの下に写りたる形見となりぬこの一葉は
年号を迫いて読みゆく師のみ歌八十五年でふっつり切れたり
娘を逝かせ傷心の友の後姿たよりなげなる肩はばせまく
女には女の話題店内に見知らぬ人と茶をえらびつつ

その立場言い自嘲する友の顔見つつ言葉なし他人
ごとならず
生き来たる時代につれて唄い来し曲は忘れじなつ
かしの曲
どの国の民の別なく老い人の好むは大方古き曲目
山なみの遠くかすめる雨あがり今日は晴るるかは
た曇り日か
その背なにピッコンつけてとりすます人は悲しき
己が背みえず

こだわり永き

サンベルナルド　　西谷　寿穂

渡伯して六十五年移転七度何れの郷も皆懐かしき
ブラジルに古りて吾が恋う郷あれど竹馬の友居ま
す古郷は
永久にふる里を離れて移転多かりき子等のふる里

いずべなるらむ

移り来て六十五年傘寿迎う混血の孫訪う日は近し

漸くに混血の孫訪わんとすこだわり永き吾が来し方の

湯の宿で会いし旧知の同朋とゲートボールに刻を忘るる

縁深き旧知の消息尋ぬるに聞いて驚く犬猿の仲

帰り支度終えたる若き婦人等が名残りに囲む盆踊りの輪

かしましくベンチビー鳴く昼下り青葉も見えぬ日盛りの街

春たちて嫩棄のそよぐ公園におそい来る如ベンチビーの声

夏の譜

サンパウロ　西田　季子

亡き夫を心に持ちて訪う苑にオンゼオーラの花は
未だし

肉質の葉を寄せ合いて盛り上るオンゼオーラの苑
の茂みは

水の中にて鈴をふる音に似る雨の中なる教会の鐘

わだかまり溶けしゆとりか髪ながき嫁は朝をピア
ノに向う

一つ一つ命を持ちて飛ぶ穂絮盛夏夕べの光の中を

つりさげし瓶の砂糖水呑まむとししばし争う蜂雀
三羽

ハンモックの揺れに任せて眺めいる瓶の砂糖水呑
む蜂雀

前山の一角白く霞みしと思うや忽ち驟雨は至る

大夕立シャペウデソールを打ち叩き海辺に虹を懸
けて晴れたり

なげかいは嘆かいとして海に山に子に従いて年越

えにけり

北　斗

福　博　　野村　康

渡伯すと決りて父は幼かりし吾と弟に北斗を教えき

船室のペンキの匂いに耐え乍ら渡伯せし父母こそまことパイオニア

歩けるを幸せと思い山の端の残んの月を共とし出でたつ

節電に使えずにある炊飯器たまには覆いをとりて眺むる

あれからは早一と月も過ぎたるに未だ報道は同時テロニュース

明日を発つ娘と「一力」で会食し無事に帰れと暫しを語る

夫逝かせ十三年にもなりぬれば「ポッボツ来んか」
と待たるる思いす
逝きし子の形見の鈴を失いてしき降る雨の音胸に
沁みいる
降り出でて風の音さえつのる夜半思いはしらす夜
学視る娘に
帰省の子を最終バスに待つ時刻傾く銀河に十字星
を仰ぐ

日　頃

サンパウロ　小笠原　富枝

三〇〇号に至りし「椰子樹」この土のひと塊ならむ
移民の心
新着の椰子樹誌の文字見詰めいて老いさぶ吾も一
歩一歩をと
振り返る齢かついと棚隅の本抜きたれば岩波師の

追悼号

飛行雲伸び行く果たてその果てを想いおり未だ地上の一片

噴水もふかざる日の暮れ遠近の木下に未だ浮浪者物乞い

脇道の草生に座しつつ舞う鳥を綴りつつふっと吾も一つに

「風来」の語感掠めき水を乞う男拒まれ帽子ふりつつ

残生を気遣いくるる子等に拠りアパート暮らしか何時の日土に

去るべかり然れ四十余年の歳月を経たる屋内の一つ一つが目に

墓碑の文字なぞりつつおり「移民なり」の二語をついに父六十七歳

南へいそぐ

サンパウロ　　岡本喜代子

胸裡にやさしき心と修羅の炎を共に棲ませて年越さむとす

ふつふつと湯は滾り来ついささかのうどんを茹でるひとりの夕餉に

われ病まばこの幾鉢も枯れゆかんなど思いつつ水をかけおり

過去ばかり浮かぶは老いの兆しとも目を閉じて聞く時刻む音

発ちゆきし人の温みのある椅子にテールランプの赤を追いおり

それぞれの表情みせて寄せ返す波はやさしく渚を濡らす

便りなきことも一つの意志表示かたち変えつつ往く

秋の雲庭隅に咲きたる真紅のアマリリスま昼かそけき風に揺れおり

バスの窓の夕闇次第に濃くなりて南へ急ぐわれは旅びと

バストスとう韻やさしきその町に山中翁の名よ永遠に

征野回想

L・パウリスタ　岡本　利一

予期したる召集令状受け取りて勇み入りたり皇軍部隊に

短日の現地教練受けし後鉄道警備の任務に就きたり

延々とつづく鉄路を昼夜なく警戒つづけし苦しき任務

夜の闇にひそかに爆薬しかけゆく鉄路爆破のテロ

に悩みぬ

突然に漠口戦に参加せよと緊急令を受けしわが隊
悠々と濁水流るる長江を遡行しつづけし百の軍船
熾烈なる銃火に散りし戦友（とも）いくたり征野の
土を血に染めて逝く
もくもくと入道雲が空覆う中支の征野に玉音聴き
ぬ
北の野に南の海にはらからは祖国に殉じ征きて帰
らず
大戦に逝きても詮なきわが命神の加護かや異郷に
ながらう

ベンテヴィ

サンパウロ　　岡本　早視

庭先で残飯漁る小鳥の群時に残飯無くなるまでを
ベンチヴィたまに来たりで何方へか餌を銜えて去

るを見つむる
この年は花弁の大きく咲きし蘭昨年の花の倍ほど
の花
何をなすことも出来ずに洋らんを育てて吾のたの
しみとなす
三つ四つ部屋に飾りて眺むれば何れも遜色なき花
の色
カニ蘭の横にひろごり咲く花のあたかも日傘をさ
したる如くに
君子蘭の一つの芯に十余り三つの花芯次々と黄金
の色に
部屋内に「至誠」の文字と「和顔愛語」の二つの額
を朝夕眺む
既に吾蘭の移植の出来ざれば妻にあれこれ頼み今
日一日を
桜木の株庭に伸びてきて未だ四、五年待たねばと

のこと

米と移民

サンタ・マリアナ　　奥山　弟樹

川近き黒土に米を蒔くことを父は無上の喜びとしき

食うだけの米の穫れれば殿様と母口癖に語り聞かせき

カフェー穫り多忙を極め米蒔きの遅れし時も父は蒔かせき

老いて尚僅かばかりの陸稲植え孫の機嫌をとりて穫らせき

父母逝きて命日さえも忘れがち今は黒土荒れしまなる

吾持ちし価値観故か一度だに大農場主の夢を見ざりき

大農場の夢を見ざりし吾故に子等はひたすらその
夢を追う
第三の吾の故郷は北パラナブーゲンビリアの自生
する土地
望郷の心慰め日本名を土地や村に付けし移民よ
宿命と思えど混血余りにも早きが寂し吾等二世は

犬の眼

スザノ　小野　政子

轢かれたる犬の眼のうすぐもり空映しおり子の腕
の中
サーカスの去りたる後の草原にタンポポの架風に
吹かるる
廃艦の瓦礫の中に生え出でて百日草の花は陽に映
ゆ
光体の如き白鷺一羽佇つパンタナールの沼のほと

りに

身のめぐりの人ら次つぎ世を去りて無援の雲は風に吹かるる

失うものすでになしなど言い乍ら朝の櫛にからまる抜毛

十四にて自死の妹の声聴こゆ生きて無残を見よと言う声

育てたる者の消息思いつつ夕べ孤りの影踏みてゆく

大地より湧きて大地に還る水樋より落つる時にきらめく

パン買いに出づれば日差し温とくて道辺のタンポポ手折りて戻る

ひとりごと

サンパウロ　小野寺郁子

物置きに忘れ発生期を過ぎしサルサの種をしばし
掌に乗す
ひとり言唖もするらし膝に目を落とし少女はひそと
手語なす
行き交いし婦警の防弾チョッキよりつながりてゆ
く暗き思いの
因習のプルカ脱ぎ去るアフガンの女性の笑顔みな
彫り深し
「幸せの木」は女男揃い繁れるにかげろうのように
なりてゆく夫
取って置きの時間もて読む手に入れしこの一冊の
重き内容
複写機よりかく易やすと滑り出る幾夜か苦しみ書
きし原稿
友を得て友を亡くしぬ歌に拠りいそしみ合いし交
わりの中

枝なして続けるわれの生命線いま何分の何ほどの
生か

いま一度年女となることありやねんごろに生きむ
この午の歳

過ぎし日のこと

サンパウロ　大塚　清

風たてば竹群さわぐこの耕地邦人の数減りてしず
もる

バスの窓何の風情もなき川をやはり見て過ぐ橋通
る時

歩を止めて満開の花見上ぐれば風なきに散る花び
らのあり

日本人だから日本が気になると言いたる人の声が
沁みる日

友の死を紙上に知りし日の夕べ植民地時代の若き

日が顕つ

風邪予防の注射を受くる列に居て民族の違い遠のきて居り

降伏を知りて怒りてくるいたる従兄弟も老いて戦時を語る

世を去りし父母の齢がふと浮ぶ貧しきままの姿がかなし

指差せる彼方に幸せある如く移民像たつサントスの浜

バスの席ゆずりくれたる青年がにわかに心近き思いす

秋の色

ジアテーマ　　尾崎都貴子

木々の枝の這う潮の上光りつつ島めぐる船に風は涼しく

入海の汐おだやかな島めぐる船は人らのさざめき
乗せて
汐風の流るる小高き砂浜の椰子の菓かげに憩うひ
とき
夕映えの美しき中彫像のごとく抱き合える若き二
人は
ダムの水せき止められて河底の草間に点々と水の
光れる
蒼き葉を浮べて澄める河なかを光となりて走る魚
あり
絵のように外国船を景にして遠海たなびくまぼろ
しなして
夢のごと老い果てしものよこの国に六十七年の重
き歳月
夕やけの空の深みへ帰りゆく鳥の影さえ秋の色も
つ

秋めきし光の中のパイネーラぽつりぽつりと咲き
残る花

光の浪

バウルー　酒井　襟造

身の疲れはぐるる思いに雨の降る朝を幾時もい寝
すごしたり

一期二期水稲植えてこの国の常暖かき天恵思う

白鷺の降り立つ稲田吹きすぐる風は光の波となり
ゆく

穂孕みに入りし稲田を渡る風みどり豊かに葉波打
つ見ゆ

青草をしきて午睡のまどろみに背に透りくる土の
ぬくもり

土灼けてほてりの返す烈日の照りきわむ畑除草機
進む

この雨季のわけても長し日々記す雨量は迫る最高記録に

雲間より射す夕光に立つ虹の映ゆるしばしを鍬休め居り

登熟の稲黄に染むる夕光に晴れゆく空かあきつ群れ飛ぶ

静かなる雨の夕べを窓に寄り思い出の曲をハーモニカに吹く

ダリヤ一輪

グアラ　桜井　正巳

雨季入りの雨にさそわれ太き茎伸ばせしダリヤ一輪咲かす

懐を広げ団扇の風送る大夕立の降りすぎにけり

日本語もブラジル国語も未熟にてあの世の言葉が気がかりとなる

黄と真紅ダリヤの咲ける今朝の庭触れれば冷たき
露雫れたり
ひまご二人未だ幼く騒がしく年末年始のわが家乱
さる
年明けで八十五歳の体調も恙なかりき灯明点す
移植せし草花赤く咲きにけりその存在を示すがご
とく
集いたるやから帰りてひそやかなり眼移せば薔薇
咲き盛る
絆創膏引き剥がせしに痘痕の消えて新しき身の一
部分
身をまもるこれが唯一の道なりと能なきわれは利
己主義通す

未　来

サンベルナルド　　柴倉　知余

ふり返る事をタブーと決めてより心かるかり老い
ゆく吾の

去年よりも早ばや咲きしカニサボテン見せたき夫
は逝きて久しき

未来など思う事なくたまゆらの茜の空に心あそば
す

娘の生活みだして通う目の治療心でわびつつ車中
に坐る

放心の吾の心に浮かびくる在りし日の君のゲート
ボール姿

子育てに昼夜働きし過ぎ去りよ一人の今をしずか
に暮らす

雲間もる光は神の如くなり息つめ仰ぐ雨後のしば
らく

出稼ぎに行きたる吾子の初便り泣き笑いしつつ幾
度も読む

残生の短かさしみて思う日々強く生きんと心に誓う

移る世のきびしさ沁みて思う日も風はやさしく頬なでてゆく

遺言なく

リンス　柴尾　小岱

わが余生にあたため抱く遺言なく集中治療室にて妻は逝きたり

治療室にて消ゆる命の一瞬に妻の脳裏をよぎりしはなに

地下までもこの光明をと仰ぎおり妻葬りし夜の十三夜月

目覚しも孫の写真もそのままに亡き妻の部屋灯されてあり

亡き妻の手入れの鉢のアマリリス七・七の忌もす

みて咲きたり

お薬の時間と朝々起されし妻の声なく一年忌来る

妻の墓石に朱き粒の実散らばるを持ち帰り来ぬ何するとなく

夢に来し妻の若さを娘に言えば髪の色はと目を輝かす

妻の欠けし卓を囲みて己が幼時語れば娘ら声あげ笑う

嫁ぐ日に貧しき父母に持たされし妻のミシンも遺品となりぬ

夏の日々

バストス　信太千恵子

曾孫にアイと命名すこやかに育つを希い家族と祝う

この夏の流行の色と女店員笑顔よろしく客をもて

なす

薄布の衣装の似合う人あふれ宴会場は涼気満ち満つ

花苗を鉢に移して娘に持たすいささかながらお礼の気持

軒端に巣ごもる鳩の動くなく朝な庭掃くわれと目が合う

裏庭の古木をつたう白蟻を見つけてさてと梢仰ぎぬ

弛みたる心ひきしめ編むレース二段目模様手なれて揃う

晩年の私の出来るボランティヤ句碑の廻りの草抜きをする

乳におう小犬を抱けば温く腕にかすかな鼓動つたい来

いたずらの小犬追いかけ新らしき皮のサンダル取

り戻したり

時の流れ

サンパウロ　志伊良二世

君に従き此の道を行かむと誓いしが吾の希いは報われずいる
成し得ざる事を自ら恥じにつつ悔いの一つと嘆きていたり
無力なる弱さ自ら感じつつ人の説教も心してきく
刻々と時の流れの迅くして空自を埋めるいとまもあらず
一杯のビール飲み干すこともなく従順に人の中に生きゆく
清風の吹き入る窓に身をよせて生きゆく息を深々と吸う
平穏と思うひと日よ夏みかん一つをむきて口にし

ていぬ

病みている身に見る空は碧々と湧きて流るる雲の
迅さよ

人々の願う平和よ来たれ早や吾も祈りて新年迎う

神経の疲れし身をば清めつつ此の年も又生きゆか
んかな

友

サンパウロ　重道千代子

咲き盛るは束の間にして牛蹄花に雨降りつづく花
散らしつつ

友住むはあの窓あたりか目交にみて下りゆくサン
ジョアキン街

今日一日も事なくすぎぬボアノイテ一人言いつつ
階あがりきぬ

柔らかく小をき掌とればほのぼのとぬくもり伝う

曾祖母われに
澄みわたる秋の空にも語りたし視力もどりしこの
やすらぎを
揺れやまぬ青葉の影をうつす窓我が目に眩し朝の
陽光
亡夫の墓前ととのえにつつ挿す花に今年の盆の雨
ふくむ風
おのもおのも子等の詣でしあとみえて亡夫の墓標
に花あふれおり
真すぐな目を向け頬を寄せてくる若人孫よすがし
触れ合い
幼な顔いまだ残して卒業の今日を装うロングドレ
スで

東北伯の旅

ロンドリーナ　島田　普

ボア・ビアジェンの浜辺のホテルに旅装とく念願
なりしレシーフエの旅
八階のホテルの窓より挑むるは朝陽輝くレシーフ
エの海
水平線の彼方に大なる陽が昇りレシーフエの海漣
映ゆる
海沿いの遊歩道は六キロ半朝より老若男女が歩く
街中を流れる五つの川ありて南米のベニスとガイ
ドは言いぬ
味の濃き食事の中なるものなるかアレルーギーに
顔をはらしたる妻
レシーフエにオリンダ・ボニート・ジオンペソア見
所ありし今度の旅は
オランダの侵寇に反撃せし昔ガイドは語る誇らし
げにて
南米の最も東に位置をするパライーバ州のこれの

灯台

ジオン・ペソアの街は奇麗に整備され意外に少い
物乞いの数

氷河観光

ソロカバ　　無由真佐子

八十四歳は旅行の限界という夫と連れ立つ氷河観
光の旅

旅客機の高度上りて目交に白雲まぶしき光を反す

サンチヤゴのおそき朝明けバスに見るポプラ並木
が旅愁を誘う

百五十年は腐らぬと言う木材の名を「アレルヤ」と
聞く旅の途路

碧深き海の向うに島見えて「帰れソレントへ」の歌
が口つく

オットセイの群を遠くに眺めつつ夫もわれも着膨

れており
老いふたり最後の旅と思いつつ互みに肩のほこり
を払う
暮れ初めし島を眺めている間にも南の空は黒ずむ
早し
流氷の一つひとつの表情に魅入りてこころ華やぎ
ており
幾億年の氷河間近く眺めいて己れを忘れただ立ち
つくす

木の葉

サンパウロ　社本　藤野

冷気満ちていまほの白く明け初むるこのひそやか
な朝のひと刻
そよ風を微かにうけて花びらは宙を舞いつつゆる
やかに散る

月仰ぎ星をみつめてただ一人過ぎ去り思う窓辺に
佇ちて
吹く風の冷たきリズムにのせられて落葉は踊る震
えながらに
夜半醒めて窓をあくれば入りて来るそよ風そっと
囁くごとく
川に浮く木の葉のごとく過ぐる日日刻の流れには
こぼれながら
かずかずの憂き過ぎ去りを振り返れば流れに揉ま
るる木の菜にも似て
アフガンの難民大き荷を頭にのせ逃るるさまはこ
の世と思えず
一片の良心もなきテロリスト一挙に何千の人を殺
めて
万物の霊長と誇りし人類が何故かくも世界を破壊
す

訪日雑感

サンパウロ　摘草ひろし

最大の活字で訪日観光を煽るがに広告載せし邦字紙

望郷の想いは内にさりげなく訪日団を吾は送りぬ

叶わぬと諦めいたりし訪日に唯黙々と雲間を馳せて

空港に迎うる人等ひしめきて一際高し吾が名呼ぶ声

故里の春陽は穏し山並は萌ゆる若菜の緑が清し

帰らざる子を待ちわびて逝きませる父母の奥津城に伏して声なし

長年の不孝を詫びてぬかづけば奥津城にひた啼く山鳩の声

風甘く若葉が匂う阿武隈の賎家掠めて郭公の声

郭公の声に明けゆく山並の緑が清し春の故郷

阿武隈の高処に佇ちて西方に毅然と聳ゆる磐梯山
望む

来世あらば

グアイラ　末岡　芳三

鮮やかなフランボヤンの盛りよとほめし人あり墓
所に行く道

古里の桜吹雪は目に残る若き心を傷めしままに

降る雨に枯野の草は根づきいて小さき花が実りを
急ぐ

過去ありて未来につづく一瞬を入陽に眞向い飛ぶ
鳩のあり

老いてより釣になじみぬ尽くるなき川の流れと時
を友にす

今月の払いすませてゆっくりと茶漬を食べて昼寝
にぞ入る

通り過ぐるかぼそき足音夜の闇に聞きて見えざる
悲しみにあう
曲節の多きひと代を過ごしきて神の誤算か八十を
越す
再びは来れぬ人生老いてより生きゆく当ても力も
あらず
花に蝶匂いと色に日は満ちて来世あらばかかる風
景

長逗留

リ　オ　　蓑戸　勝子

ナタールの集いに一世は吾一人今更に思う時の移
りを
老いしかとつくづく思うバスの運転手手を伸べて
吾を引き上げくるる
問いたしと思いし義妹の亡きことに気づきぬ一人

昼餉なしつつ
わが膝の痛みを案じかけくるる娘等の電話に想い
安らぐ
補聴器を付けても聞こえ難ければあいまいなれど
相槌を打つ
週に一度訪いくるる人の出来しこと喜びて共に折
り紙を折る
時告ぐる鶏の声さえ懐かしく久々に来し庭に佇む
髪続くと向かう鏡の一面に朝陽に輝う庭木の青葉
螺施巻きとう療法を娘より受けながら隣家に唄う
おうむの声聞く
螺施巻きとう療法と鍼を娘より受け長逗留の今日
は帰らむ

夫の足音

福　博　　杉本　鶴代

見果てざる夢を追うごと夫と吾旅する故国は紅葉の季節

起きて来る夫の足音聞きながら湯気立つ鍋に味噌を入れおり

暑き日が続きて足のだるき日は薬草を煎じ夫と飲みおり

寄り添いて街を歩めば冬の陽がほかほかと照り背のぬくとかり

三十年芋を作りしこの土地も家建ち並び町となりたり

入院の夫を看取りてゆとりあり繰りかえし読む空穂の歌集

一時間遅れし汽車を夫と待つしびれきらして苛立ちており

春の海渚歩めば潮の香に身は包まるる老いし二人の

金婚を祝いてくるる子供等の言葉に甘え訪日の旅

南米一のコチア産組も今は無く銅像のみが昔を伝う

巣立ち

タピライ　杉浦　勝女

抱く間なく負うて育てし子六人恙なく皆巣立行きたり

晩婚の娘も嫁ぎゆき嬉しけれど心のつかれ老いの身に沁む

巣立ちたる子等偲びつつ老い二人広き山家に侘しく暮らす

嫁ぎゆく吾娘へのひと言胸つかえ言葉にならず落ちくる涙

宮まいり可愛い姿の七五三赤きコツポリの孫今は亡し

気にかけし祖父母と孫の忌をすませ心安らぐ吾に
蝉の声
年毎に弱りゆく身を口にせず今日も夫とゲート
ボールへ
孫は逝く祝のポーロ胸に抱きにっこり笑める顔を
のこして
椿咲く白も紅も八重なのに散りゆく時はそれぞれ
ちがう
移り来て苦楽を共に越えし老い恙なくして新世紀
迎う
雲の峰ひとつくずして池の面の秋風やさしく通り
すぎゆく

大陸の風

アルジャー　多田　邦治

大陸の風にまぎれてゆきもせずあやうき性のいま

だ変らず
水の面に乱れてやまぬ灯の影に振り向きくれぬ歳
月思う
カロッサの男小さく手を上げるいつもと同じ黄の
シャツを着て
野の路を歩む人見ゆことごとく尖る穂を出す草の
あいだの
草の穂は光となりてゆらぎつつひそかに夢をたく
わえている
子らすでに巣立ちて久し犬そして小鳥の墓を庭に
残して
ひとひらも花まだ散らず春の木の下ひっそりと土
湿りおり
風下に顔向けるとき何もかもふいに我より遠ざか
りゆく
少しずつ記憶のかけらを捨ててゆく心地に庭の雑

草を抜く

鳴き渡る鳥のゆくえを追いながら今日の終りの充実にいる

露の玉

サンパウロ　田口　愛子

外燈のとばりで昏れゆく夜の街車の尾灯きらびやかに見ゆ

高原の都市を訪れし夏の風咲き満つる花としばし戯る

初夏の風にさゆらぐふくよかな花の莟はくれないのいろ

微かなる風が生れしか緑葉はわずかにゆらぎ露の玉散る

うつし世は一夏に入れり吹く風に咲く花の辺に匂う初夏

ふたりいて寂しきなどとは思わねど今宵の月に心は潤む

くれないの桜の花を啄める小鳥の心は美しからむ

移住せし日の夢に似て豊饒な雲は紫紺の空を流る

る

遠き日の少女の夢を育くみし母国の山河訪う日のありや

青き目の異人の心に恐れもつ殺人強盗易々と成す

咲けば散る

高原ます子

麻痺の手を朝な夕なに手当てして一進一退癒えて何せん

めまぐるしき世界の変貌のさ中にて従いて行けざる老の嘆かい

もろ肌の切開跡も生々し今また腎の移植待つ嫁

咲けば散るこの必然もふとわびし一日限りの花の

むくろに
舌先に欠けし歯さぐる癖つきて夕べとなればせん
なく痛し
コツパムンドの選手の国を地図に見るアフリカ・
カマロン吾が未知の国
再びは今日此の時は還らじと焦燥しばし身裡をは
しる
幾年の積もる話に夜も更けて寡婦となりたる妹を
もてなす
この妹も苦労せしなり過ぎ行きを物語るがに白髪
多し
シャム猫の声透る夜を寒々と月は澄みつつ窓辺を
照らす

異国茫々

サンパウロ　高橋　暎子

汚染されし大気を洗い夕さりの都市を包める銀色
の雨
ひさぎつつ路上の幼なの差し出だすバラひと束に
降る街の雨
悲しみのいやます中に受話器置く生れしもひとり逝
くもひとりにて
向学のこころますます失せゆける移住して得しも
ののひとつの
一点の明かりたちまち迫りつつ轟きて異国の地下
電車来る
この国の四月祖国ならかんなづきパイネーラ旱天に
花々かかげ
祖国よりはるかに長住むこの国の桜の色の花散り
てゆく
そこまでと書いて褒衣に家出でてフランスパンを
抱きて帰る

わが生みし娘（こ）を母とする三世の男の子と食う
ぶ湯気たつ雑炊

咳すればかすかに痛む胸の奥明日は思わず今あれ
ばよし

夕影の道

サンパウロ　高橋よしみ

描きし夢は夢に終りぬさりながら悔いるものなし
夕影の道花芽未だおさなき苗をいとおしむ晩成と
云う夢にたくして

すこやかに現あるいのち気負いつつ茗荷の株を植
え終えにけり

軟禁の虜囚のごとく二人居の今日も家内にありて
養う

コーヒー碗片手にゴヤバ樹下に佇ち熟れそめし実
をしばらく仰ぐ

日毎月毎滅びにむかう人の身を看りて雨期の過ぎ
なんとする
折々の電話のベルに弾みつつ明るく応う恙がなき
身は
門口に数多房なす蔓バラを仰ぎ往く女と微笑みか
わす
薬湯に欲しと乞われし白バラの咲ける数多を与え
惜しまず
唇に吹く草笛ついに鳴らぬままくわえて居たり褪
せし唇

花の季

サ・ジ・ド・リオプレト　高橋唖蛙子

花の季終え冬もはや過ぎゆくと凋みし仙人掌の花
を摘みおり
フロールデマイオは「五月の花」と訳さるるあえか

なる花に今年も会えり

仙人掌の盛りも過ぎぬ汝の亡きこのいち年の月日
過ぎ

ゆき花の季過ぎゆきにつつ仙人掌に逝きし汝の影
を重ねて

花期過ぎし蟹仙人掌は緑濃く逝きにし妻の遺した
るもの

花の季ながき仙人掌の幾種かを遺して汝の黄泉路
迅かりし

惜しみなく花の命を咲きつぎて蟹仙人掌は柵を彩
どる

花溢れ鉢を彩りとりどりに蟹仙人掌に経たる歳月
蒐集のひとつひとつの仙人掌にまつわりし汝の物
語はあり

旱長き時も過ぎつつ仙人掌の鉢ことごとく緑濃く
なる

今は昔

サンパウロ　　高橋幸太郎

床の間の茶花の侘助楚々として静かな茶席に気品を添うる

セー駅でふと目に入りし過去の人追憶残し他線に消えぬ

短冊に「寿司が欲しい」と書きありし老人施設の七夕まつり

ヘリコプターにてイヤホーンごしに会話する広がる視野を指さしにつつ

鍛帳の南銀マーク懐かしく今は昔となりしが寂し

慈善バザー自ずと足は古本コーナー安くて好きな作者の本を

果てしなき青空仰ぐひと時はグランド背にし一人の世界

老若も男女国籍差別なくふくらむその輪盆踊りの

輪

法要のお経は何も分からずに頭垂れいて故人を偲ぶ

大小の遺影を拭きつつしみじみと逝きて八年亡妻思う

雪割桜

カンポス　高原　万里

雨降れば日暮れは早し庭先にサビアせわしく餌をひろうも

歩めればまず好Ｌとせむ町に来て羨しく見居り人等のあゆみ

枝うつりたわむれ遊ぶ小鳥等がついばみ散らす雪割桜

軒下にたたずみ居れば俄雨しぶきを上げて目前走る

夫生れし辺戸の岬の歌見い出かぎりもあらず夫の恋しき

ひたすらに短歌の道によりゆかむ老いに力のあらむかぎりは

尾根越えて流るる雲も吹く風も身にはしみつつ山に秋来る

秋の空ゆうゆう流るる千切れ雲何処の果てに消えなんとする

窓くれば身にもしむがの空の色これこそこれよカンポスの空

はるばると会いに来りぬ移民像逝きてかえらぬ我が姿とも

ブラジル点描

ピラシカーバ　　高津　文子

息子のもとに行かむと思い墓所訪へば梅もどきの

実赫く耀う
気の重き税関も無事通過せりあかるむ空にふかく
息すう
久々にうからと囲む円卓のかたえの鉢に夏桔梗咲
く
移民せし人の哀歓鎮めつつサントス港はふかく蒼
すむ
その昔の奴隷の上陸地カラベーラ潮騒穏しき朝霧
の中
栄枯といオーロブレットを訪ずれば十字架あまた
山峡にたつ
街の灯は百万ドルの景とかやリオデジャネイロの
夜の橋わたる
バイアにて椰子栽培のならずして人去りし野に葉
ずれ響かう
騒めきしバイアの磯に人も無し流木に坐し残月仰

ぐ

アマゾンの暗き水路のふいに開け大鬼蓮の群がり
咲ける

輝く星

サンパウロ　竹山　三郎

丘の上に虹を眺めて娘と二人消え行くまでを惜し
みつつ見し

家族中夕食したる日は遠く子等巣立ちゆき又二人
きり

星見れば父母偲ぶ人間は死ねば輝く星に変ると

北伯の幾代の飢えに痩せやせて背丈も伸びず堪え
て来し民

霜やけもあかぎれなども想い出の中に消えつつ二
十一世紀

街路樹の落ち葉掃きつつセノウリンニヤ携帯ラジ

オのリズムにあわせ
オリガミにカラオケ、スキヤキ日本語が世界語に
なる昨今思う
高層の窓より望むわだつみの広き彼方に初日は昇
る
悠長な訛で話すミーナスのシャレッテーロの愉快
な話
茫洋と山野広がるミナス州清冷の気を胸深く吸う

人と花

サンパウロ　竹山　敏子

夜の更けを二機の飛行機とび行きぬ何処の国へ行
きしならむか
窓ぎわに植えたる花の美しさ無念無想の心に見入
る
鉢植の花買いくれし吾娘なれど名も聞かずして美

しからと
この花は丈夫そうよと買い呉れしを庭に植えやり
朝夕楽しむ
娘の帰り今か今かと待ちわびで時計の数字幾度か
たしかむ
ガラージの開く音聞けば無事なりし吾娘の帰宅に
心安らぐ
此の頃は秋と云うのにまだ暑し冬の寒さを恐れつ
ついる
最高の学位得し人病む故に口で字を書き勤めには
げむ
不自由の極みに有りて目と口の動く倖せ力となし
て
余す無く命を賭けて生くる人神の如くに吾が前に顕
つ

歩をとめて聞く

福　博　　滝　夕起緒

青春をかけて働きし記念の時計ヅトラは秒を刻みてやまず

折紙の小銭入れの表紙にと奇抜なる模様の色紙を求む

ホットドギガラッパ添えて此の四辻の八重歯美しリトアニア乙女

スザノ寺院の朝夕打たるる鐘の音は我が住む場末にまでは聞こえず

投函に公園を突切る其の時刻に鐘が鳴り出し歩をとめて聞く

おおかたはゴム靴なれど靴みがきの女居て賑わう公園の一角

片時も止まるなく溢れ噴水の水は森の木々染めて育む

ダエー管轄の湖辺低地に移りきてファベラに住む
人は増えゆく
巡る季に違わずクワレズマ咲きたけて人の生活も
移りゆくなり
釣竿や麦藁帽など軒に吊し此の風景は二十世紀の
もの

晩　春

タウバテ　　田中　朝子

晩春の彩を聚めてあかあかとフランボヤンは旅路
いろどる
大風にマンガの木々の揺れゆれて苛烈な音に稚実
落とす
明太子だいじにいだき帰伯して日々の食事に古里
偲ぶ
大根の双葉に偲ぶ在りし日の母の味噌汁いまも香

りつ

我が積みしもの遺しゆくものとしてうまごらの会
話心して聴く

吾が裸に亡父の言葉がひそみおり時折うまごに伝
えんと出る

この国を共に踏みたるうから逝き独り来て佇つ移
民像のまえ

突発のテロ事件にてあまた逝き命価値なき世とな
り果てぬ

治安悪しくおどおどするに「テロ事件」「ユーロ移
行」と世の揺れ激し

しどろ世の黄昏どきを慣わしの列なして翔ぶ雁を
ともしむ

潮の温とし

サンパウロ　寺田　雪惠

覚めしなに浜に降り立ち貝掘ると砂踏めばはや潮
の温とし
山峡を染めて咲きいるクワレズマの夏の光の極ま
れる昼
足裏に探り当てたるあさりなりたわやすく我が時
を忘るる
それぞれの憩いはあれど木の蔭に採りしばかりの
あさり味わう
一つ鍋囲み昼食する時も話題おのずと苦労の話
あさり汁煮え立つ匂いに覗き見る葱のみどりに食
慾のわく
「これ位いかが」と味噌の量はかる確かな味を思い
定めて
朝凪ぎの向いの島蔭につながれし白きヨットの深
き静寂
ふる里の浜に遊びし想い出を呼びてせつなしパラ

チの砂に
カルナバル過ぎても続く猛暑なりしみじみ地球病
んでいるなり

椿のトンネル

福　博　　寺尾　芳子

砂採りし跡に広ごる水の面の返す光にしばし打た
るる
開きたる窓より今朝は匂いくる古希の記念に植え
し梔子
童話幾つ蘇らせる「アンデルセン」一日の命であり
し孫の名
秋の陽を傘にさえぎり幾年ぶり詣でし母の墓畔を
めぐる
七十歳過ぎて初めて乗る馬の目の優しさに身をま
かせゆく

干し薇水にもどせばうぶうぶと嫩葉ほぐれて故郷を恋わしむ

魚の目を好む幼き兄妹今宵はカレイをめぐる争い

「足摺」の椿のトンネル見に来よと米寿の叔母の切なる電話

「えひめ丸」の遺体収容されたるに謝辞を述べねばならぬ遺族ら

八十八の蝋燭の灯を消す祖父を囲める児らも口をすぼめて

藤

サンパウロ　富樫　苓子

この冬の寒さ遠のきパイネーラの若葉きらめく朝の陽射しに

久々のサビアの声にほのぼのと心ぬくめて今日のはじまる

まざまな小鳥の声を聞きとめて胸ふかく吸う朝の
空気を
大動脈手術せし夫快方に向いてようやく心安らぐ
きびしかる寒さにもめげずつぎつぎと藤の蕾は日
毎ふくらむ
手術後の夫癒え藤も咲き初めて心安らぐわれのに
ちにち
つつじ咲き藤も咲き初めフリージヤも咲きて明る
しわれの巡りは
そよ風に花ちらしつつ咲き残る藤はひっそり葉影
に垂るる
棚のささえ木にとまり鳴くせみの声すきとおる朝
の窓辺に
変わりる信号無視してわたる犬にしばしとどまる
車の列は

神戸収容所前で撮った写真

サンパウロ　鳥越　歌子

セピヤ色に薄れし写真神戸にて日本を発つ時撮りしものなり

日本に残りし兄も交じえいて我十六歳の乙女の日なり

波止場まで歩いて行きぬ街中は「蛍の光」で送りてくれき

送りの兄等と交せし紙テープ出航のドラにたちまち切らる

桟橋の兄の姿の遠のきて別れの一瞬ただに手を振る

瀬戸の海お伽の国へ行く如く波静かなり月さえ出でて

一夜明け円窓おそう波の山玄界灘は荒れにあれたり

船員は「お握りいかが」とたけりゆけど誰一人起きてもらう者なし

五十七日の航海終えし移民船ブラジルサントス港に着きにけり

省みれば長き年月経しものよ吾八十四歳の媼となれり

想い出の歌

サンパウロ　外山安津子

色あせし落葉のしおりのはさまれし古き詩集に浮かぶ思い出

限りある命を咲きて紅バラは悔いなき姿夕陽に映ゆる

ダイヤかと思える朝露鉢植のアロエの中にひっそり光る

空遠く父のおもいの通う日よ雲は戦艦大和となり

ぬ

なんとなく遠い昔が恋しい日父の写真はセピア色
して
今は亡き君の心の通う日よ心キラキラ瞬間（とき）
の花咲く
バラライカ君と呑みたいこんな夜ホームバーには
ボレロのメロディ
さまざまの心で楽しむホームバー今宵呑む酒みど
り濃き色
誕生日迎える息子に買うグラス嫁の好みも取り入
れ選ぶ
来世はやすらぎの世とつたえきく母よいこえと香
たき祈る

老後閑閑

グワペー　敦賀　葵花

クリスマス生まれの吾子が還暦を迎え一族聖夜を祝う

除夜花火速く眺めて草庵に一家眷族年越しの宴

新しき年を迎えて思うかな戦をさけてさ迷える民移り来し親子五人の吾一人今に生き伸び卒寿迎えぬ

梅雨のごとひねもす降りし小糖雨夜更けてなおも降りに降りつぐ

夜もすがら降りに降りたる雨やみて日の出る気配鳴りを聞く

霧雨の中小走りに戻り来て戸を叩くより明明と陽は

いつ仰ぎ見ても峨峨たる雲の峰裾にひれ伏す低き山山

対岸の見えぬ濁流突き進む三角帆いま風にふくらむ

悠然と風のまにまに葉を揺らす湖畔の椰子樹亭亭
として

小さき家

サンパウロ　上田　幸音

海越えて梅の表紙の初便り健やかにいませと姪の
筆跡

恙なく年重ね来て孫達の背広姿に眼を細めおり

杖上げて急ぎ足にて来る老爺を田舎のバスはしば
し待ちおり

赤錆びし線路渡れば草むらに墓標の如き道しるべ
立つ

湯上りにコップ一ばいの水を呑み今日の終りの灯
火を消す

山裾に小さき家の点々とここにも生きるきびしさ
のあり

訪日より帰りし嫁は吾が家こそ憩の場所とふとつぶやきぬ

つぶらなる眼こらして幼な児は玉取る猫を飽かず見ており

双の手を空に開きて散る花をうけむと子等は秋風の中

久々に日本着物を縫いおれば祭囃子が眼裏に浮かぶ

世紀を分かつ

サンパウロ　梅崎　義明

二〇世紀最後の除夜と集まりしうから並びてカメラに向う

酔芙蓉きのうの白花きよう赤く世紀あらたに日は昇り初む

西暦の二千一年かにかくに生きて手合わす吾が生

命あり
越えて来し永き年月苦も楽も過ぎて思えば一つま
ぼろし
吾が喜寿と再婚二十五周年人様にかかわりなけれ
ば告ぐこともなし
戦前派戦後派などと区別さる両方に生きし吾は何
派か
空海の命日は吾の生れし日と知れり何得しと言う
にあらねど
二〇世紀をかけぬけて来し思いあり逝きたる友を
指折り数う
親と子のつながりあれど生れし地の異なりて二国
の言葉を使う
とつくにに住めばはるけき人恋はしましてまほろ
ば大和し恋ほし

三つ葉の松葉

サンパウロ　内田　笑子

灯明の揺らぐ今宵の風の音心の空虚をあおりて止
まず
古びたるダルマの眼の光りいる亡父の使いし机の
右に
白々と霧の流るる山裾に道標の如き給油所の灯り
巡りゆく山裾明るし蔦サンジョンの崖をおおいて
花房光る
ブリッソンの小暗き下を逃れきて三つ葉の松が匂
うベンチに
魚がたてる波紋のいくつ陽に耀い真昼の潮に風静
かなり
深々と白雲うつす湖に竿もつ少女等の鼓動きくが
に
赤き鬼灯揺らぐがの浮き四ツ五ツ少女となりて息

をあわせる
糸の張る緊張感に自らが魚に引かるる如くに揺らぐ
孫達のあぐる喚声こだまして水湧く里の魚は太かり

潮風

モジダスクルーゼス　内川　愛季

所在なく石畳の道歩みいつ靴音のつくみずからの音
それぞれの過去包みこむ潮風に吹かれて移民の像に真対う
ゆび指して何を思わむ移民像吹く潮風の夏を逝かしめ
白バラを現の闇の壷にさしその静謐の中に定まる
一枝だにさされしことのなき壷の白磁の艶が心の

絆す
草も樹も息吹く静かな杜の中風が淀んだ時を持ち
去る
嵩ばる荷を担ぐ蟻の続く列映えつつ没り日に統べら
れてゆく
みずからの角度より視る現し世の暗示を秘めて暗
緑の杜
日が沈み影深みゆく山脈を見放ける闇は量りがた
かり
人に透らぬこの淋しさを紫のジャカランダーに重
ぬる夕べ

故郷の夢

サンパウロ　渡辺　光

電話にもエコーの如きずれありて我が故郷は遠し
と思う

日本語の乱れゆくさま憂うなり異国にくらす昭和一桁

住み古りし南回帰線の過ぎる都市夕焼色のマンゴーを食う

朝顔は宇宙より届くメッセージに聴き耳たつるさ霧のなかで

まならうに有明の海耀きて午睡の夢は故郷をゆく

老人は診察室に呼ばれゆきソファーに小さきくぼみ残りぬ

チクショウと荒ぶ言葉の若者は潰せし缶を蹴り上げてゆく

ユーカリの葉裏返して吹く風に白く帯なす野火の煙は

秋の野に轍の跡のねこじゃらし幽けき声で助けもとむる

血糖値上がりし我に老医師は禁食の品つぎつぎ書

きぬ

ひとりの想い

スザノ　八巻たけ子

塀ぞいの小さきたんばぽ見つつ来て淋しきことは
誰にも告げず
買物の途すがらふとまさぐりし独りの部屋に帰り
ゆく鍵
過ぎ去りしもろもろの事浮び来て見上げし空に残
る昼月
蝶のかげみる日もなくて冬ばらは紅褪せて散りて
ゆくはや
短日の夜のとばりに追わるるごとなすなき部屋に
こもる外なし
無為に日を送りいる身に燃えたてるテレビの恋に
スイッチを切る

亡夫と聴きしかけろの声に目覚めいて思いあたらし冬の暁闇

喪いしことに渇きている季も彩濃く咲ける緋寒桜は

うつそ身の長き影ふみ冬極む夫の墓処に花抱きてゆく

もの言いもいつか憚る癖つきてひとりの想いつづる今宵も

移ろい

ジアデーマ　　山岡　樹代子

寒空に晒すがに駄菓子並べいる媼の前を人ら素通りす

ジャカランダ咲きて散り敷く移ろいをテロ撲滅の戦はつづく

何時なにが起こる予測も出来ぬ世をわれ長らえり

祖国に遠く
まだ元気歳より若いと見られてもくたびれおらむ
我の臓器は
要領の悪きは夢にまで及びこころ煩ううたた寝の
間も
何のためいま冷蔵庫を開けしかと瞬時あやぶむわ
が脳細胞
同じ文字いく度も引くはかなごと老いて一途の我
に日は逝く
高齢者とて記念品受くる身にひそむ寂しさ人は知
るなく
三姉妹の母似父似のそれぞれが一様に老い一様に似
る
しとしとと降りつぐ夜半の雨音に至福のごとき今
のやすらぎ

エマの群

クリスタリーナ　横沢　幸子

うつり来て求めし土地を親子して指さしいつつ一望の綿

なよなよと紫花片のカネラデベアド季節を待ちてセラード彩る

牧畜を望みて五十路ゴヤスにて心落着く息子等と共に

早朝の大豆畑にエマの群今朝も数えるクリスタリナにて

早朝に「不毛地帯」を読みつぎて感慨深く人生をみる

事々に親兄姉妹に気くぼりて喜び居たりし次女今は亡く

吾が孫が最後の言葉亡き父にけなげに送る教会の中

荘厳な賛美歌と共に初七日を市を挙げて三男の死
を慰めくれぬ
長年の努力かないてドトラード今日の良き日を親
子して充つ
金婚の心にこもるお祝を子孫共共今日の吉日

パイネイラの花

フエーラス　米沢　幹夫

パイネイラの花ひらきたり何時来ても変らぬ友の
住む里の風
歌を詠む趣味につながるそれだけの交わりなれど
心をひらく
久闊の声かけて来る人と飲む角のバールの熱き
コーヒー
詣り来し墓地の通路の芝草のみどり目に沁む既に
八年

ほっかりと小さな雲が空に浮きこころ安らぐ午後
の小径は
凧合戦に凧取られたる児も帰り夕べの空の風はつ
よまる
ものなべてセピアに沈む暮方の野ばらは風に揺れ
つつ祈る
恙なく今日も暮れゆき遠街にともる灯の色消ゆるこ
となかれ
とりとめなきまま幾度も推敲に苦しむ歌を詠むと
いうこと
何気なき座興の嘘が批判され気まずくなりてゆく
集いなり

還暦の同級会

サンベルナルド　由良葉水

年号や人の生活は変れども吾のノスタルジーに変

りのあらず
とき永く抱きし望みの達成にこころの躍る訪日の
日が
斯くまでも高ぶる鼓動しずめつつ待ちし比の日ぞ
友らに逢わむ
還暦の同級会に間に合わず来し吾を囲む友らの集い
ひととびにスペースを越えて今を逢う友らは若く
当時の如く
友の言う現代版の浦島は龍宮ならず地の裏より来
夢ならず尽きせぬ話題きき居れば時が犯せし青春
を惜しむ
日伯の比較感想聞かれつつ返答なすは「住めば都
なり」
師と共に友らのなせる歓迎に触れて泣きたる男の
こころ
幾十年渡りて語る団欒に名残り惜しみつつ再会誓う

ブラジル「移民短歌」の現況

清谷　益次

会員数の推移

私は『椰子樹』二〇〇号記念別冊に、「コロニア短歌界現況」、同二五〇号記念別冊に「新聞歌壇の現況」を書いた。

今回三〇〇号記念別冊を編むに当たり、もう一度同様の表題のものを担当することになった。表題は同じであっても『椰子樹』が年六回の発行であれば、二〇〇号と三〇〇号の間には約十七年の時が流れ去っている。一見、何ら特別なんともない坦々とした歩みではあったのだが、会員数の上で著しい変化があることは十分に予期していたことでありながら、今更のように驚きを覚えさせられるのである（「会員数」といったが、この小文では一〇〇号別冊以降、五〇号毎の別冊への作品掲載者及び同じく物故者数を参考資料に当てることにした。この方が会員実数よりも、現に作歌活動をしている会員の状況をはっきり示しているとみられるからである）。

一〇〇号別冊（一九六八年九月刊）

①出詠者数　九五

②物故者数　一七

一五〇号別冊（一九七七年十月刊）
①出詠音数一四三
②物故者数　二八
二〇〇号別冊（一九八六年二月刊）
①出詠者数一四四
②物故音数　四六
二五〇号別冊（一九九四年六月刊）
①出詠者数一四四
②物故者数　四七
三〇〇号別冊（二〇〇二年七月刊
※二〇〇二年四月現在）
①出詠者数一〇四
②物故者数　四二

（註　ここで会員数の最近の動きの一例をみると、会員住所録による会員数は、『椰子樹』二五〇号別冊を編んだ一九九四年三月の時点で一九二名、二九七号を発刊した二〇〇一年一二月の時点では一四八名であり、八年間に四四人の減少となっている。）

以上が、ブラジル唯一の歌証『椰子樹』の会員数及び作歌活動者の概況である。

新聞歌壇

次に新聞歌壇に目を移すと、一九九八年三月のパウリスタ新聞と日伯毎日新聞の合併（現ニッケイ新聞）により、それまで一九四六・四七年の創刊直後以来続いて来たサンパウロ・パウリスタ紙及び、一九四九年創刊日伯毎日三紙の歌壇は二つに減った。もう一つ、新聞歌壇のほかに全伯老人クラブ連合会の月刊機関紙『老壮の友』にも歌壇が設けられ、一人一首でありながら、毎月四〇名前後の投稿者がみられる（その多くは『椰子樹』会員）。

以上の紙誌の選者と月間投稿者数は次の通り。

〔選者〕

サンパウロ新聞―多田邦治

ニッケイ新聞―小野寺郁子　清谷益次

老壮の友―　水本すみ子〔月間投稿者数〕

サンパウロ・ニッケイ新聞―両歌壇合わせて八〇～九〇人

老壮の友―四〇人前後

ここで一言つけ加えると、新聞歌壇への現投稿者数は戦前戦後を通じて最多となっており、新聞も十分なスペースを提供してくれている。ブラジルの短歌の先行きが深刻な不安材料を抱えているのを思うとき、特異な現象とも見られる訳だが、これについては改めて考察する必要があるであろう。

各地歌会

現存しているのは「サンパウロ歌会」「ジャバクアラ歌会」「あらくさ歌会」（以上サンパウロ市内）「スザノ歌会」「福博歌会（スザノ）」「ロンドリーナ歌会」「クリチーバ歌会」の七つとなり、往時に比べると目も当てられない減少だが、毎月一回の会を持ち、作品は新聞の文芸欄に掲載して貰っている。歴史の古い「カンボス・ド・ジョルドン歌会」「モジ歌会」「グワイーラ歌会」などはここ数年のうちに姿を消した。日系集団地には必ずといっていいほど、一つまたは複数の句会が存在する俳句界に比べて、甚だ気勢の揚掛らない状況だが、これは大雑把に言えば二つの詩型の差、把握素材の質の差によるものと考えるほかはなさそうである。誤解を招かないために言い添えれば、「質の差」ということには「二詩型の間の優劣」の意は微塵も含まれていない。

日本のイベントへの参加

近年ちょっと興味ある現象が起こっている。それは日本各地において催される記念行事の一イベントに、短歌・俳句などの募集が多くなり、ブラジルからの応募者がかなりの数にのぼって、それが思いがけない好成績を得ていることである。募集は邦字紙や日本の雑誌などで伝えられ、また成績の結果は邦字紙や『椰子樹』で報じている。

既に数十年も前から、宮中の歌会始めや明治神宮春・秋大祭への献詠は行われていて、入選・佳作の数も多いのだが、最近ではこの種のイベントが殆ど

日本全国で催され、それだけブラジルからの応募者・入選者も増えた訳である。またこれは俳句でも同様である。この現象を以てブラジルの短歌が興隆に向ったとは間違っても言えないが、日本人とこの短詩型との深い「間柄」については一考察に値するものがあるのかも知れない。応募者には『椰子樹』・新聞歌壇出詠者以外の作者も割合に多い。

日本歌壇との関係

一九九八年八月二三日に催された第五〇回全伯短歌大会に、新進歌人・文芸評論家の小塩卓哉氏が来伯して出席、「ブラジル短歌の将来と日本歌壇とのつながり」等についての考察を述べた。小塩氏は現日本歌壇における殆ど唯一の「移民短歌」について研究を進めている人だが、青年時代に、細江仙子氏が担当している朝日新聞岐阜版歌壇への熱心な投稿者であった。「移民短歌」への関心と開眼は、多分に細江氏の刺激・啓発によるものではないかとも想像される。

これまでにも、日本歌壇の有力者のブラジル移民短歌への言及が皆無だった訳ではないが、その大方がブラジル日本移民の生活と精神の歴史を背景とした（或いは根底とした）作

品を深く理解した上でのものではなかつたように私は思っている。傍観者の立場でのものだったと言うことである。「ブラジルでなければ作れない作品を」ということはいわれたが、それは極めて表面的に感じられるものであり、「それでは『アマゾン』『コーヒー』『椰子』『ジャカレー（鰐）』ではいかがでしょう」といった風の歌が日本へ送られ、それがまた一応の評価を受けるといった風潮がなきにLもあらずと感じられたのである。

小塩氏の移民短歌に注ぐ目は、そこが異なる、という点に私は深い期待を寄せないではいられない。なお小塩氏は二〇〇一年二一月、これまで海外移民（移住者）及び居住者の短歌作品について書いた文学をまとめて『海越えてなお―移住者たちが短歌に綴った二十世紀』を東京の本阿弥書店から刊行し

小塩氏の、この移民短歌考察の一つの契機をなしたと私の想像する細江仙子氏は、「一九六三年六月、初めて海の外へ出た」と語っている（註　第二歌集『二世』あとがきより。『二世』は一九六七年九月、日本で刊行）。それは幼時に別れたままだった父母に会うため、ブラジルを訪れたことを言っている。父母とは故細江静男医師夫妻で、現在のサンパウロ日伯援護協会創立の一原動力となった人であり、「道庵」と称してブラジルの医学関係の文を多く書いた。

その一つに『性書』一巻がある。

細江氏は両度に亘る滞伯期間も長く、日伯援護協会の地方診療班に加わって広く内奥各地を訪れ「コロニア人」との接触を深めたが、着伯後間もなくコロニア文芸界の活動に参加、短歌のほか、当時存在した『コロニア文学』に創作を発表したこともある。

細江氏の来伯の頃は、日本の短歌ではいわゆる前衛運動が盛んで、その風潮に触れていた氏はコロニア短歌の状況にあき足らず、新しい風を吹かせようと働きかけるところがあった。「短歌における（私性）」の問題もその一つである。前衛短歌への私の知識は極めて浅く、それがコロニア短歌作者にどれほどの影響を及ぼしたかについて語る資格はないが、幾らかはそれに傾く風の作品も一時現れたことがあるとは言えるだろう（もちろんこれは、細江氏の影響、という意味ではない）。

細江氏は前後二回のブラジル生活の間に把えた素材を以て、『二世』（一九六七年九月刊）、『オスカル・フレイレ街』（一九八四年一一月刊）の二歌集を編んでおり、現在も『椰子樹』会員としてブラジルの短歌に声援を送っている。細江・小塩の二氏は、移民短歌の日本における得難い理解者として、貴重な存在であることをここに記しておく。

水準ということ

移民短歌の文学・文芸作品としての水準に触れるべきかも知れないが、それは二〇〇号記念別冊「コロニア短歌の現況」の中で一応取り上げているので、改めて言葉を費やす必要はないと思う。ただ百年に達しようとしている日本移民の生活と精神の歴史（繰り返すことになるが）を心の底において理解・鑑賞を試みるという態度によってのみ、移民の歌の真の意味は感じ取ることができるであろうとだけは、ここでも記しとどめておくことにする。

短歌作者の平均年齢

ブラジルの短歌作者の年齢について触れる。これの算出は非常に難しいが、参考資料として提出しておく。『椰子樹』は日本・ブラジル修好条約締結百年を記念して、一九九五年に合同歌集『幾山河の賦』を出版した。その作品募集の規定の一つに作者年齢（会員全員ではない）の記入を加えたが、これによって作者一四〇名の平均年齢は七五歳を超えるという結果を得たのであった。若い作者の出現と『椰子樹』への参加が絶望的である状配下で、二〇〇二年現在の会員平均年齢の、推移は、この資料によっておよそは想像できるのではあるまいか。改めて調査をするということも考えられるが、例えそれを試みても単なる話題で終ることになるであろう。かくて、会員の老齢化は防ぎようもなく、新しい作者の増える

希望は持てないというのが、ブラジル短歌界の偽れない現状である。

述作の数篇

二五〇～三〇〇号の間の短歌関係出版物については他担当者の記述がある筈だが、それ以外の連載や著述に触れておく。

安良田済「渓舟の文学的道程」
『椰子樹』二四四号（一九九三年二月刊）～二五八号（一九九五年六月刊）まで、十四回の連載。

安良田済「武本由夫の文学的世界」
『椰子樹』二五九号（一九九五年八月刊）～二八八号（二〇〇〇年六月刊）まで、三〇回の連載。

安良田済「酒井繁一の世界」
『椰子樹』二八九号（二〇〇〇年八月刊）～二九八号（二〇〇二年四月刊）までへ一〇回に達し、引き続き連載中。

『椰子樹』の歩みに深く関わった三人物の評伝だが、誌に生じた諸々の出来事に豊富な資料によって詳しく触れたものとして評価でき、興味深い。一見平坦にみえながら必ずしもそうでなかった運営と人間関係は、後に続く者が心して思いを致すべきであろう。そして『椰子樹』はその都度「自浄」作

用によって直（す）ぐなる姿勢を保ち得たのである。

なおこの間の連載作品には次の二点もあげられる。

清谷益次「私の三十行鑑賞・K」

『椰子樹』一二八号（一九九〇年六月刊）～二八九号（二〇〇〇年八月刊）まで、五〇回の連載（途中数回の休載）。

清谷益次「心に残るブラジルの純粋叙景歌」

『椰子樹』二九二号（二〇〇一年二月刊）～現在連載中。

次は『椰子樹』誌上ではないが、移民短歌に関する著述として、『積乱雲・梶尾季之―その軌跡と周辺』（東京紀伊国屋書店刊一九九八年）に、清谷益次の「証言としての移民短歌」が収録された。右は小林正典著『日本勝利と戦ったブラジル移民一家の記録―清水雪登日記が語る戦中・戦後』と共に、日本で七〇〇部増刷されている。

編集担当者の交替

『椰子樹』は一九九九年二月の第二八〇号より編集担当者の交替を行い、多田邦治（主）・上妻博彦（補）が就任した。誌の歴史初の戦後移民（移住者）の就任となる。時の移りはここにも現れている。

『椰子樹』運営委員会　（三〇〇号時点）

代表　清谷　益次
総務　安良田　済
会計　岡本喜代子
編集　多田　邦治
　　上妻　博彦
選者　陣内しのぶ　小笠原富枝　水本すみ子　小野寺郁子
高橋　咲子　上妻　博彦　多田　邦治
題詠　安良田済　阿部　玲子　小池みさ子　藤田朝日子

歴代担当者一覧

編集

（号）	（担当者）
一～十六	武本由夫
一七～三八	則近正義　吉本青夢
三九～五〇	武本由夫
五一～五八	川原比露思　梅崎嘉明
五九～七四	米沢幹夫　井本惇
七五～八五	清谷益次
八六～一〇〇	安良田済
一〇一～一〇六	高橋よしみ　佐藤博三　水本すみ子
梅崎嘉明	

一〇七～一一一　安良田済　米沢幹夫　清谷益次
一一二～一一七　安良田済　清谷益次　陣内しのぶ
一一八～二一四　清谷益次　陣内しのぶ
一二五～一三〇　梅崎嘉明
一三一～一三九　水本すみ子　陣内しのぶ
一四〇　陣内しのぶ
一四一～二七九　清谷益次　安良田済
二八〇～三〇〇　多田　邦治　上妻博彦

会　計

（号）	（担当者）
一～九	富吉　好人
一〇～五〇	徳尾　恒寿
五一～七〇	中江　盛治
七一～七八	弘中千賀子
七九～九一	梅崎　義明
九二～一三〇	水本すみ子
一三一～一六二	中江　盛治
一六三～二五六	陣内しのぶ
二五七～三〇〇	岡本喜代子

選者

（選者）　（号）

阿部　青杜　一～七
岩波　菊治　二～三一
瀬崎　涛声　一七～五八
武本　由夫　三二～五八
〃　七五～一〇〇
酒井　繁一　三二～五一
〃　八六～一四〇
行方正治郎　五五～五八
〃　七五～八八
吉本　青夢　五九～七〇
井本　惇　六三～一九一
川原比露思　七一～一〇二
米沢　幹夫一　三六～一四一
弘中千賀子一　四八～二六七
小笠原富枝　一〇二～三〇〇
陣内しのぶ　一四八～三〇〇
水本すみ子　二二六～三〇〇
多田　邦治　二六四～三〇〇
小野寺郁子　二八〇～三〇〇
高橋　暎子　二八一～三〇〇
上妻　博彦　二九二～三〇〇

表紙
一〜十七　半田　知雄　絵画
十八〜二五　田中重人　絵画
二六〜三五　富岡清治　版画
三六〜四〇　間部　学　絵画
四一〜四五　高岡由也　絵画
四六〜五〇　不明　写真
五一〜五三　柳田　威　写真
五四〜五八　米沢幹夫　写真
五九〜六八　本庄研一　写真
六九〜七一　間部　学　絵画
七二〜七四　福島　近　絵画
間部　学　絵画

絵画
七五～二一三　富岡　清治
版画
二一四～二一九　田中慎二
絵画
二二〇～二二五　富岡清治
版画
二二六～二三七　田中慎二
絵画
二三八～二四三　清谷益次
写真
二四四～二八五　田中慎二
絵画
二八六～三〇〇　多田康子
絵画

創世紀の人々の点描

安良田　済

『椰子樹』は遂に三〇〇号に達した。特集号には、種を蒔き、培ってきた創世紀の人々を表彰するために、その当時の活動

状態、人間関係、裏話などをまとめて、歴史の一面とすることはふさわしい、と考えて記録してみた。

まず、ことわっておきたいのは、筆者は戦前の『椰子樹』には関係しておらず、主要な人々やいろいろな出来事に接していないことである。それにもかかわらず、このテーマにあえて手をつけたのは、筆者は徳尾渓舟の日記、一九二九～四五年までに眼をとおす機会に恵まれ、その際、文学に関係のある個所をノート二冊に書き写しておいたからである。日記であるから個人としての人間関係の範囲は狭いが、彼が新聞の文芸欄を担当していたので、文学界の出来事や人間関係はかなり広いものであった。日記というものは時日、人名、出来事が明白であるから真憑できるものであり、多くのことをこの日記から取材した。そのほかできるかぎり古い文献も漁った。ある一つのことについての確証を得るための文献漁りは、労多くして、収穫は僅少であるが、歴史を遡行する者にとっては避けられない道である。

最初の構想は、もっと広範囲にわたって調査し、より多くの人々の点描をする予定であった。まず、「椰子樹詠草」と「抽雲集」の作者の点描を進めていたら、規定の枚数を超過してしまった。しかも、運営に関係の浅い人と思われる人々は割愛したうえでの超過である。

スペースの都合で編入しえなかった人々については、何時か記述する機会があれば書き継いでおきたいと思っている。

しかし、今回は、以下の記述をもって歴史の一面のページを閉じておく。

岩波　菊治

一八九八年生（明治三一年十二月）
一九一八年　アララギに入会一九二五年　渡伯、アリアンサに入植
一九二八年　アララギ同人となる
一九二九年　日伯歌壇の選者となる

『椰子樹』創刊より亡くなるまで選者に任じた。

日伯新聞が日伯歌壇を設置し、岩波菊治を選者に迎えた。岩波菊治は選者を担当するに当り「日伯歌壇の標準をなるべく高いものにしたいと思っている。それ故出来る限り良い作を寄せてもらいたい。自信ある作を捨てられた場合でもあったら、どしどし言ってもらいたい。どこまでも真剣に論議したいと思っている」とのべている。

選歌そのものが批評であるという主旨であるから、評言はいたって簡潔である。「今回の作品非常によろし」「もっと一首一首に骨折り、素直な表現に努められたし」「もう一度出直して正しき短歌の道を歩むこと」採らざりし歌「いま一息というところ、自分の心を偽らずに表現し給え」「感じ方、現し方未だ足らず、苦心の要あり」のような評言であった。手

をとり足をとっての説明がないので、初心者はとまどい、一、二回投稿して没になると止めてしまう。徳尾渓舟など時報歌壇や聖報歌壇には十首投稿すると必ず四・五首、時には七・八首も掲載されていて中堅にいた。その渓舟でも日伯歌壇に投稿すると没になる回数のほうが多かった。「たまに一首、二首採られるだけで、三首も採られると内心は赤飯ものであった。三回連続で没になることも度々あり、流石に落ちこんで日伯歌壇の投稿は止めようと思ったことがしばしばあった。半分は意地で投稿をつづけているうちに、採点歌も多くなり、菊治先生から『有望な新人が現われた』と武本由夫と並べて賞めことばをもらい、覚悟を新にした」と告白している。渓舟だったからこそがんばってこられたが、落伍した人の数は少なくなかったであろう。しかし、アララギの伝統でもある厳選主義を踏襲する岩波菊治は投稿者の多寡など意に介していないようであった。

その選歌態度は『椰子樹』においても全然変らなかった。しかし『椰子樹』は一時、岩波・瀬崎選者の好むほうに投稿するシステムを行ったことがあったが、投稿者の大部分が岩波選者に投稿し、均衡がひどくくずれたので、このシステムは改正されたという事があった。厳しい選ではあったが、如何に信頼されていたかを物語っている。

アリアンサでの菊治の村作りの理想は、植民地の人々の団結心がくずれると共に挫折した。妻の眼病の治療のことも

あって、土地を売り、カンピーナスに移転した。カンピーナス時代に第二次世界大戦が勃発した。日本人の通信物は検閲されることになった。その検閲にひっかかり、家中捜索され、歌帳と共に重要な書類は没収された。そのうえ、投獄の憂目に遭う・獄舎から解放されると間もなく、一九四三年にスザノに移転した。スザノにも落ちつかず、一年足らずでモジに移転し、果樹栽培に専念することになる。根っからの百姓である菊治は研究心がつよく、農産物展示会では茄子を出品し入賞したことがある。花園芸展では丹精の菊を出品し、これも見事入賞した。短歌大会で最高点を得るよりも、品評会での入賞のほうがよっぽど嬉しかった、という表情であったという。

筆者は一九四八年のある夜、武本由夫に伴なって、岩波菊治の家を訪ねたことがある。岩波菊治は大きなメーザに新聞紙を広げて書の稽古をしている最中であった。「やあ、安良田君かこれは珍らしい」と笑顔でつよい握手をしてくれた。武本由夫がメーザをみながら「これは邪魔になるところですね」というと、「いやいや、近頃はときどき短冊や色紙を頼まれるんでね。瀬崎君のような立派な字が書けるといいんだが、僕は生れつき悪筆でね、暇があるとこうしていたずら書きをしているんだよ」と、ちょっと気はずかしいような苦笑をみせた。

岩波菊治は素朴でしかも鷹揚であると同時に、些細なこと

にも気を配っていた。たとえば『椰子樹』に編集者が岩波菊治の作品を先頭に配列すると、編集部に「自分のと瀬崎君のとは各号相互に並べるように」と注意していた。

『岩波菊治歌集』（椰子樹社編集、一九五九年八月発行）、『岩波菊治』（清谷益次著、一九九三年六月発行）の二書が菊治の歴史である。

創刊号より五首抽出

近　詠

蒲沼に棲みつく亀が折々に赤渋水を　掻き乱しつつ

この丘の裾引くところ朝なさな霧は沈めり湖のごとくに

菊の根に一ところ澄める水ありて群るるうろくづは動くともなし

草原にバロン落ちしが一むらの焔となりて忽ち燃えぬ。

トマテ売りゆたかにならば蝕ひし歯を治さむ我も吾妻も

老兵は消えていく、しかしなかなか消えない存在感をもつ人間もいる。岩波菊治はそう簡単には消えないし、忘れがたい存在感をもつ人間であった。

一九五二年十一月二三日死亡　五四歳

椎木　文也

一九三七年十一月一日、リオデジャネイロ丸にてリオ港に入港。横浜正金銀行支店長として赴任する。

東京商科大学卒業。偶然にも後に交友をもつ坂根準三は同大学の一年先輩であった。

短歌はアララギによって学び、水島某のペンネームで発表、岩波菊治とくつわを並べていた。その後一時短歌から遠ざかる。短歌への復帰は山下陸奥の主宰する『一路』に同人として参加することがきっかけとなる。

渡伯船がリオ港に入港したとき、またも偶然にサンパウロ総領事として赴任している坂根準三と船のサロンで知り合う。以後、坂根総領事がリオに旅行するたびに二人はつねに会食する交友関係になる。

一九三八年八月、坂根総領事がリオにいき、何時ものとおり二人で会食した。そのおり椎木文也は、「サンパウロの歌人たちで短歌雑誌を発行しては如何」と提案する。「刊行費用は自分と総領事が大半を担う覚悟でないと永続しないであろう」と支援の覚悟を示す。合意した坂根総領事はサンパウロ歌人たちと連絡をとり、一九三八年九月十四日、皆を招集した。その会合で『椰子樹』創刊は決議した。

短歌雑誌発行の夢は以前からあった。しかし、コロニアで雑誌刊行を続行するのは費用の点で難事中の難事とされてい

たので、短歌雑誌発行の実現はまさにタナボタであった。
椎木文也と坂根準三の二人で蒔いた種は芽生え、見事に成長し、今、遂に三〇〇号に達する巨木になった。
椎木丈也という人格を池田重二に語ってもらおう。
多忙な銀行家で短歌とは凡そ縁の遠い商人タイプと見られる氏が、同人中断然他の追随を許さぬほどに作歌に熱心な人なのである。事実、睡眠時間さえも充分にもたぬ氏であるが、寸暇を惜んで作歌に励んでいられる。一字たりともゆるがせにしないあの研究心、推敲に推敲を重ねるあの努力、両々相俟って今日みられるような気品に輝く作品が生れてきたのである。
氏は作歌を一つの人格修養の具と見なし、作品を人格の光と観じている。だから常々「人格の低級な者が如何に青葉の上に技巧を弄してもよい短歌は絶対に生れない」と言っている。人格と短歌を有機的に触釈してゆく氏の短歌観は傾聴に価すると思う。
椎木文也は第二次世界大戦が始まると間もなく、交換船で帰国した。戦争も終り一九四八年に『椰子樹』との連絡ができ、第十七号に「歌誌に現れた最近の傾向」という一文を寄稿した。その後も散発的に作品を寄稿した。清谷益次の作品「ずやもし論争」が紛糾したとき、徳尾渓舟は椎木文也に文法上の正誤を糺した。椎木文也は清谷説が正しいと文法的に解説してみせた。

一九五六年八月にブラジルを訪問してきて、旧友に囲まれて楽しく大いに会談した。『椰子樹』は彼にとっては自分の息のような存在であったかもしれない。

創刊号より五首抽出

雲　海

高山の夜は冷え渡りアルゴー座澄み定まりぬ頭上に低く
白雲の堆積したる雲海は大西洋におしひろがれり
雲海の雲の一塊一塊は片かげりせり朝たけにつつ
雲海の上にそびゆるこの山の朝を小鳥の澄み透る声
高山の峡に白雲きらひつつ真昼を遠く蹄のひびき

坂根　準三

一九三七年の末、サンバウロ総領事として赴任してくる。「坂根嵯峨」「花瀬群涛」「桜井薫」「水鳥十三子」の四つのペンネームか用いて、ペンネームに因なむ傾向の作品をそれぞれにふり分けてあるという。各ペンネームにはふきだすようなおもしろい由来があるそうだが、発表禁止なので由来は話せない」と渓舟はいっている。

池田重二の語るところによると、

歌風は明星系、しかし酒豪の彼が　酒の歌を詠むと吉井勇調になる。花瀬群涛の旅の作品は西行や芭蕉の風格を想わせるものがある。桜井薫の作品は、人生への内的生命の苦悶を赤裸々に歌っている。総領事としてこんな歌を発表してよいのかと思うキワドイ歌を偽りなく発表する。

岩波菊治は次のように評価する。

大体において坂根嵯峨の名で発表するものが一番角ぼっている、やや裃をつけた感じもするのである。かって時報に発表した「漢口陥落」「大赦に遇ひて」などは誠に堂々たるものであり、自分も当時感銘に堪えぬものがあった。

それに比べて花瀬群涛の名で発表するものは最も多いと思うが、一読暢達な詞句を列ねた、奔放な作が目立つ。併しながら、旅行歌などには単なる報告的なものが多分に含まれていることも否めない。

桜井薫、水鳥十三子の名で発表の分には人間坂根としての生活なり感情なりが率直に現れており、見方によっては氏の如き地位にある人の作としては如何かと思われるほどのものもあるが、それだけ氏の正直さ、純眞さに頭が下がる。

渓舟は時報の文芸欄を担当していたので、歌人総領事から

は特別に親愛感をもたれていたようである。渓舟は総領事の短歌はワク付きで発表していたからでもあろう。ただ、渓舟はたとえ坂根総領事の歌でも不出来とみれば没にしていた。それである日「総領事から『時報歌壇は点がカライですな』といわれ、すっかり恐縮した」と日記に記している。

筆者は坂根総領事と一回だけ会ったことがある。といっても面談したのではない。それは筆者がグワランタンに居住していた一九三九年のこと、総領事が地方巡行のプログラムとしてグワランターンに一泊された。日本人会は歓迎の晩餐会を催した。ふん囲気がよかったのか、総領事はウイスキー一本を一人で空けて、果ては立つこともできないほど酔っぱらってしまった。日本人会の会長以下は総領事が気楽に飲んで下さった、有難いと喜んでいた。筆者は当時はカチカチの禁酒主義者であったから、「歌人総領事の何たる態だ」と憤りを覚えたのを今でも記憶している。現在の筆者は愛酒家をもって任じており、坂根総領事を想いだすたびに憤った若き日の自分が顕ってくるのである。

さきにのべたように、坂根準三は四つのペンネームを使用していたが、『椰子樹』第七号（一九四〇年）に五つ目のペンネーム「斉唱」を用い次の二首を発表している。

ますらをの出でたつ時ぞ何もかもさらばサンパウロまた見む日まで

何もかも生命ながらへよろこびのまた見む日までさらばサンパウロ

創刊号より五首抽出

旅の歌

野を行けば学び舎ありて日本の尊き児等の列び居にけり
言挙げせぬ東海の人は一斉に面を伏せて乗車を迎ふる
老人の集れる見れば敷島の三十年の血は応へ湧く
なほ何か今日の務の在らずやと絲瓜眺むる植民地の宿
列ぶ児等の顔一つ宛安全燈かざしては見て闇を回りぬ

阿部　青杜　（太）

一九三四年　渡伯

池田重二の調査によると、日本大学国文科出身。若山牧水の門で短歌を学び『創作』で育った。牧水からは将来を嘱望されていたという。

牧水の門下で短歌に親しんでいるとき、将来文学で身を立てんと決心し、改めて日大文科に転じ、和漢の文学を研究した。したがってコロニアでは歌論にかけては自他共に許す第一人者である。その鋭利な筆致は師牧水よりもむしろ茂吉を

思わせるものがある。鈴木南樹、古野菊生、寺門仙者らとの論争における論旨は本格的に叩き上げただけに、理路整然としていて、堂々たるものであった。

と、池田重二にしてはめずらしくほめっぱなしである。

阿部青杜の過去については資料がほとんどなく不明な部分が多い。一九三六・七年頃マリリア方面に居住し、日語学校の先生をしていた。一九三六年の時報文芸欄に「古野君に質す」という題で三回、古野菊生が聖州新報に書いた文芸時評に対する反論を書く。古野菊生は少し揶揄的語調で「阿部青杜はまるで王朝時代の何とか大納言卿でもあるかのように、すべての歌をことごとく文語の眼と心臓とで見、それに翻訳しなければ気のすまないらしい」と評言した。これに対し、阿部青杜は「自分は文語体に固執してはいない」と口語体短歌の添削の実例を挙げ、新傾向短歌、口語体短歌についての知識と理解力を示す。そして「古野菊生こそ眞の口語短歌がどうあるべきか、という点など解っていないのだ」と決めつける。追いかぶせるように、口語短歌論を展開し、古野口語短歌論の浅薄なものであることを論証するにあたり迫力充分であった。古野菊生との論争によって、短歌についての理解の深さが歌壇ひろく認識されることになった。と共に、コロニアでは実作の量は比較的少なかったけれども、後年『椰子樹』が創刊されるや選者の一人に指名された。

マリリア地方のアンデス植民地で百姓をしている荒木八雲が、一九三七年に同人誌『燎原』を創刊したとき、阿帥青杜は編集などを手伝っている。荒木八雲とどういう関係であったかは筆者は知らない。この『燎原』は二号誌に終った。

阿部青杜が文協普及会の社会課長としてサンパウロに出てきたのは一九三八年の初旬であった。普及会は『黎明』という教育会誌を発行していた。当時、古野菊生が編集をしていた。論争して間もなく阿部青杜は古野菊生の上司として現れた。古野菊生には居心地のわるいのが想像できる。阿部青杜が上司として入ってから一年ばかりして古野菊生は文協普及会から去る。表向きは石井局長と意見が衝突したことが理由になっている。古野菊生が去ったあとに、ちょうど失業していた武本由夫が入り、編集を担当することになる。

『椰子樹』が創刊され、第一号から第七号まで（帰日）選者の一員としてつとめた。また「万葉集諸話」を第六・七・八・九号まで発表した。但し八・九号のものは帰日以前に書き上げて編集部に渡しておいたものと推察される。

一九四〇年、阿部青杜は突然普及会よりオウリンニョス方面へ転任させられる。オウリンニョスでどういう事情が生じたのかは不明だが、落ちつく暇もなく、日本へ永久帰国することを決心する。同年五月七日の船で日本へ帰ってしまった。

戦後、『椰子樹』と連絡が可能になってから、何回か作品

を投稿しているところをみると、ブラジル歌壇に対して郷愁のようなものをもっていたにちがいない。

創刊号より五首抽出

海辺雑唱

汐風の眼にさへぎへと吹きぬくる広き食堂に一人飯食す

朝風の窓辺さやけみ蔓草の紅の花ゆれつつ咲けり

朝露の芝生のみどりすがしきに散りこぼれたる花の紅

深ぎりに目をさえぎられおぼつかな汽車は渓谷を這ひ上るかも

吾が汽車の吹き鳴らす笛は霧ふかき渓にこだましあはれにきこゆ

瀬崎　涛声（古平）

大正十年、二九歳のとき新聞歌壇に投稿したのが作歌のはじまり。最初、若山牧水選の新聞歌壇で学び、昭和三年に前田夕暮主宰の『詩歌』に社友として参加する。夕暮没後は同人となる。『詩歌』によって自由律短歌も研究する。

一九三三年に渡伯、ミナス州で米作などする。一九四二年にカンビーナスへ移転する。更に一九四八年頃、モジへ移転、永住の地とする。

創刊号に発表した涛声の「渡航途上七首」は菊治を始めとして、中央歌人たちの絶賛をうる力作であった。実作をもって華々しく登場した涛声は「若き未見の友よ、輝け」という題の文でハッパをかける。

観察のない歌は写眞に等しい。落ちついてよく物を見よ、大自然は普通人の見るような月並みなものではない、すべてのものに造物主の妙味が隠されてある。見給え、一枚の木の葉の落ちるさまにも、転げる一個の石塊にもかくれた大自然の姿がひそんでいるではないか。そうだ友よ観察を密にして作歌しよう。大自然の神秘を歌おう。

とやや汎神論的に「自然を捉えよ、感得せよ」と叫ぶようにのべる。

一九四八年に『椰子樹』雑詠欄の選者となる。一九四九年一月から「南米時事歌壇」の選者となる。一九五一年に『詩歌』ブラジル支部を担当する。以上が瀬崎涛声の主な活動であった。

一九五二年の末に岩波菊治が亡くなった。生じた空白を埋めんと徳尾渓舟と武本由夫は力を合わせて運営をきりまわしていた。岩波菊治には『『椰子樹』会長」とか「代表」とかの尊称や地位づけはなかった。

だが、「その空席は瀬崎涛声が占めるべきである」と酒井繁一は中山稠子の同感を得て、、瀬崎涛声担ぎだしと共に、編集交代を目論んで行動を開始した。先ず中山稠子は、筆者

らがカフェランジア短歌会をはじめた頃、指導者として盡くしてくれていた関係上、筆者に酒井案を説明し協力してくれという手紙を寄こした。筆者は瀬崎涛声を『椰子樹』代表とすることに異存はなかったが、則近正義の編集に不満をもちながらも、酒井繁一に編集を委ねることには賛成できなかった。

筆者はその当時カフェランジアに帰っていたが、中山稠子の書面に接するや、ちょうど商用で出聖することになっていたので、一日暇を作ってモジの瀬崎涛声宅を訪れ一泊した。筆者は瀬崎涛声に「当然『椰子樹』代表になるべき人格ではあるが、他者の策略に利用されてなってはいけない。自然体で時期を待つほうが好ましい」と進言しに行ったのである。

筆者が瀬崎涛声を訪問してから何カ月かして同人会議が開かれた。地方にいる筆者は出席していないので会議の模様はしらない。後日発表された同人会議の報告は『椰子樹』代表問題には触れていない。また編集人更迭の問題もとりあげられなかったのか、則近継続が承認されている。結局、情勢不利とみた酒井繁一は提案しなかったのではないかと、筆者は憶測したわけである。

一九五九年、編集者米沢幹夫は「瀬崎涛声特集」を編んだ。筆者にも瀬峰涛声論を書くようにと注文がきたので、右の件を中心に瀬崎論を書いた。井本惇は瀬崎作品鑑賞を書いた。井本惇は、私はこの自選歌をよんで、今更のように思ったの

であるが、氏の短歌は生活を取材し、実際を歌っているが、言うところの生活詠でもなければ写実ともちがう。

それでは、作品を内側から支えているものは一体何か、ということになると、私はそこに一つの趣味性を指摘できると思う。もっとくだけていえば、氏の作品は瀬崎涛声の生活詠である。特にこの自選歌百首の場合、氏の作歌志向を知る上において、大きな手がかりになるものがある。この如何にも東洋的作歌者姿勢は又、それなりの完結性を持って一つの抒情世界を形成している。私は瀬峰涛声の特質を、ここらあたりに見出して行くべきであろうと思う。

と特質を指摘する。

一九六五年に歌集『白き州道』を刊行した。あとがきに、

私の作歌理念は、短歌はどこまでも三十一音律の抒情詩であることを建前として、自然と人間の心との絡み合いの中に詩を求め、出来るだけ平易な言葉で何人にも判るような写実主義の短歌を創りたい、つまり霊峰富士に例えれば広い裾野である大衆の中に短歌を位置づけたいということである。

とのべている。また一九七〇年、歌集『生きの日は』を刊行する。

創刊号より五首抽出

渡航途上吟

みてゐるは立つ浪白き支那の海くぢらい群れて潮ふける海

うね上りなだれて白き浪の間に背を出すとみれば鯨潮ふく
立つ浪の白き沖べに一つ居る鯨と見ればこなたにも居る
さ青浪うねる海のひとところ騒立つみれば海豚とび出づ
おのがじし浪をくぐりて躍り上るいるかの群の一途なるさま

一九八七年三月十日死亡　九三歳

行方正治郎

明治四十年生

一九二八年渡伯、三二年にアリアンサ移住地に移転する。一九四八年にブラガンサに転住する。

岩波菊治没後、パウリスタ歌壇の選を継承する。一九四九年『椰子樹』は入門欄を設置し、担当者として行方正治郎を推し、二三号から五一号まで担当する。以上が略歴である。『椰子樹』は第六二号に「行方正治郎特集」を編む。それによると、高等小学校を卒業。一七歳のとき上京し、郵便配達などする。一八歳のとき活版印刷所へ見習工として入る。この頃にキリスト教に入信する。暇があれば図書館に通い哲学書や歴史書をあさり読む。共産主義者と知人となるが、自分の性格では主義者になれないことを自覚して敬遠する。しかし、左傾する思想をもっていたので工場主と口論するようになる。偽瞞と策略に充ちる都会生活は自分の性に合わないこ

とを自覚し、いちばん正直な大地を相手に一生を送るのがいちばん良いと考え、ブラジルに移住を決心した。

二十歳の頃モッサに恋愛する。彼女の親達に警戒されて失恋する。その頃から盛んに自由詩・俳句・短歌など作り失恋のハケロとする。作品は日伯新聞や農ブ誌に発表した。アリアンサに移転してからは、岩波菊治の人格に心服し、短歌ひと筋にしぼる。

一九二九年に結婚する。長女が生れて間もなく、結核にやられ、一年余病床で過ごす。闘病生活をするうちに人間的に成長したと自覚する。この間、日蓮宗に転じ、さまざまな生命現象を体験し、いちおう精神的安定を得る。以上が履歴書である。

この特集篇には筆者も「行方正治郎作家論」を書かせられた。その文中から一節を抽出する。

行方正治郎は極端にいえば、歌人になる必然性はなかったようである。むしろ彼は大学の哲学教授などに適応性をもつ人のようである。だからそういう位置において、なお作歌したであろうかは疑わしい。つまり歌人行方正治郎は多分に環境のプロセッソによって生れたといえるのである。だからといっても作品の価値論を云々するわけではない。むしろそれであるが故に、コロニア歌壇における存在は特異性をもつのであり、後輩にいい意味での他山の石たらしめているのである。

短歌一筋を歩いていた行方正治郎は一九七四年頃から、日蓮宗の別派を開宗する決心をする。教典作成に神憑り的に全精神を集中するようになる。そして「短歌は私の人生において、結局、道草にすぎなかった」という言葉を残して『椰子樹』から去っていった。図らずも、さきに筆者が指摘した「作歌への必然性のない」ことを彼は自ら証明することになった。ただ、『椰子樹』から去った彼がパウリスタ歌壇の選者という席に執着して、道草といいながらも　三年くらいカジリついている恰好は筆者には納得できず、その態度を責める文を『椰子樹』に書いたことがある。

行方正治郎が開宗した日蓮宗別派が　どの程度に信徒を獲得したかを筆者は知らない。ただ、一九八十何年頃きいたところによると、「彼は再びキリスト教に還り『自分はキリストの生れ変りだ』と宣言し、伝道につとめている」ということであった。実際のところ筆者の知るところではない。

創刊号より五首抽出

入植五年

草畑を隔てて遠き森の端にイペアマレーロの花咲ける見ゆ

紅イペの花落ちる見れば此の年も山焼の時季の既に到りぬ

住み着きて玉とせは経ぬ植え置きしマンガは青き実を結びたり

山焼の此の頃繁し振り仰ぐ夜空の星は光おぼろなり

朝明けを豚に餌飼ひてすがすがし此の頃吾れの健かになりぬ

但野　拾参（渡部重）

「但野　拾参」「渡部重」といっても誰のことか知っている人は現在はきわめて少ないはずである。しかし「南仙子」だといえば知っている人は少なくないであろう。

渡部重は「南仙子」のペンネームで全伯的に知られた俳句界の指導者であった。パラグワスー（文化植民地）に居住していて、新聞の文芸欄に活躍していた。『椰子樹』創刊当時は「但野　拾参」のペンネームで短歌をつくっていた。パラグワスーでは南仙子をはじめとして、中須夏山、木下緑稔、藤田愛雪、玉木梅子、池田重二らが集って「白日歌会」を作っていた。記録として『白日』会誌を南仙子の筆蹟で発行していた。同人歌誌としては『おかぼ』についで古いものと思われる。

南仙子は性格的に指導者タイプだから、独善、横柄、傲慢な態度で接していた。だから、念腹とは初対面から歯車はかみ合わなかった。彼は確かに才人であった。俳句は当然として、短歌、川柳、詩、創作、絵画などどれも水準に達していた。特に絵画は金になるので専念していた。絵画といっても蝶絵のほうである。

筆者と南仙子との交際は「コロニア詩文会」を武本由夫の死後継承してから始まった。武本由夫は死の直前に、筆者に「詩文会をうまく運営するには南仙子に調子を合わせてやっていけ」と忠告してくれた。だが、筆者は南仙子の威嚇的で傲慢な態度に調子を合わせる度量がなく、いつも意見が衝突していた。

ある年、工芸展に出品した彼の傑作品を一点購入した。それが余程嬉しかったらしく、その後は「コロニア詩文会」の運営上意見の衝突することはなくなった。人間の心理の不思議さを痛感したものである。

武本由夫は南仙子とは『椰子樹』創刊以前から交友があったので、のちに『コロニア文学』創刊に際しても、多くの俳人を会員に勧誘してくれた。「コロニア詩文会」を創立したときも、ロンドリーナから馳せ参じて編集会議に出席していた。サンパウロに着くと、早速武本夫人に電話をかけ、「アルモッソはこれが食べたい、あれがたべたい」と武本夫人に注文する慣わしになっていた。武本由夫が死を前にしたとき、「僕が死んでも、サンパウロにきたときは、女房につくらすように言っておくから、家で食べて行けよ」と南仙子にいった。武本由夫が亡くなってから、サンパウロにきたときは、未亡人に食べたいものを料理してくれと注文するのが習慣になった。武本由夫の遺言を守った、ということだろうが、少しずつ態度がオカシくなりだしたので「近所の人が妙

な噂をたてはじめているから（それは事実）家にくるのは止してくれ」と未亡人は断った。こんな行動を虚心、闊達とみる人もあろうし、下心があってのことだろうとみる人もあるかもしれないが、これは筆者のみが知っている事柄である。

但野拾参は『椰子樹』創立会には出席していないし、運営にもタッチしていない。その彼が創立同人に加えられ、創刊号の「抽雲集」に武本由夫より上位に掲載されている。

創刊号の四首転載

鍾乳洞を探る

弐拾参米突の滝口に立てば飛んでみたき衝動を感じ怖れ身を引く

エスケーロ灯して入れば鍾乳石白くかげりて蝙蝠飛びたつ

鍾乳洞出で来て樗（あふち）の朧陽に湖の飛沫を浴びてたたずむ

滝つぼのしぶきに濡れて先住の遺物をあさる友のまろき背

一九九〇年四月十三日死亡　八二歳

池田　重二

池田重二の過去はあまり知られていない。一九三二年頃渡伯。一年後に長男と妻を喪うという不幸に遭った。孤独・寂

蓼の身を放浪の旅路にゆだねる。最初、カンピーナスに逗留する。そこで、「パステス屋で働いている武田公平に会った」とのべている。カンピーナスにも落ちつかず、南の三州へ放浪の旅にでる。約五カ年放浪して、パラグワスーの中須夏山の家へ居候をきめこむ。パラグワスーには文芸人が集っていたので、歌会には顔をだしていた。時報の文芸欄にその頃詠んだ次の三首が載っている。

高原の南仙子居より見わたせばマリリア低し珈琲樹の波まに
食ふために心歪める生活には読書の時の心清らか
綿花の収穫控へまだ止まぬ焼山に降る雨はうらめし

一九三三年の時報文芸欄に眼をとおしていると、「アラサツーバ・池田重」の名で次の三首が載っている。彼の作品という確証はないが、題の「放浪」と作品の内容から推理すると、彼のものとみなすことに抵抗はなさそうである。

今日もまた野末の宿をさがしつつ入陽に照らさるる旅人の胸
ここ二三日かしこ四日の走馬燈夢にやぶられ夢に寝づかれ
ジャボネース肩書づきの過去話ピンガさされつ夜は更けにけり

また、一九三五年の文芸欄に、「太陽植民地・池田生『深

まりゆく自然』という詩が発表されている。これも池田重二作の確証はないが、内容からみて筆者は重二の作だと推定している。かなりいい詩であるが、長文であるので掲載は割愛する。

一九三八年十二月の渓舟の日記には次のことが記されている。

南仙子からの来信。「重二にはとても安心して女の世話はできない。君にならできる」と言っている。重二君には俺もやや失望するものがある。

この日記は『椰子樹』創刊号を出してから一カ月あまりのちのものである。その前後のこと、池田重二はブラジル時報の社会部記者に採用されて、渓舟と同じ編集室で働くことになっている。新米の重二は渓舟に参考意見をきいたりして世話になっている。しかし、規則にしばられたり、牽制されることを極度に嫌悪する性格は勤人としてつづくはずはなく、僅か四カ月足らずで新聞社を辞めてしまう。

重二が記者の職を得て、身の回りの手荷物を担ぎこんだのは富吉好人の宅であった。たぶん以前から石竹花の家を宿にしていたらしく、心の通じる友人らしかった。ところで、石竹花の住居は部屋一つ、いたって狭いうえに、石竹花は新婚時代であったので、部厘の隅のカマを重二にあてがった。夜

になると石竹花の合図に応じて重二は屋外に出て、夜更けの街中をさまようことになる。無一文の身であるから、ピンガをのみながら時間が経つのを待つというわけにはいかない。ぶらぶら歩いて、頃合いをみてそっと帰るという日課だった。ところが新婚夫婦の愛情は激しく、夜の営みだけでは満足できなくなり、重二の存在などなきがごとく、早朝にも行われるようになった。筆者は戦後の重二しかしらない。彼はでっぷり太り、ソファーに腹をつきだして座っている姿は神経の太い重役級のさまにみえたので、重二は夫婦の営みくらい意にも介していなかったろうと想像していた。後年、青夢の表現によると「その当時の重二は痩身蒼白、ニヒリストの感じであった」という。だから、友人たちの話題となったのであろう。

重二は新聞記者を辞めると、パラナ方面へ行った。二カ月も辛抱できず、舞い戻ってくる。百姓仕事は嫌い、都会には気に入る職がない。放浪しているうちに、地方の成功者や成金族の伝記を書いて出版すれば儲かるというイデイアがひらめいた。『〇〇県人会発展史』の形式で成功者の成功物語を大きく載せ、広告代と莫大な予約金を受納して出版した。これが大当りとなり、次ぎ次ぎ発展史を刊行した。一九四九年には『パラナ邦人発展史』を出版する。金がうなっている地帯であるから重二の懐も大きくふくれ上った。重二は帰国訪問した。日本で未亡人と結婚し、サウーデ区に瀟洒な家を買

い、お抱え運転手付きで自家用車を乗りまわす、豪華な生活をした。しかし再婚生活は幸福ではなかった。財産を整理し、離婚して細君を日本へ帰した。重二自身も一九五九年七月にサントス港発、永住帰国の途についた。しかし、二・三年して再び帰伯、一九六二年二月に編集部を訪問している。

創刊号より五首抽出

雑　詠

終日を若芽喰ひあき牧牛は搾乳所に集ひ日ぐるるを侯つ

カタカタと播種機（マキナ）の音は響けども人影みえぬ霧の焼山

遠近の山焼く煙空にみちて冬日ほのかにくれそめにけり

友にはぐれし子供の泣くを道端にしばしたたずみなぐさめにけり

春霞くれゆく海にたなびきてかすかに見ゆる沖の船かも

一九六九年二月二五日、鹿児島病院で死亡。

武本　由夫

筆者は本誌に三〇回にわたり「武本由夫の文学的世界」を書いたので、ほとんど書きつくしている。そこでなるべく重複を避けるために、徳尾渓舟の日記から武本由夫の行動を描

出すること　にした。

一九三六年

▽十二月二七日

武本がきて、古野菊生のところへ案内してくれという。ちょうど古野君とアルモッソをすることになっていたので、その時間に連れだっていく。鳥井氏もいて四人で三時間あまり文芸の話をする。食代二十余ミル俺の勘定となったのは少なからずいたかった。

一九三七年

▽一月十一日

夜、青野君のところへ集って雑誌（地平線）発行について再検討する。古野を編集主任、武本君を会計主任とすることに決定する。

▽七月十七日

武本君の家で、君の結婚披露を兼ねて歌会を開く。集る者、樋田夫妻、石竹花、砂丘に俺。

▽八月七日

武本君が明日パラナへ引上げるので送別会を兼ねて歌会をやる。六時頃武本君の家に行く。集る者、砂丘、石竹花、重二に俺。

一九三八年

▽八月三十日
武本君が上聖している、といって寄っていった。職を探しにきたという。
▽九月九日
武本君は俺が口をかけてやった新聞社のほうは断られたが、文教普及会の「黎明」の編集を担当することになったいう。
▽九月二九日
午後、武本君来訪、昨日、椰子樹創刊号の編集を仕上げた由。丁度三〇ページあるから都合がよい。可成りいいものになりそうと期待する。

一九三九年

▽四月七日
夜、武本、住吉君らが椰子樹発行費について相談にくる。どんなにしても出さねば世間に申し訳が立たないことだけは確かだ。
外へ出てセルベージャを一本ずつ飲んでうっぷんをはらす。俺は三ミルしかない金をみんな使った。けれども惜しいとは思わなかった。ほんとうに幸福とはこんなところにあるのではないかと思う。
▽九月二三日
武本君と会う。先日から時報歌壇選者田中正実を聖報で叩いている丹野、鈴木のペンネームの本人は武本自身だとい

う。田中という男は下らない歌を作るくせに、心臓のつよいことには驚くばかり。うんと叩く必要があるから僕も声援する。

▽九月三〇日

武本が編集する「黎明」もいよいよ廃刊に決まり、文教普及会を退社する、近郊で先生でもしようかと思う、という。

一九四〇年

▽四月一九日

今日、田中正実氏が時報懸賞文芸の選をみてくれと持ってきた。やはり心配なのだろう。武本君が「子供の園」の編集を担当したので、田中氏は社会部に左遷された、と淋しそうだ。

▽八月一六日

武本君がひょっこり訪ねてくる。「子供の園」が廃刊になったので、三面のほうに廻されたという。新聞ももう長くなさそうだから、今度モジの歌友田辺氏の所で鶏飼いの仕事をすることに決めた由。

一九四二年

▽五月六日

武本君はモジの古野君の近くへムダンサすることになった由。昨日やっとサルボ　コンヅツトが出たそうだ。今日急いでムダンサしたという。

一九四四年

▽四月二三日

武本君の家を訪う。子供が生れて二週間になるという。武本君自身がつくったアルモツソをごちそうになる。

一九四五年

▽一月七日

今日はモジの武本君の家で歌会をやるというので朝早く出かける。着いてみると、岩波夫妻、則近、坪内、佐々木、ほか俺の知らない上木、山木氏らがいた。

徳尾日記からの抜粋は以上にとどめておく。武本由夫の指導者としての片鱗を示すものとして、大原友重の回想の一端を掲げておく。

一九三九年頃、少年（大原友重）は短歌をつくりはじめた。時報歌壇の選者武本選者に指導をお願いする手紙を書いた。武本選者は少年に早速丁寧な返事を書き「自分は先生といわれるほどの者ではありません。今後は同好の士として、お友達の気軽さで交際して下さい」と結んであった。少年は寄贈された二冊のアララギと手紙を胸に抱きしめ、幾夜も眠れなかった。

武本由夫が初心者指導にすぐれていることは定評になっているが、実際は教授法よりも、温い手を誰にでも差しだす愛

情が誰よりも豊かであったのである。

創刊号より五首抽出

サントス遊行

朝霧の降りゐしづめる街並をしはぶかひつつ一人し歩む
鈴懸の並木若葉は霧にぬれ大き雫をしとどにこぼす
ルス公園の地面しらじら霧深みひたすらきびし噴水の音は
野阜に並びて立てる童たち汽車に対ひて双手を揚げぬ
灌木の茂みに一処家ありて洗濯物白くはためける見ゆ

一九八三年一月二一日死亡　七二歳

徳尾　渓舟（恒寿）

かつて「渓舟の文学的道程」と牌して一四回本誌に書いたので、この特集号に記述する特別の事柄はない。したがって本稿は徳尾日記にもとづいて、文壇人との人間関係に焦点をあてることにする。

一九三三年

▽三月一八日

昨日、時報に俺の歌が八首もでていた。ほんとうにうれし

い。

▽九月六日

念願の上聖がかなう。聖州義塾に入塾する。しかし、別に感激しないのはどうしてか。

▽九月七日

夜、塾長よりポ語の実力を試される。ポ語の学校に入れてやると言われて怖くもなる。

一九三六年

▽一月七日

時報社長宅を訪う。社長は月給三百ミルで翻訳部で働いてくれという。俺は語学の自信がない。

とにかくやってみろ、とエスタード紙を渡される。一つ二つ試みてみたがうまく訳せず、駄目だと気をおとす。

▽一月一四日

時報社へ出かける。社長は「語学力が不足しているのは事実だが、とにかくやってみてくれ」という。

新法令の法律文の翻訳を命じられ、塾に帰り、アルモッソもせずに八幡君に手伝ってもらってやったが、法律技術語が多くて全然だめ。

▽一月一五日

自分の語学力ではつとまらないから、就任をやめると社長に告げる。かえって社長に慰められ、とにかくやってみることにする。

▽十月一〇日
タンキストなる人が俺の歌を痛烈に批評したので、急に歌のほうも研究したくなった。
▽一二月一二日
夜、日本倶楽部で文芸同好者の懇談会を開く。ほとんど歌人ばかり。久保多恵子（村井幸子）、須貝さだめの女性の参加があったのは感謝すべきだ。文芸雑誌（地平線）発刊の第一歩を踏みだすことに決議した。

一九三七年

▽一月一〇日
午後から文芸懇談会を開く。なるべく自力で雑誌を発行することに決議する。具体案を練って六時に解散する。
▽一月一一日
文芸雑誌発行を決定した以上は、責任は俺の上にかかってくるだろう。俺は物心両面で苦しまねばならなくなるだろう。
▽二月一四日
雑誌発行の具体案を練るために集合、長がつづきするために、最初は小さな新聞型にすること。一部三百レースくらいの見積り。
▽三月一〇日
「地平線」第一号が出た。衆望を担って生れたにしては貧弱だが、自分たちの努力で生みだしたのだ。愛着はひとしお。

▽九月二日

古野君が「地平線」四号の編集をしてくれといって原稿の束をもってくる。それも今晩中にとのことで面食う。住吉君に手伝ってくれと頼んだがいい顔をしない。学校を休んでやる。幸い富山君が手伝ってくれ、十一時に終る。

一九三八年

▽八月六日

総領事と椎木氏が後援するので、短歌雑誌を発行しょうではないか、と阿部青杜が話しにくる。よいことではあるが、俺はもうこういう仕事には疲れた。ごめんこうむりたい。午後、茅里や砂丘らと協議する。

▽九月一四日

夜、短歌雑誌発行について協議するために集る。総領事をはじめ一十数名が集り、短歌雑誌発行を決議する。

一九三九年

▽五月二九日

夕方出社、文芸欄を組む。これが最後の編集。やれやれと重荷をおろした感じ。

▽六月一日

今日は東山商事への初出勤、すこし早く行きすぎた。俺に専用の事務机があてがわれ、堂々たる感じだ。

一九四〇年

▽一月一七日

山本孤愁君から来信。身体のほうは快くない由。金もなく、薬も買えぬとは悲惨だ。歌が急に伸びるのは反面わるいことの前兆ともいえる。気の毒だが仕方がない。

▽四月四日

坂根総領事送別会に出席するために、葛西妙子さんが今朝七時の汽車で到着することになっている。行ってみると八時着の汽車である。今の俺は新入社員であり、勤務時間を犠牲にするのがいちばん苦痛だ。八時に到着した葛西さんをタキシーに乗せ、東洋ホテルに送りつけ、そのまま職場へ馳けつける。

夜は市内の賑やかなところを見物し十二時頃までシャーヴイアヅツトで語り合う。何だか二人は会わないほうがよかったような気がする。

▽四月七日

葛西さんは俺が付ききりで案内してくれるものと思っていたらしい。俺は勤めの身であり、夜は学校に行っているので、心中おもしろくないらしい。いつもこうだ。俺は一生懸命に世話をしてもよくは思われないのだ。

▽八月二六日

昨日の時報をみると孤愁君が俺に借金を申しこんで断られたことを歌にしている。別に悪意をもってのことではあるまいが、ちょっといやな感じだ。

それにしても、趣味の友と私生活上の干渉までし合うこと

を要求されるのは迷惑だし、不愉快だ。

一九四一年

▽一月一七日

愈々明日は結婚日、二四時間後にはサントスの旅館で新婚の第一夜をすごすことになる。一年間の婚約期間がありながら二人だけの時間をもつのは初めてだ。

▽一月一九日

初夜が明ける。しっかりしたところのある女だと思う。お互いに身体まで許し合ってみれば、しみじみとしたものがほかほかとして身体中に満ちてくる。今まで女に対して抱いていた不平なぞあとかたもなくなってしまい、満ち足りた幸福感が残るばかりだ。

▽八月二八日

最近は『東山』の編集、『椰子樹』の会計、こんどは会社の社員にポ語文法の教授なぞと、一文にもならないことを頼まれて、ますます、自分の学科の勉強もできなくなった。

一九四四年

▽十二月二一日

試験がすんだ。十年間の学校生活であった。俺みたいに歳をとりすぎて入学し、家庭を持ち、子供をもち、ひと一倍貧弱な頭をもち、並たいていではなかった。

別に実質的に役立つことを学んだとは思わないが、とにかく最高学府まで学びえたことは個人的には誇である。

▽十二月二七日

今日は卒業生の懇談会を兼ねての夕食が行われる。俺はそんな場所に出るのは好きではないが、将来社会に出て少しでも活動しようと思えば、交際方面も重視しなければなるまい。同級生が皆きている。生れてはじめて正式の夕餐会だ。面白かった。

以上で、日記からの抜粋を終る。少しながすぎたが、渓舟はそれほど文学界の中心にいて活動したことになる。

渓舟は文才はあったが、いわゆる才人ではなかった。彼のいいところは自らの限界を知っていたので倣漫にならなかったことである。

彼の学友（二世）が「君にはずばぬけた才能はないが、君の努力には頭が下るな」と敬意を表している。当時の大学ではカンニングが公然と行われていた。渓舟も友達にそそのかされて一度カンニングをやった。しかし、内攻的な性格であるからひどくあとあじの悪さを痛感し、ついに卒業するまで二度としなかった。

「天才とは九八パーセントの努力と二パーセントの才能の所有者のことだ」とトマス・エジソンは言った。とすれば、徳尾渓舟も天才の仲間入りする資格はあるといえるであろう。

創刊号より五首抽出

雑　詠

人を殺せる夢を見にけり我の血にかかる兇暴性のひそむならむか

ふと想ふ亡母の恋しさ黙々と侘びしさに堪へ飯を食みをり

一通り選歌終りてホツとすれば日旺の午後の日は傾むけり

身に浸むるものも無かりき人の死にし話を当然の事のごとく聞く

庭にきて餌漁る小鳥見てありぬ心ねもごろになりて居にけり

一九九二年十一月十一日死亡　八三歳

石竹花（富吉好人）

彼自身の語るところによると、

文学少年であった。県庁の図書館に通い文学書を読み漁った。地方の新聞に歌、詩、小説など発表した。友人と少女二人を交え、四人で謄写版刷りの同人誌を徹夜で作りたりした。夜更けになると二人の少女を送っていきながら文学の話に夢中になったので、プラトニックラヴに終った二年間であった。

と回顧する。

一九三三年に渡伯した。三年目に金城歯医師のところへ義歯工の見習として入る。その頃から渓舟の担当する時報文芸

欄に投稿するようになる。「石竹花は独特の進みかたで、時報歌壇に異彩を放っている。歌もなかなかよい」と賞められてから、赤々と情熱の炎を燃やした。渓舟は最初に会った歌人であった。

私はつとめて文芸人の会合には出席するようになった。第一回短歌会が暁星学園で行われたときも、また『地平線』創刊相談会にも出席した。

同人となり、第五・六号に「鳥眼」という題で創作も書いた。

歌人達と懇意になった。ある日、武本由夫とコンデ街料亭で二人ともふらふらになるほど飲んだ。帰りはただぼんやりとアンゼリカの字がみえる電車に乗ったのを憶えている。車掌にゆり起されて家に帰りついたことがある。

と回顧する。右の話によると、石竹花はアンゼリカ方面に住んでいたようである。リアシュエーロ街に移ったのはそれから間もない頃であろう。一九三八年四月の渓舟の日記は次のように記述している。

今度独立して事務所を開いたとのこと、行ってみる。金城氏のすぐ隣である。寝室と隣に工場を備えている。小さいけれどもなかなかよさそうだ。女物の履物も見える。さては、彼女がいるんだなと気づく。

この狭い住居に間もなく池田重二が転がりこむことにな

る。この小さな住居は石竹花が『椰子樹』の会計をしていたこともあり、地の利を得ていたので、編集など相談に使用され、果ては「酒豪たちの文学論に時の過つのも忘れられるほどになった」と語り草がのこっている。

しかし、富吉好人は一九四〇年にまた移転した。新居を訪ねた渓舟は

一軒の家に数家族が同居している(いわゆるコルチッソである)。石竹花のは部屋一つで寝室、応接間、台所兼用ぶりだ。相当苦労しているらしい。でも子供らは元気で育っている　ようだ。

と観察する。

富吉好人の生活はますます苦しくなり、一九四一年四月、マリリア市に移転する。石竹花は渓舟を訪ね、「急にマリリアに移転することになり、ムダンサ代が少し足りないから百五十ミル貸してくれ」という。「愉快な男だから貸してやった」と渓舟は日記に記している。

マリリアでは歯医者として開業する。金城歯科医のところで歯の治療も修得したのであろう。池田重二はときどき会っていたらしく、渓舟に「石竹花はずいぶん儲けており、料亭などで豪遊するまでになった。たまにサンパウロにくるときは青柳あたりで大いに遊んでいる」と告げている。

終戦になり、コロニアは「勝ち負け問題」で真二つになった。再刊した『椰子樹』はほとんど認識派であった。石竹花

は勝ち組の一方の音頭をとっていたので『椰子樹』には寄りつかなかった。反対に、一九四八年に勝ち組が発行した『光輝』という雑誌に、石竹花は「時局と歌人」と題して一文を発表すると共に、「光輝歌壇」を設置、自らが選者となり、戦勝短歌に拍車をかけつづけた。

敗戦日本の事情がだんだんわかった頃、おそらく池田重二の勧誘によってであろう、一九六〇年に同人として再入会する。翌年、六一号に作品を投稿した。その中に次の作品がある。

三十年の歯医者をやめて日語教師に転職するが我に適さむ
連日会の為に尽せし甲斐ありて奨学舎教師に推されし我か
連日会の奨学舎々監書記教師の重責担い子等を育てむ

一九六一年の第一三回全伯短歌大会に出席し、昔日の友人から大いに歓迎されたが、大会出席は一回きりであった。

羽振りのよかった歯医者を何故やめて教師になったのかは説明していないからわからない。考えられることは、彼はモグリの歯医者だったから、告発される危険をいつも抱えていたはずである。教師という安定した職業にありついたので歯医者廃業ということになった、と筆者は憶測している。

しかし、どういうわけか『椰子樹』に作品を投稿したのは二回きりであり、消えるように離会している。

創刊号より五首抽出

生活抄

陽の光とどかぬこれの寝室に六月差しつ躯弱りぬ
い寝て読む妻のかたへに座り居て明日の仕事を思い憶ふ
生活の貧しさに日毎愚痴をいふみごもる妻に吾は言なし
門の辺を通ふ電車の音絶へし夜更けに妻の寝顔みており
妻を娶りたつき苦しきこの日頃別れしひとを夢に見にける

秋野　愁（住吉光雄）

一九三三年渡伯、アリアンサ移住地に入植する。間もなく武本由夫を知る。武本から短歌や創作などに誘導される。

入植後二年、風土病のような病に罹る。医者は「百姓仕事は無理だから」と転職をすすめる。一足さきにサンパウロで先生をしている武本由夫に身のふりかたを相談する。「とにかくサンパウロに出てこい」ということで、鞄ひとつを下げて早朝のルス駅に着く。金はなく、手職はなく、不安な旅だったので、駅頭に武本の姿をみたときは、まさに地獄に仏だった。住吉にとっては生涯忘れることのできない感激であった。

武本はまず寝起きする場所を見つけてやる。次に職場を探してやる。幸いに聖州新報に記者の職をみつけた。住吉には想像したこともない職業だったが、生きるためのたった一本

の命綱だった。

武本から短歌を習っていたので、渓舟、石竹花、須貝さだめ、木村茅里らとすぐ懇意になり、職業のコツも覚えていく。渓舟の発意の『地平線』創刊には　創立会員として参加する。編集・校正・発送など手伝うようになる。創作の要領はアリアンサで武本から指導を受けていたので、『地平線』には「裏街」と「深渕」の二編を発表した。またのちには、聖州新報の文芸欄に短編を二編発表した。戦後、古野菊生は先の二編を読み返してみて、なかなかの力作であることを発見、「あの当時、作品のよさを認め得なかった自分を慚じる」という意味のことを告白している。

『地平線』がずっと継続していたら、彼は後に残るような傑作を書いたであろう才能をもっていた。一九三九年（？）に木村茅里が退社したので、住吉光雄が歌壇の選を受け継ぐことになる。

世界大戦が始まると多くの人が職場を失い、都落ちをしなければならなくなった。住吉光雄も新聞発行禁止となった以上は、渓舟から二十ミル借りて、リベイロン　プレット地方に百姓として働く身となった。

一九五七年頃、彼は南米銀行ピネイロス支店に職を得た。預金収集係だったが、のちに、輸送金車（カーロフォルテ）の護衛係に回された。ヘルメット帽をかぶり、二丁のピストルをタスキにかけ、いつも固い表情をしていた。筆者ととき

どき顔が合っても、手で挨拶するだけで、緊張の表情をくずすことはなかった。

サンパウロに移転してからは短歌会にも出席するようになった。一九七〇年代に、住吉、光田、小池と筆者らが「ビネイロス短歌研究会」を組織、隔月に集合していた。その頃は皆熱気をもって短歌を論じたものである。「ピネイロス短歌研究会」は四年くらいで解散した。

一九八四年頃、住吉光雄は訪日した。故郷は徳島県である。彼は半年ばかり滞在したが、故郷から一歩も出ず、毎日お経ばかり読みつづけた。ブラジルに帰ってもお経にひたりきりの生活をしていたので、「自分はもう最近の新傾向の作品にはついて行けない」ともらしていた。

ある日、家族は歌友の誰にも通知することなく、彼を埋葬した。彼の家族は筆者の店をよく知っているのに通知しなかった。密葬はあるいは住吉光雄の遺言であったのかもしれない、と考えることによって納得するよりほかはなかった。

創刊号から五首抽出

サントス遊行

靴だこの足引きずりて冬雨に滞れし波止場を友といゆくも

砂浜に打ちあげられし自くらげ生々しくぞ海の香りす

暮れ迫るゴンザガ沖の夕霧にまたたきそめつ島の灯台

はるかなる岬のあたり行く船の船尾に白く水泡立ち居り

ゴンザガの海に向ひて続きたる椰子の並木路いまだに果てず

樋田美沙子（操）

樋田陽荘の妻美沙子は光田寿男の姉、阿部玲子の母であることは衆知のところ。

文学青年であり、青年たちのリーダーとして活躍していた樋田徳重の勇姿に操は魅了され、徳重はインテリで美貌の操に幻惑され、二人は熱烈な恋愛の仲になる。

光田寿男が筆者に語ったところによると、二人が結婚の意志を父親に表明したところ、父親は猛烈に反対した。岩男と寿男はまだ年少で畑仕事の役にたたない頃であるから、百姓として操の労働力は必要欠くわけにはいかなかった。しかし恋人らは周囲の反対を押しきって結婚した。近代思想に目覚めている二人は、二人の人生を創ることが至上命令であったのであろう。一九三〇年前後のコロニアでは、娘は結婚の相手を選択する自由はなく、すべて父親の命令で処理されていた。嫁入りして初夜の翌くる日、初めて夫の顔を正面からみたという例は少なくなかった。だから樋田夫婦の結婚は移住地の話題になったらしい。

中江克巳はアリアンサ時代を次のように回顧する。

一九三〇年十月のこと、区会の用件で初めて樋田家を訪問

する。用件がすむと夫人は酒をすすめる。自分は幼稚な模範青年であったので、お断りする。樋田氏は一杯一杯と酒杯を傾けつつ、酒の功徳と弊害について語る。深更まで文学談をされて時をすごした。

アリアンサ第三区青年会は「ノンベエ青年会」の定評を蒙るほど、左キキが集った。武本や私も何時の間にか、左キキの雑兵の一人に加わっていた。こうしたノンベエ達にとって美沙子夫人は、時には優しい母となり、又厳しい姉となってよく世話をしてくれたものである。よく「アンタ方はダラシが無いよ、酒に酔って正体がなくなるなんて、それなら飲まない事よ。」と言い言いした。

ほんとうに、夫人には当時の我々を引きつける何かがあった。それは歌を作るからとか、同郷であるからとかばかりではなく、家庭的な温かさであったと思う。

樋田氏の温柔な性格に対して、夫人は直情家であって、凡て是は是、非は非と判然たるもの言いをしなければ気のすまない人であった。行きすぎたり、脱線したりしがちの私達若い者はよく夫人に叱られた。しかし、夫人の温情のこもった叱責に対して、私たちは常に感謝していた。あるとき、「一体、近頃の人は、眞剣な恋愛も出来ないで、愛だの、美だのというからおかしい。まず、悪結果に立ち到った場合、自分に有利な方法を考えておいてから恋人を探そうと言うのが、あなた方なのよ。もっと純な気持になって貰いたい。」とい

われたことがあった。

次に、武本由夫の回顧談の一つを掲げておく。

歌に限らず非常に向上心の強い勉強家であったから、家事・育児の寸暇を惜んでよく読書し、知識の啓培に　努めることを怠らなかった。私が葡語の夜学校に入学すると、夫人も志願して私と一緒に通学し始めた。今でもそうだが、私の葡語は一向に進歩しないが、一方、夫人の学力はぐんぐん私を引離していった。今にして考えてみれば、総べての事によく気のつく明敏な人であったから、葡語の修得と、今一つは怠惰な私を激励するために病身を押して私と一緒に夜学へ通ったのであろう。然るに、魯鈍怠惰、一向ものにならず、今もって夫人の期待に添わない私は直に愧死に価する者である。

樋田夫婦は揃って「おかぼ短歌会」に出席し、岩波菊治の指導を受けるようになった。「おかば歌会」に出詠したものの中から三首を掲げる。

物思ふは我の癖かや愚かしき思ひつぎつぎに湧きてつぎ来る

事毎に我に似たりと子を叱る夫の心を悲しく思ふ

いらだちし胸おさへつつ向ひ見る鏡に写るさもしき我が影

中江・武本の回想記は長文であるから、以上の点描をもって終るが、美沙子像は鮮明に描出されているものと思う。

創刊号の「抽雲集」に組まれている女流歌人の中では美沙子はやや上位にある。この順位はいちおう作歌力量というものが考慮されているものとみていいであろう。

創刊号より五首抽出

雑　詠

頑は我に似つるか吾子の性心わびしくいさめても見し
たまさかの暇を友としつり糸にうき忘れしと夫帰り来ぬ
隣り合ひて住めば黒女（くろめ）に愛想言へり交る心我もたなくに
あはただしく日を経る我も今日一日子等とはなれて海に遊ばむ
真昼を憩ふサンビセンテの岩かげに忘忽草はここだ咲きをり

一九四一年十二月三日死亡　三二歳

坪内　広代

力行会の移民として一九三五年にアリアンサ移住地に入植する。

十七歳の頃、赤彦に「歌を出してみなさい」といわれて、『アララギ』に三首投稿したら次の二首が載った。

紅き灯の町にともれば何やらむ心の奥に波のさわぐも

くらかみにかざすも悲しくちびるに当つるもさびしのばらよ
のばら

全然アララギ調ではないが、少女の作品であり、資質をみてとつての採点とも考えられる。しかし、この二首掲載が彼女を短歌の世界に導いたのはたしか。結局短歌のうえでは菊治と広代は赤彦のきょうだい弟子ということになる。

広代は文学少女であったという。『文章世界』に盛んに投書していた。吉屋信子も熱心な投稿者であり、二人の文章によく並んで載っていた。吉屋信子は文章の世界にまっしぐらに突っ走り大成した。坪内広代は師範を卒業して先生になることを目的としていたので、試験勉強、師範卒業に没入、『文章世界』から自然に遠ざかることになる。

一九三八年にはサンパウロに移転してくる。師範学校を卒業した以上は教師として身を立てるのが天職である。サンパウロに出てきた当座は聖州新報に少しの間勤めた形跡がある。須貝さだめが選歌編纂した『移り来て』の原稿を整理し印刷部に向したのは木村茅里であるが、坪内広代も原稿整理を手伝っていることから、新聞社に勤めたことが判断される。

戦争中はモジ地方で奨学舎か育英舎のようなものを経営していたときいている。戦時中そんな経営が可能だったのか、筆者は疑問をもったが、ついにききただす機会はなかった。

戦争が終るとまもなく、サンパウロに帰ってきた。一時ピネイロス区に住んでいたが、ヴィラ　ソーニアに住宅を購入し、学園を開園した。彼女のその住宅で「サンパウロ短歌会」を二回開いたように記憶している。

とにかく、彼女の希望・目的ではあったが、子弟教育・邦語教育に捧げた一生ではあった。

創刊号より五首抽出

イッペの花

雨の日の街路にけぶる黄の花はイッペの花ちゆう愛しき樹かも

夕づきて雨ほそぼそとけむらへばイッペの街路樹わきてよろしも

エトランゼ心佗しくいゆきつつ夕の街にイッペの花みし

さらさらさら秋風聞かむ竹林の元に座ればうつつともなし

水堤ぐる人の足音はきかざらむひねもす濡れて匂ふ朽葉道

木村　茅里（千里）

聖報文芸欄の担当者須貝さだめが退社したので、その後継者として、一九三九年に木村茅里は就任する。

聖報社出版、須貝さだめ選歌編纂になる合同歌集『移り来

て』は、木村茅里が担当者として入ったときは、原稿のままで引出しに蔵ってあった。そこで、木村茅里は坪内広代の手を借りて、原稿を整理し、編集して印刷部に回してやっと出た、というのが真相である。

木村茅里は「サンパウロ短歌会」にはつとめて出席していたが、主婦は家庭に束縛されているので、毎回とはいかなかった。それだけに彼女が出席すると座は華やぐようだった。夜、すこし遅くなるときは、渓舟が家まで送る役を受けもっていた。つつましい性格にもかかわらず、彼女の存在が会場をどれほど華やかなものにしたかが想像できる。

池田重二は彼女を次のように語る。

前担当者須貝さだめ氏の覇気に富んだ性格と対照して、これは又、おっとりとしていて、自重に過ぎる型の婦人である。談話のときに示す態度や表情はこの性格をこよなく反映していて、少女のような初々しい感じを与える。感傷的……そうだ、この言葉は氏の歌にも言うことができる。

「淋し」「悲しい」「なつかしい」等を言う詞の蚕動は氏の歌心の中枢ということができる。抒情の歌によく歌道の核心を把握して、自身の芸術的欲求を満たそうと努力している。岩波氏がかって、茅里氏の短歌を評して「あの感傷の殻を打ち破り、それを突破し、そのよりてくる本源を掴み、表現するまでに至るならば、現在女流歌人の白眉、美沙子、貴代、妙子氏等を断然抜くであろう」と。まさに適評である。しかし

筆者は、氏の感傷は今後も抜けまいと思う。氏はいう「アララギ系のすなおな客観的な歌よりも、もっと鋭利なメスのような刺戟的な歌のほうが歌として価値があるもののようである」と。この一言は氏の歌の方向を如実に物語ってあるまいか。

木村茅里は未亡人となる。しばらくして再婚してプ・プルデンテに移転する。当地で日本語学校の先生をしたときいている。サンパウロに戻り再入会した『椰子樹』、又「サンパウロ短歌会」には「三浦千里」のペンネームを使用している。

もう九十歳を越しており、外出が不自由になってからは歌会には出席していない。しかし『椰子樹』には、自然と自己一体感を静謐に詠む作品を発表しつづけている。後輩に力強さを感じさせる人である。

創刊号より五首抽出

雑　詠

のびちじみもれ陽のかげたゆたへばさらさら梢を風渡る見ゆ

住む人のあるとも見へぬ荘園に丹つつじの花今まさかり

つぶら実の鈴なりのびはの木の下に児の投げくるるを身がまへて待つ

長兄と言ふをうべなひ幼なかるこの子は母を助けんとする

手先仕事なす日の亡父の癖等を子は笑ひつつ言ふ糊のばしつつ

須貝さだめ（ふみ子）

一九三六年に聖州新報は「聖報歌壇」を設置した。須貝さだめは歌壇の選者に任命されると共に、文芸欄をも担当することになった。ただし、当時の聖州新報は選者名を表記しなかった。選者担当以前の須貝さだめの文学活動を筆者は知らない。漁った文献にも見えないので一切が不明。

しかし、コロニアで最初の合同歌集『移り来て』を編纂したことで有名になり、存在性を示した。『移り来て』は須貝さだめが担当した期間に発表された作品のなかから更に選者が選出したものを一冊の本に収録したものである。

しかし、須貝さだめは選出した作品を原稿用紙に書き写した時点で聖州新報を退社している。原稿を整理・編集し、印刷部に回したのは木村茅里の稿でのべたので略す。

須貝さだめが聖報を退社した理由は知る由もないが、『椰子樹』第四号に「農婦の歌」と題して八首を発表している。内容はトマテ作り、フェイラの商いなど、かなり貧しい生活の歌である。想像できるのは、新聞社の安月給では一家を支えることができなかったということである。教養ある都会人が田舎のトマテ作りに転じるなど余程の事情であったと考えられる。その後も折りおり生活詠を発表しているが、一九四〇年の第七号には住所がサンパウロとなっている。というこ

とは再び都会に移転してきたということである。

戦後、『椰子樹』が復刊したけれども、須貝さだめは再入会していない。また作品も発表していなかったようである。彼女が再入会したのは一九五七年であった。復刊してから十年後である。短歌に郷愁を覚えたということか。しかし、作品は一度も発表しなかった。

須貝さだめと筆者が名乗り合って面識したのは一九六五年頃、筆者が『椰子樹』の編集をしていたときで、会費を納めにきて面接したわけであった。

彼女は当時、筆者の住宅からそう遠くないところで、日本語学校を経営していると語った。短歌についてはとうとう一言も話し合わなかった。「何時かゆっくり話し合うときもくるだろう」と単純に考えていたが、とうとうその機会はこなかった。

筆者が須貝さだめと面接したのは既に五十歳をこえた頃であったから、南仙子が表現する「アカシアの花のメシベである。穏和と教養とそして吸取紙に潤んだ赤チンタである。太陽を割ったメランシアの紅である」のような激しい情感的なものはなく、冷徹で厳しい感じだった。

創刊号の四首転載

口唇に玉蟲色の紅さしてけほふ母をば恋ふ我が三十路

恋す程麗人にあらず才もなしとあきらめて居し我が乙女の頃

友はみな恋する資格ある如し我に恋などふさはしからず

蜻蛉の少き国に生れたる吾子に語るは故里の野辺

祝三〇〇号記念号

サンパウロ　短歌会

ジャバクアラ短歌会

ス　ザ　ノ　短歌会

福　　博短歌会

ロンドリーナ短歌会

あらくさ短敵会

タウパ　短歌会（閉会）

カンボス短歌会（閉会）

モ　　ジ短歌会（閉会）

グアイラ短歌会（閉会）

椰　子　樹　社

座談会「椰子樹」の課題と展望

出席者　　渡伯
小野寺郁子（一九三九年）
高橋　瑛子（一九五六〃）
小池みさ子（一九六〇〃）
上妻　博彦（一九六〇〃）
多田　邦治（一九七三〃）

（多田）三百号記念の刊行がかなり切羽詰まって来ました。前の二百五十号から八年ということで環境もかなり変化したわけですけども、なかなかこの座談会のテーマが絞れませんで、ずるずると今日になってしまいました。実際、私は今日何も用意してきていません、そこで今日は皆さんが椰子樹について普段お考えになっている展望なり課題なりを自由に話していただきたいと思っています。

（上妻）今回の座談会については、当初は今まで椰子樹の中心になってやってこられた女性の皆さんに集まっていただいて、という案があったのですが、準備をすすめているうちに時間の都合や体調のすぐれない方もありまして、新しい人達でやってはどうか、と強くすすめられ、こういう顔ぶれに落ちついたわけです。

（多田）そんな事情で今日は椰子樹のなかでは、比較的若いほうに分類される人達が集まりました。今申し上げましたようにテーマは特に決めていませんので、皆さんが見て、椰子樹にとって、今直面している問題は何か、というようなことから話を伺って見たいと思います。

会員減少について

（小野寺）問題はやはり会員が減ってゆくことじゃないでしょうか。会員が減ることと歳をとるということと関連があるわけでして、新しい移民がなくなって時間のたった現在、これが理由で会員が減ってゆくのは仕方ないですものね。

（小池）戦後に来た人は歌を詠む人が少ないですから、もう少し詠む人はいると思うんですけど、やはり小野寺さんのいうように歳をとって会員が減ってゆくのが一番の問題じゃないかと思います。

（多田）高橋さんはどういう点が今課題だと思われますか。

（高橋）なんて言いますかね、昔から続いてきた慣習とでもいいますか、そういうものに縛られたものがありすぎるように思うのですが。椰子樹の会員はこうでなければならない、というような拘束されたようなものがありはしないかなって、そういうものがこの頃ちょっと気になっているのですが。

（小池）若い人達をもっと出した方がいいってことですか。
（高橋）それも言えますけれど、そういうことよりも、たとえば会員のなかに、少し定型からはみだすような個性の強い人がいたとしますと、それを受け入れまいとするような雰囲気が感じられたりとか、みなさんはそういうことはお感じにはならないでしょうか。作品はおおいに批判し、比較しながら切磋琢磨して磨いていくべきだと思いますが、どんな人でも完璧な人というのはいないのですから、性格的なものを理由にして人を受け入れないようなことは歌誌の本分から外れるものだと思います。学校のクラスでも同じですが、優等生ばかりのクラスなんていうのはおもしろくないし小さく固まってますよね、性格、思想、作風にいろんな人がいてこそ巾の広い味のあるクラスつまり短歌の集団になると思うのですが。
（小池）そういうことは私も感じることがあります。
（多田）上妻さん、今、椰子樹にとってこういうことが課題だっていうものがありますか。
（上妻）今、高橋さんが言われたようなことも確かにあるんじゃないかと思いますが、先程の会員が減ってゆくということはですね、これはもうどう言ったって仕様のない現象で、年齢的な理由でそうやって減ってゆく以外に、なにか魅力を欠くというようなことがあるんだろうかとも思います。戦後移民もいるじゃないかと言うんですが、いろんな面で戦後移

民が参加しない、今日の会も比較的若い人達に絞ったという理由も、その戦後移民ということを頭にいれてあったわけです。なぜ戦後移民が積極的にならないかということも、高橋さんが言われたようなことが理由の一つではと思ったり、魅力というものがないのかな、とか考えるわけです。

（高橋）必ずしも短歌人口が減ってるとは思えないんですね。たとえばあらくさ短歌会なんかでも、ほとんどの方が戦後移民でして、そういう人達も椰子樹に入ってくれるといいんですけど、なぜ入ってこないかと思うんですよ。

（多田）会員が減ってゆくということはもう数字的にはっきりしているわけで誰がみても椰子樹の直面した問題だと思います。会員を戦前とか戦後とかいう分け方はともかくとして、私の年代についていいますと、まだ現役の人が多いんですまだ六〇になっていない現役がたくさんいるんです。だから私の年代で現役を退いてから短歌を始めようという人があると思います。今、私の年代で俳句や短歌をやってるっていうのはどっちかっていうと特殊な部類に入るんですよ。

（上妻）まあ、今のそういう一世であり家長であり現役であるという人達には、戦前の一世や家長がくぐってきた人生がちょっと分かりにくいんですよ。つまり今の現役の人達は昔の家長のような生き方が出来にくいわけですよ、生活や仕事をとりまく環境が昔と全然ちがうんですよ、そういうことが短歌へのとっかかりを妨げているということもあるように恩

いますね。

（小池）私、今日、バスに乗ってくる途中思ったんですよ、バスにたくさんの日本人が乗ってくるんです。でもみんなカラオケに行く人達なんです。みんな大きな声で話し合って、それも女の人が多くて、すごいんですよ。

会員数の変遷（一九九一年以降）

年	会員数
一九九一年	二三八名
九二〃	二一三〃
九三〃	一九五〃
九四〃	二〇八〃
九五〃	一九一〃
九六〃	一八九〃
九七〃	一八一〃
九八〃	一七五〃
九九〃	一五四〃
二〇〇〇〃	一五一〃
〇一〃	一四八〃
〇二〃	一四五〃

（小野寺）いまカラオケやってないって言ったら人並みじゃないみたいに見られますよね。

（上妻）それはね、日本でも同じことですよ。日本の歌壇でもね、平均年齢は七十才ということですからね、ここは七十五才ですか、もっとですか、日本でもそれだけ若い人に魅力がないということになっているわけですよね。出版された本なんかを見るとおびただしくてかなりいるようですけど、日本の人口からするとわずかなものですよ、一般の人からすればかなり特殊な人間ということになるんですよ。それがなぜここでもそういう特殊な人達がいるかというと、これはやはり、将来日本に帰るんだから、日本語を一生懸命勉強するんだよと親からたたき込まれた子供たちが、今やってくれているわけですよね。そういう子供たちのなかでも特に日本語に情熱を燃やした人達がいたおかげで短歌というものがここまで続いてきたのだと思います。今のようにカラオケがあの当時あったなら、カラオケに行った人もいたでしょう、だけどそのころはそれしかなかったわけですよ、一生懸命に日本語や文学に打ち込んだ青年たちがいたんですよ、親が日本へ帰ることをあきらめると、子供たちに教育をつけるためサンパウロのような中央の都市へどんどん行かせ好きなように勉強させたわけです。それが短歌が今日まで続いてきたことの源なんです、ありがたいことですし事実でもあるんですよ。

（小野寺）戦前の人はほとんど農業移民です、だから昼一生懸命働いて、夜、自分の思いを何かに表現したいということで、短歌をその手段としたんです、でも農業というのは自分

が勤め人じゃないから、そういうことをやっても叱られることはなくて本人の責任なんです。戦後移民の入っていうのは大体企業の社負で勤め人ですから、お勤めしながらそんなことを一生懸命やっていると上から叱られるんだって、そんな風に言われたことがあります、そういうこともあるでしょう。

（小池）多田さんみたいに工業移民で来られた人もいるけど、戦後だって農業で来られた人がずっと多いんですよ。

（上妻）ですからね、戦前でも歌ばかり作って農業のほうはあんまりぱっとしなかったという人もいたかもしれないし、おそらくそうだったと思う。そういう農業を放り出してでも歌に励んだ人がいて、その人たちがだんだん子供移民に教えていったのかもしれないですよ。ところが今、工業移住の人が会社の仕事を放り投げて歌を作ったり、農業移民の人がやはり仕事を放り出して歌を作っていたんでは飯も食えんし、ですから戦後の一世はあらゆる面で短歌のようなものに参加できにくい、そういう移民の環境になって来たこともあるんですよ。だから、そういう現役を退くというような時期がきたら、また増えてくると思いますよ。

（多田）農業移民と私のような工業移住を比べると、私なんかは公と私の区別が日常わりとはっきりしてる、ところが農業とかの人は公私の境目が曖昧な面があるでしょう。どっちが歌を詠むに適しているかということはやはり本人次第です

よ。今、会員が減ってゆくということについて話してますが、これがどんどん減り続けてゆくのか、あるいは減りつつもある程度は数を保ってゆくのか、あるいは増えてゆくかその三つのうちの一つなんです。私は減りつつもある期間は数を保ってゆくと思います。いま言っているように、農業にしろ工業にしろ現役を退いて短歌を始めようという人がこれからも出てくると患います、今までもそういう始め方の人がいつも出てきていますから。

（上妻）二〇〇号、二五〇号の記録を見てみたんですけど、その期間の椰子樹への投稿者は減っていないんです、こんどの三〇〇号記念号への投稿者はいくらかは減るかもしれないという感じです。ところが、椰子樹の会員という面からみると、購読会員が減っているということは事実ですが、短歌を作る人が減っているという感じは今のところ受けていないです、しかし、時期がくればがたっといくかも知れないがこれはしょうがない。だけどいくら減っても創刊当時の会員は四十何人です、そこまですぐにはいかんと思います。現に新聞歌壇はどのくらいですかね、このまえ日系新聞をちょっと勘定してみたんですが、椰子樹に入っていない人が二〇人くらいいましたね、年齢とかはわかりませんが。

期間ごとの発表歌数

一～五〇号　　一七八一二首

五一～一〇〇　二九六四四首
一〇一～一五〇　二〇七一九首
一五一～二〇〇　二六九六八首
二〇一～二五〇　記録なし
二五一～三〇〇　三二〇九四首

（小野寺）そういう人達に椰子樹の会員になるように勧めてもですね、もう歳とってるから、というのがほとんどの返事です、初心者ってのが八〇歳ですものね。

（多田）そういう人から見ると、椰子樹はかなり敷居が高いんですよ、毎回十首をそろえて出すってことは、かなりの負担だという話は入会を勧めたときによく返ってくる言葉です。

（上妻）会員の減少ということでちょっと気がつくんですが、出稼ぎで、そっちのほうへ歌人が流れているんじゃないかということはありませんか。

（小野寺）それはないんじゃないですか・行った人はもう帰ってきてますし。

（小池）第一、一世の出稼ぎは少ないですよ、ほとんど二、三世ですから、もうそこまでやる気力のある一世は少ないですよ。

（多田）高橋さんのご指摘はちょっと後回しにして、会員が減ってゆくという点についてはどう感じておられますか。

（高橋）ですから、戦後こられた方でも短歌を作ってない方がないことはないんですよね、だから急激にがたっと作歌する人がいなくなるということはないと思います。まあ、現状でずっといって、それからしだいぼそりに消えてゆくってことじゃないでしょうか。

（小野寺）もうすこしこう宣伝して後続会員といいますか、そういう人を増やせる方法がないでしょうかね。実作しなくても作品を読むのが好きな人だっていますしね。

（多田）この椰子樹はね、新聞歌壇もそうですけどブラジル移民の消息を知るのに結構役にたってるらしいんですよ。自分は作らないけど、特に新聞などから、ああの人はまだ元気でやってるとか、こういう生活してるのかとか、そういう目的で作品を作らない人達にもかなり続まれているんです。

（小池）作品読んでると、ああこの人はこういう生活してるんだなってわかりますものね。

（多田）だからそういうのを含めると数字に出ない短歌人口はかなりいるんです。だから将来は減っていってなくなってしまうかも知れないですけど、我々は今そんな先のことを言ってないで、まずはせめてここ十年くらいのことを考えて、会員がどうかということを考えるだけでいいと思うんですがね。

（上妻）やはり、実作者も入ってもらわないといけないわけですけど、並行して読んでもらえる人、購読会員も入っても

らいたいですよ。

（小野寺）岩波賞でも大会でも会員以外でも自由にということで、別に堅苦しくしているわけじゃないと思いますよね。それに大会でいい成績をとったりすると椰子樹に入ろうかとする人もあるんじゃないでしょうか。

（多田）短歌というのは、日本人にとって七五調というリズムは体にしみこんでいるものだと恩うんですね、二世が短歌は知らないけど先程のカラオケでよく思うんですが、ちゃんと七五調の歌詞にすなおに入っていってます。だから私たちの二世も、いずれ短歌を始め、椰子樹に入るという可能性は秘めていると思います。二世にとって、短歌は敷居は高いかも知れませんが、越えられない塀じゃないですよ。現にここで生まれた会員だってちゃんといるじゃないですか。それよりも工業移住で来た我々の仲間、それにコチア青年の皆さんは日本の学校を終えて来た人がほとんどですよ、だから、現役を退けば短歌の仲間に入ってくる可能性は充分にありますよ。

（小野寺）では、そういうことに希望を持って。

（上妻）これはちょっと耳にしたことなんですが、私もやろうと思ったら、あの新聞歌壇で見るような作品は作れると思うという人がいるんです。そういう人はいるんですよ。

（高橋）そういう人がどんどん作ってくれるといいですね。

（小池）そういう人にドンドン作るようにすすめて、それか

ら地域の短歌会とか新聞歌壇とかに参加するようにすすめて、それから椰子樹に入るというふうに。

（多田）だから椰子樹の会員というのは減りつつあるかも知れないけど、短歌への関心というかそういうものは減らないと思いますよ、日本人がいるかぎりはね。こういう人に入ってもらうには椰子樹に入りやすいページをもうけてあげないといけないと思います。編集の手落ちかもしれませんけど今の椰子樹には初心の人が入りやすそうなところがないんですよ、題詠のところが二首だから入りやすいかなってところです。

（小池）前に酒井先生の「鎖」というページがありましたよね。

（多田）そういうのがあるともっと入りやすくなるんじゃないかと思います。いろんな機会に人に勧めたこともあるんですが、やはり入りにくいというような返事でした。選者の皆さんの批評もそう厳しいことは言わないんですけどね。

（小池）私が入ったころよりも採るのが多いですよね、今の選者の方、あまり落とさないでしょう。

（高橋）昔の批評は厳しかったですよね、井本さんなんて、採れるのは少ない、なんてもうはっきり。

（小池）四、五首しか採ってくれない場合がうんと多かったです。

（多田）昔は厳しかったと思います。批評する側される側と

もに今と熱意が違うように思います。今は熱意がないというのではなくて、熱意のある方が減ったように思えますね、今はむしろ批評といってもこう、励ましのほうが多いでしょう。

（上妻）励ましというか、その気になってもらうためのようなことをね。私も記憶にあるのは、褒められたから入ってしまったんですよ、たしか。初めて作歌したころね、何だこんなものは歌じゃないとか見込み無いとか頭から言われたらとっくにやめてますよ。八〇の手習いの人だっておそらく同じことだと思います。

（高橋）私が出すきっかけはサンパウロ歌会で、清谷さんにすすめられて、出してくださいよっていわれて、それから出すようになったんです。周囲の人に勧めるというのも必要かも知れませんね。

（小池）私が作りはじめたころは全然外に出られる生活じゃなかったですから新聞に投稿を始めたんですよ。梅崎さんがちょうど日伯毎日の選者をされてて。

（小野寺）やっぱり新聞のほうが入りやすいですよね。それで自分の名前が新聞に出て、近所の人、親戚の人、知り合いの人が読んでくれてうれしいでしょう、やっぱりね。

（上妻）結局、自分の存在というものを確認すると同時に、呼びかけみたいなそういう気持も働く訳ですね、短歌そのものは。知ってもらいたいからこそ表現しているわけですね。

（小池）奥さんが短歌を作っていて、それをご主人が見て、家庭のことをばらされるようなこともあるわけで、それを嫌がるだんなさんがいるってことで、それで止めることもあるらしいですね。私もそういうところがあったんですよ、やっぱり言われましたよ。

（小野寺）どうしてもみじめなことだってありますからね。

（小池）主人が生きてたらまだ歌を詠んでないんじゃないかと思いますし、その反対に頑張ったかもしれないし・・・。

（高橋）じぶんを裸に、赤裸々にしないと文学は本物でないといいますからね。

（多田）人の歌を読んでると、自分の近辺よりも作品に出てくる他人の性格の方がよく分かるような気もしますからね。嫌がる人もいるかもしれません。

（小池）やっぱりね、喧嘩になんかなると言われるんですよ、何回も言われました。

（小野寺）女性はどうしても社会のことよりも身近なことを詠みますからね。

（上妻）小説なんかと比べれば短歌は声ですからね、ホントの真実の声を書くわけですから、家庭のことでも自分のことでも裸にするのが本当だと思いますよ。

（高橋）それを無くしたら迫力のあるものができないですね。河野裕子さんなんかもずいぶん出してますよね、赤裸々なことを。

（多田）いろんな方が短歌は記録性にすぐれている、と書いています、これも本当のことをありのままに書くからそういわれるのでしょうね。小説なんかはノンフィクションといってもどうしてもある程度は脚色できるんだけど短歌はそれが出来にくいし、するヒマがありませんよね、短いから。

（小池）日記なんか書いてなくても昔の歌を見るとばっとどこを詠んだかわかりますものね。

（多田）いま、お話が短歌の別な方向に向かってしまったんですが、会員が減ってゆく問題については、私は当分はあまり悲観的に考えたくないと思います、皆さんの結論もそのへんにしておいていいんじゃないですか。

（高橋）あまり悲観的に考えないはうがいいですね。

（上妻）私もそう思いますね。ですから今までの記念号ではこれが最後、これが最後と言われてきたらしいですが、この三〇〇号では三五〇号を目指してというような言霊をね、言ってもいいと思いますよ。

（小野寺）今のスタッフが三五〇号を目指していると言えば、それで助まされる会員があると思います。

（高橋）もう消えてなくなる、消えてなくなるっていわれたら投稿するほうも張り合いが無くなってしまいますよ。

（小池）八年で次の記念号がくるんですよね、だからまだまだですよ。

椰子樹のスローガンについて

（多田）だから三〇〇号は三五〇号へのスタートだと思ってやっていっていいと思います。会員が減るということについてはそのへんにしておいていいんじゃないですか。それではさきほど高橋さんからお話のありました、従来からの慣習に捕らわれすぎているんじゃないかということなんですが、ちょっと焦点がはっきりしないように感じるのですが、小野寺さん、小池さんもそういうふうに感じられていますか、従来からの慣習に捕らわれすぎていると。

（小野寺）そういう風には私は感じませんけど。

（高橋）習いっていうか体質っていうか、説明はしにくいんですが。

（多田）こういうことは、具体的に議論しにくいんじゃないかと思います。そこでですね、ここに椰子樹の創刊号があります。これをちょっと開いてみていちど創刊当時の椰子樹の趣旨などを確認してみてはどうかと思います。

本誌の建前は、流派巧拙を問はず、ガッチリ手を組んで互ひに勉強し合って行きたいと言ふ処にある。個人的な感情に捉はれることなく、主張は主張として誌上に堂々論陣を張って頂きたい。　（　渓舟、由夫　）

「椰子樹」創刊号・編集後　記より

（小野寺）その精神はいまでも生きているんじゃないですか。そう思いますよ。

（多田）安良田さんの書いておられる武本由夫とか酒井繁一の話を読むと、流派とか巧拙とかでかなりの葛藤があったみたいですけど、それも主張や作品の研磨のしあいと思えばそれでいいわけで。

（上妻）ここで創刊号は武本由夫、徳尾渓舟が編集をしているわけで、この個人的な感情にとらわれることなく主張は主張、というのは文芸作品を個人的な感情に持ち込み、尾を引くというようなことではどうかということですよね、作品そのものでの個人的感情を。

（高橋）いまの椰子樹ではどうなんでしょうか。

（上妻）こういうことがあの時代にはあったのかと、でもこれはほとんど初めのころですからね、というのは岩波菊治をはじめ坂根総領事とかそういう人達がやっておられたわけで。ところが昔の人は歌を詠みながら、「おれの歌がわからんのか」ということを平気で言う人もおったということを私は読んだことがありますよ。それほどにがんがんやりあって作品を磨いたわけです。そういうことがだんだん出来にくくなった、もちろん、論をね、短歌論を展開するということを。そら日本のそうそうたる学者たちの書いてあることをある程度言ってもいいんじゃないかと思うんですが、問題は後に引

いたがためにだんだん違った方向へ行くという感じにならんようにしたいと思うわけです。

（多田）会員が減ってゆく問題と開通しますけど、そういう流派巧拙を問わずという指針からある程度はずれてゆく傾向もあって、会員が減ってゆく、そういうことがあるってことはいくらかはそれから逸脱しているわけですよね、そういうことがあると思えますか。

（高橋）ひょっとしてなにか抑えられているようなものがありはしないかなっていうように感じることがあるんですよ。

（小野寺）でも一度入って、そういうことを感じて出ていったのならそういうことがはっきりしますけど、入りもしないで最初の椰子樹のスローガンに合ってないって言うのはおかしいですよ、入ってからスローガンとは違うと言って出ていったのじゃないんですから。

（高橋）こと短歌にかんしては言いたい放題言ってもらう方がのぴると思うんですよ、それを抑えているような面がありはしないかっていうんですよ。

（小野寺）私は特にそういうことは思っていません、だいたい最初のスローガンに添っていると思っていますから。こういう傾向はダメだっていうようなことはないと思っています。

（多田）小池さんは何か感じますか、スローガンに反してないかとか、でもあくまでもスローガンですからね、多少バラ

ンスが揺れ動くことはあると思いますけど。
（高橋）その今までのあり方ってのは作品に対するっていうよりか、個人的な感情っていうようなものもあったんじゃないかなって感じるんですよ、もしかしたらですけどね。
（多田）酒井繁一の世界を読んでいると、そういうこともあったってことがわかりますね。
（高橋）私、いつも申し上げているように作品に対する批評、批判はおおいに結構だと思うんです。でも個人的な性格だとか考え方に対して批評したり感情的になったりするのはこれはもう椰子樹のあり方としては賛成できないという気がするんですよ、そういうものないでしょうか、私だけの思い違いでしょうか。
（上妻）やはりね、私は、これ人間だからね、あるはずですよそういうことは、誰でもどういう社会でも。だけど、これが、ひとつの組織をもって動いてゆくうえにおいては、それが対立という形を見せて起こってはいけないなあと、残念だなということは感じますよ、実際にそうあったとすればですけどね。
（高橋）だれだって長所もあるかわりに欠点もあるんですから、指導する立場にある人はまとめられる人達のいいところを取り上げ、欠点を出来るだけ見ないようなやり方で伸ばしてゆくってのが本当のやり方だと思うんですけど。作品とかそういうものに対する批評だの、そういうものは大いに喧々

諤々としてやってゆくべきだと思います。

（多田）酒井繁一の文章のなかにも、作品を批評するときに人間の方を批評するようなことがあったということは書いてありますよね。

（高橋）人間を批評してそれを後に引きずるようじゃいけないですよね。

（小池）流派を問わずっていうてとですけど、いま作品に、そして作者に、この流派っていうようなことはなくなってるんじゃありませんか。

（上妻）これはもう選者、そして編集ということになってくるわけですからね、選者にそういうことのない限りは編集のほうにもそういうことはないはずです。ですから編集とか選というところにはそういうようなことは、つまり流派だとか巧拙だとかはぜんぜん感じておりませんし、そのまま守られていると思っています。それを発端としてね、あの油だとか選者がこういったとかは、昔はたいへんな論戦を展開する原因になったり、そこからいろんな感情論ができたとかあったみたいです。作品評が個人評そして人間評とかにまで発展し、尾を引いておかしなことになったということはあったし、それは困るんです。

（多田）ここにいる選者のみなさん、作品の評をするときに作品に対する以外に個人的感情を持ったりしないでしょう。

（上妻）そりゃあ、作者にはいろいろな個性はありますよ、変

わった人もおりますし、だけどこっちが理解しようとする、それが勉強ですから、こちらが理解しようと努めてそして出来る限りの評なり選なりをするわけですから。で、自分にわかるところを採り、自分で作品の言葉の技術面といいますか、語彙の問題とか、もちろん文法のこともあるわけですけども気づくかぎりはこうしたはうがいいんじゃないかとか考えますけど、そこまでですよ。

（小野寺）むかし歌を始めた人はみんなそれぞれ流派があったんでしょうね、そして自分が何派だとかいうことを知っていたんでしょうね。いま、ここでそんなことを思っている人いないでしょう。

（上妻）あの当時はね、徳尾渓舟にしろ岩波菊治にしろ瀬崎涛声にしろ、それを持っていたわけですよ、日本でも結社に所属していた人達ですから当然です。しかしそれをここに来て批判して、けしからんなどと言い合っていたんでは椰子樹は成り立たないわけで。

（小池）だから創刊のときにそういうことを書かなければならなかったわけでしょうね。

（小野寺）論争が起きたってのは、そういう流派があったからで、今はそれがないですから、あえて言うなれば自分派ですよね。

（上妻）ここ創刊号には、がっちり手を組んで、互いに勉強しあって・・・、これはもう今も同じことですよ、変わって

ないですよ、このがっちり手を組んでいかなければならないのが個人的な感情でそうはいかないんじゃこまるんですよ。繰り返しますけど、そういうことがもしあったとしたらですけどね。

（小野寺）何十年も昔にいいことを書いてくれましたね。

（上妻）こういう時代があったんですよ。

（多田）当時と根っこはちがいますけど、もう一度、だれかが書いてくれてもいいんですよね。今は日本の本を読んでも私は流派なんかちっともわかりません、判らないというのか私の勉強が足りないというのか。

（上妻）現在の風潮にあわないと、たとえば、これ私の感じだけど、引っ込んでしまってるんですよね、柳田国男、折口信夫系の岡野弘彦とか。岡野弘彦なんかは結社もやめてしまって、いま個人の雑誌を出しているけども、もう一緒くたではやってはいけないという感じですよ。

（小池）結社に加わらないで作品を作っている人がかなりいますよ日本では。

（上妻）大切だと思いますよ、そういう方にこのことの論陣を張っていただきたいですよ、まったくの無結社に至るまでの経緯をね。

（多田）今ここブラジルでもなんの杜会でも、多様化というかそういう時代になって個性ってものが希釈されてきているので論陣を張って議論をするなんていう風潮も減って当たり

前かもしれませんね　（小池）昔の人はそれだけの勉強をしてたんですよね。

（小野寺）よく時間があったんだなあって思いますね。いま読みたい本じゃなくて読まなければならない本がたくさんあるんですよ。

（上妻）本がね、多いんですよ、皆は古典を読んでおりさえすれば、一つの基礎というものが出来上がっていったんですよ。今はあらゆる面から出版社がわんさわんさと本を作るからですよ、シミっていいますか、虫がいますよね、あれと同じで生きつなぐために書を食ってるようなもんですよ。

（多田）いま、椰子樹の創刊時の姿勢が　揺らいでいるんじゃないかということな　んですが、今皆さんが話されているよう　なことなんですか。

（高橋）最初はこういう出だしだったと　思うんですが、それがいつのまにかそれから多少逸れたような道に行ってはいなかったかなっていう感じがするので、こういう提言となったんです。

（上妻）地方の歌会とここのサンパウロの歌会とのあいだにちょっとしたズレみたいなものがありはせんかなってことは私も感じることがありますよ。

（多田）もし実際にそういうことがあれば、会員が減ってゆくことにも関連があ　るかもしれませんね、それをどうしてゆくかは、いきなりは難しいとしても。

（上妻）こういうことは作品上の問題じゃないですよ、これはもともとは作品上の問題かもしれませんが、なにかが後に尾を引いているということは感じますよね。

（小野寺）作品の巧拙なんかとは関係ないですよ。

（高橋）それによってもし会員になろうっていう人がならないとか、会員であっても出てゆくとかすれば、それは問題ですし、変えてゆかなければならないんじゃないでしょうか。

（多田）そういう状況のなかで出ていったりやめた人があったとしたら、これからは私たちがそういうことの起こらないような椰子樹を作っていかなければならないってことでしょう。その創刊の時の姿勢から多少方向がずれているのでは、という問題はデリケートなところで堂々巡りをしそうな感じもしますし、時代がかわり、環境もかわってくると、それぞれ感じ方、受け取り方もちがいまして起こりうることだとも思えます。こういう問題はここにいる私達が椰子樹の運営を担当する一員である以上、私たちが会員の減少だとか作品以外で感情の摩擦などの起こらないように知恵を出し合いたいと思います。

地方歌会との交流について

（多田）ここで地方歌会との交流について、ということで話を聞きたいと思います。

（高橋）やっぱりイベントなんかも必要でしょうね、地方の会員の方達と話し合うためには。

（上妻）地方とのつながりをつけるためには必要です。

（小池）前には地方短歌大会とかありましたね、そういうものがもう十何年ですよね、なくなってから。

（多田）だから今は全伯大会に地方から来てもらっているという感じになっていますが、私たちが地方へ出掛けていかなければならないのですね。

（小池）短歌大会なんてことでなくていいから、各地方の月例会でいいんですよ。この月例会にサンパウロからたまに出掛けていかなくちゃいけないんですね。

（小野寺）地方短歌大会なんかやろうと思っても今はもう無理ですよ、会員が少なくなったり、もう歌会がなくなったり

全伯地方短歌大会の歴史

第一回　サンヴィセンテ　一九七二年
二　ロンドリーナ　一九七三年
三　スザノ　一九七四年
四　グアイラ　一九七五年
五　ロンドリーナ　一九七七年
六　ロンドリーナ　一九八二年
七　スザノ　一九八四年

したところがあるのにね。
（小池）本当に最近はそういうところへいかなくなりました。昔の椰子樹を読むと以前はよくいってたみたいですね。
（小野寺）ロンドリーナとかグアイラとかスザノとか行きました、楽しかったですよ。
（多田）サンパウロから地方の歌会を訪ねるってことをやってみる価値はありそうですね。
（小池）皆さんがさっき言われた、まだ十年やそこらは大丈夫というのになんかつながりそうですよ、そう思いません。
（上妻）ですからね、そういう点は運営委員会に相談をするとかして、こちらから出向いて気持を見せるというか、椰子樹の運営を担当している側の意欲を感じさせる、そういうことにつとめなければならないと思いますよ。
（多田）そういわれてみると、中央と地方の歌会とは最近疎遠な感じですね。
（小池）みんな年老いたからこうなってしまったってばかりじゃないと思いますよ。
（多田）昨夜も原稿の字がわからなくて地方の会員の方に電話したんですが、そうしますと、ずいぶん喜んでくれるんですよ。そういうことがあると、私も編集部としてたまには地方の歌会に出掛けてゆく必要があると痛感します。
（高橋）今、椰子樹にはお金もいくらか余裕があるんでしょ

う、そういうことにも浄財を生かせるといいですね。

（多田）そういうふうにすれば、今まで話の出た会員減少の問題とか当初のスローガンからはずれそうになる問題とか、かなりいい方向に向くんじゃないですか。

（小池）それはいえますね。

（多田）言うだけでなく実現性がなければいけませんけど、そういう方針を運営委員会に出してみたいと思いますね。

（小野寺）サンパウロから人が来るっていえば、会員はもちろん、歌を作ったことはなくても短歌に関心のあるその土地の人も来てくれるかもしれませんね、いい考えだと思いますよ。

（多田）今日は何かを決議する会議ではありません、普段からお考えになっていることを述べていただくということですのでそういったお話を委員会にも出してみようではありませんか、ということにしておきます。地方歌会との交流についてほかに何か感じていることがありますか。最近は全伯短歌大会を開いても、地方から来る人がだんだん減って、もうほとんどサンパウロ歌会になりつつあるんですよね。そこでまあ、サンパウロから地方へ出掛けては、というお話になったんですが、逆に地方の会員の皆さんをいかに大会に出席させるか、ということについて何か考えがありますか。もちろん年齢とか健康とかそういう理由で来られない、ほとんどがそうなってるとは思うんですし、それは仕方がないんですが、

どうもそれだけではなく比較的若い人も顔を見せなくなったような気がするんです。

（高橋）やはり、地方の方に大会当日の役をやっていただくしかないんじゃないでしょうか。

（上妻）それは当然心掛けていますし、役の割り振りのとき気をつけていますよ。

（多田）来た人は大切にというか、遠くから来られた甲斐があるようにかなり気を配ってもいますよ。

（小野寺）もう二十年も前のことになりますが、グアイラに招かれて行ったとき、もうほんとにグアイラの人達が歓迎してくれて、よくしてくれたんですね。そのとき思ったです、大会はサンパウロでやるんだけど、グアイラの人達がおいでても私達はこんなに歓待してあげないなって、思いました。

（上妻）まあ、歓待ということについては、サンパウロでやる場合、難しいことなんですよ。地方に行くと、なんていいますか、コロニアといいますか、そういった感じで受け入れてくれますから。

（小野寺）地方は一所にまとまっているから。グアイラにはホテルもあるんですけどみんな個人の家に泊めていただいたんです。地方の方がサンパウロの大会に来られてもだれも泊めたりしないですよね、夜行で来て夜行で帰るとかしてますよね。

（多田）いまの歌人たちはどうしてもおじいちゃんおばあ

ちゃんが多くて、息子が家をまもっているので泊めにくいこともあるでしょう。そういう時にホテルとかを椰子樹でお世話したりしてあげてもいいんですよね、遠くから大会に来てもらっても会場で挨拶をしてそれだけなんですね。

（小池）昔の人はそれでも親しい人を泊めたりしていたらしいんですけど、この頃はそういうこともなくなりました。

（高橋）前は大会のあとで懇親会なんかがあって、歌を歌ったりもしましたね。

（小野寺）今はまだ終わらないうちからお終いまでいてくださればいいのはと思っても迎えが来たりして帰るんですよ。いまこのサンパウロの中央の歌人ていないですよね、みんな遠いですよね、それぞれ。

（上妻）一番の問題はやっぱり年齢ですよ、すんだらはやく帰りつきたいと。

（多田）地方から来られた人をどう歓待するかも、ここじゃなくて、運営委員会なんかで相談してということになります。

（小池）私たちが地方へ出掛けるということにでもなれば、状況も変わってそういうつながりがまたでてくるかも知れませんね。

（上妻）やはり地方の歌会との交流を深め、地方の歌会を盛り上げるということですよ。そしてここの大会に参加してもらい椰子樹をもりあげる、ということになるんじゃないです

か。

日本との交流について

（多田）地方歌会との交流はそのくらいにしまして、私が最近感じますのは、世の中ずいぶん便利になりまして、海外との通信、つまり短歌においても日本との交流が非常に簡単になってきたんですがその点についてどう感じておられますかどんどん進めるきだとか、必要ないとか。

（小池）必要ないとは思いません、これから考える必要がありそうですね。

（多田）今は歌ができるとすぐに日本へ送り、読んでもらえ、批評ももらえる、そういう時代なんです。だからそれに従ってそういう方向に進んでいくべきかどうか、あるいはこれはコロニアの雑誌だから、そんな必要はないとか。

（小池）どういう人に送ってるんですか、たとえば小塩さんとかですか、それはいいことだと思いますが。

（小野寺）やはりこのブラジルの事情をかなり知っている人じゃないと、ここでいい歌だったとしても、日本の人が読んだらそうでないかもしれないし。

（上妻）ブラジルの風土とかそういうものを理解していない人に見てもらってもしようがないじゃなくてですね、作品を見た人はどこで、どんなふうに作った作品であろうと作品の

価値っていうものはわかるはずなんですよ。ですから小野寺さんのいわれるようにここの事情がわかってない人に見てもらっても仕方がないとは、私は思いませんね。たとえば、日本の歌会に作品を出す、いっこうに入らない、それは選ぶ人がここの事情がわか
らないからだ、あるいは入っても何かしら、観念的に頭のなかにあることだけが入ったとかね。そういう考えじゃなくて、作品は作品として価値のあるときには日本の人にだって認めてもらえるという感じを私は持っています。ですから大いにメールでの通信とか、批評の通信とか結構だと思うんです。そうすると直接日本へ参加したいとか見てもらいたいとかいう人達にもここの場で、つまり椰子樹がそういう方向へ進めば、椰子樹の誌上でそういうことが出来るようになってくるんです、そういうことも考えていいんじゃないかと思います。

(多田) 日本へ歌をおくる場合、懸念をするというほどのことでもないんですが、いくらかはブラジルをセールスポイントにしたような作品があるような気がするんですが。私だって今にして思えばそんなふうな感じで作品を送ったことがないとはいいきれません。

(高橋) そこでブラジルに精通した、精通というほどのことでなくても、ここの事情なりをいくらか知っているような選者の方を対象にするべさだと思うんですが。

（上妻）そのためには、そういう人脈をつくって、来ていただく、長期滞在でも可能、一週間かなんかでリオとイグアスの観光だけしてブラジルを見ましたっていうんじゃなくて、おおいに農村地帯のそういうところにも足を向ける、そんな方がいるといいんですが。

（小野寺）ブラジルに住んでいた方、あるいは何年か住んでてそれで日本へ帰った人、そういう人ないですよね、歌人でありますか。

（高橋）プロの歌人でも、こちらのことを全くご存じないと、どうしてもちぐはぐなものになってしまうんですね。こちらでお盆の歌を詠んでも、向こうではお盆はもう八月だと思ってて、なにかこう行き違いみたいなものがあるんです。

（小池）それは大いにありますね

（多田）ですから、明治神官をはじめ日本のいろいろな歌会に作品を応募するようになったんですが、あれをあまり椰子樹がお世話するようになると、海外からの作品ですってことを意識した作品を出すようになるんじゃないかなって気がするんです。

（小野寺）そこで入賞することをねらって、日本の選者がこうやったら気に入るだろうってね。それで入った人はね、そのコツを覚えるんですよ、こうやったら日本の選者は採るって。

（上妻）いやあそれはこまりますね、そういうものの考え方

は。

（多田）だから、私はあまりにも海外との情報交換とか、交流を進めていって、編集部としてですけど、いいのか悪いのか、ちょっと分からないんですよ。

（上妻）だからね、椰子樹はそういった今、ここブラジルのものという、ここで生まれ六十四年の歴史を持った、ブラジルの歌人でなければ出来ない作風群の続きだということを大切にしなければならないと、いわゆる権威ですよね、この権威を侵さない程度のことならやっていいんですよ。それはね、それだけ門戸を広げるということですけど、そこを注意しながらやらなければならないということですよ。

（高橋）あくまでも私たちが在住するブラジルが主体であって、日本に向かっては別に深い関わりはない、けれども日本のこともわかっている、把握できでいるといった程度の平行を保ちながら椰子樹の伝統にのっとって、おもねりや衒いを持たない歌を作っていくという姿勢は保っていきたいですね。日本側にのめりこまない、かといってまったく交わりが没であるということのない、ほどはどの立場でですね。

（小野寺）日本でいろんなコンクールがあるでしょう、そういうところに歌をおくると、ブラジルの人はよく人選するんです、佳作なりにね。そしたら、すばらしい賞品がくるんですね、そんなことで椰子樹に歌を出さなくなってゆく人もあるんですよ。そういうのっていいのでしょうか。

（小池）それで日本で受ける歌、それが一番いい歌だって、作りながら思ってるんじゃないですか、そういう人もいるんじゃないでしょうか。

（小野寺）それを読んだ人も思うんですよ、こういう歌を作ったら入るんだなって。

（小池）それで、どうしてそういう日本で賞をもらうような人を椰子樹の選者に加えないかって言う人もあります。そういうふうに日本で賞をもらっている人をそれだけ力のある人なのにっていうんですよ。

（高橋）それはもうここブラジルだけじゃなくて今の日本の傾向だってそうみたいですよ、なんかの賞をもらった人だってとてもついていけない場合だってありますよね。

（多田）編集をしていて、それをよく感じるんですよ。作品だけじゃないですよ文章にしたってそうですよ。あまり海外との交流を盛んにすると、海外で読んでもらえる、それを意識したものばかりになってゆくような気がするんですよ。

（高橋）椰子樹に出していると日本の先生にみてもらえないという断絶した状態ではなくて、いくらかはつながりをもって・・・むつかしいですよね。

（小野寺）むつかしいですよね、あまりすすめすぎてもいけないし。

（多田）私は編集を担当するあいだは椰子樹の伝統を、さきほど上妻さんが権威といわれましたが、それを受け継いでゆ

きたいと思ってます。世の中こんなになっていってるのに、閉鎖的といわれるかもしれないですけど、私たちの椰子樹を読んだり批評するのは海外ででも日本ででもそれは自由ですよ、だけど私は進んで海外との交流を進めるのに躊躇しています。そういう私の、編集部といってもいいんですが、そういう姿勢がはたしていいのかどうか分かりませんので今、皆さんにこの問題を考えてもらおうと思ったのです。

(高橋) 日本の一流の歌人たち、先生方必ずしもいい見方をしてくれるとはかぎりませんよね。

(上妻) いま、閉鎖的といわれましたが、そういうこともあっていいよ思うんですよ、さっきから言うように椎威というものをね、そういう態度をひとつの権威という形で。交流という手段でその権威というものが向こうに侵されてしまってはこまるわけですよ、椰子樹が椰子樹らしくなくなったじゃないかとか、そういうふうなことじゃこまるんですよ。椰子樹は椰子樹としてすすまなければいけないと思う一方、日本と椰子樹との交流を枠として、日本の人達から見る椰子樹とか、日本の海外短歌に通じた人からの見方とか、それは向こうの励みにもなると息うんですよ、私はそう考えますね。先程の話のように要領を覚えて日本と交流するとかね、そういう姿勢を日本にも分かってもらわなければならないんですよ。私も作品をあちこちに出しますけど、それはおつきあいのひとつですよ、断れないし、その必要はないと思っていま

す。私なりに日本の歌に抵抗を感じているのがいっぱいあるんですよ、日本の短歌のひとつの傾向にね。だからといって、必ず向こうに送るときは、ブラジル的なものを送るなんてことは頭にないんです。私には、ブラジルの風土、風土的なものってのは初めから意識していないんです。たとえブラジルの先輩の作品にだってブラジル的なものを特に意識しないんですよ、とにかく出来た歌をと、そういう感じでやってるんですよ。

（多田）日本の新聞歌壇においても最近わりと海外の歌が多いんですよ。ああいったことがそういう風潮を助長するんですよ。海外へ行って、あるいは海外の人が歌をつくるといかにも素材が新しいようにみえるのかも知れないですね。

（上妻）日本の人達が海外へ行って作った歌というのはね、一口でいうならば浅いと思うんですよ。

（多田）だから小塩さんが海外の歌を研究されてる、小塩さんは実際に足を運び現地の風土や人と接触し、学問として物を見ておられます。しかしどうしても海外の歌だからめずらしいとか海外に行って歌を作ってきたよとか、そういう場合もあるんですよ。私はそれとおなじ環境に椰子樹をもっていきたくないと思っています。だから歌を詠むひとが減り、消えていってもそれはそれで椰子樹のおのずからなる運命だし、まざれもない権威だと思うんですよ。だから自然にそうなるのはしかたないんですけど、ここで歌を詠む人が椰子樹

に加わらないで、日本の会員になるなんてのはやはり残念だなと思うんです。

（上妻）ブラジル在住の人達が日本に吸収されては困ります。やはりこっちに引きつけるためには椰子樹の間口は開いていることを知らせたり、椰子樹を通じて日本でも海外短歌に造詣の深い方にも作品は見てもらえるように努力しているということを知ってもらいたいですね。

（多田）時代の流れに逆らうことになるかも知れませんけど、私もそう思います。ブラジル在住歌人が日本に取り込まれないようにしたいですよ。

（上妾）けれどもそれはね、ここだけで、と言ってたら、こんどは逆に会員が向こうのほうに行ってしまうということもありますよ。

（多田）あまり椰子樹が閉鎖的だと会員の方から出ていってしまうこともありうるというわけですね。

（小野寺）日本と交流をしないから椰子樹を止めるという人はいないと思います。そういうことはないと思います。

（上妻）日本との交流がないから椰子樹を止めると、そういうことはないですよ。ところがね、椰子樹に入ってない人で向こうの会員になっている人はいますよ、いきさつはほっきりしませんが。

（小野寺）日本の結社の会員でブラジルの支部長になっている人もあって、ずいぶんブラジルの会員を勧誘したりしてい

る人もありますよ。

（上妻）まあ、日本でもね会員を増やそうとはっきりいってますよ、売れないからですよ、結局出版会杜はそれで飯を食ってるんですよ。本当に日本の文学や短歌を守ろうとか、言葉を守ろうとか、一生懸命国学を大切にしようとしているだけでは飯が食えんのですよ、そういう人がいっぱいいるんですよ。ところがそういう人達は日本の現在の動きというか、とにかく人と歌とを集めて、次から次へと本を出してゆく、つまり会員を増やしてゆくという、なんでもかんでも結社が雨後のたけのこのように増えて、おかしな歌が氾濫している、耐えられんことですよ。それに逆らっている人は飯が食えんわけですよ。その支部長とかなんとか賞とか賞品とかね、みなそれですよ。

（多田）日本との交流がたやすくなって椰子樹に入らないで、日本の結社の会員になるという人がかなりいる。それは彼らに言わせると、日本の先生の方が優れていると、そう考えている場合が殆どなんですよ。椰子樹に入ってもいい先生がいない、そういう考えはあると思うし、実際に聞いたこともあります。そういう椰子樹にはそれだけ会員を引車つけ、引き止めてゆく指導者が減りつつあるということも見過ごせないんじゃないかと思うんですが、会員の減少、日本との交流日本の会員になってゆくと関連して椰子樹の指導力というか、教え導いてゆく、そういう力の継続について皆さんどう思わ

れますか。それは会を維持してゆくうえで決しておろそかにできるものではないし、短歌をやるという人は、どうしても上達したいという気持で入会すると思うんですよ。

（上妻）指導者の育成以前にもちろん歌人の育成ですよね、歌人がいなければ指導者も出てこないです。

（多田）そうなんですけど、歌人が入って来ない理由に指導者がいないという場合があるんですよ。

（小池）そうかといって、日本の先生に見てもらうってわけにいかないですよね。

（上妻）いやそれは、椰子樹だけでは満足しないっていうほどの人だったら、それはかなりの人ですよ、私はそう思いますよ。私なんかが選者だなんてとんでもないおこがましいものですよ。日本では専門の学問を終えた人がそれこそどんどん輩出されるわけでしょう、それに出版社が営業もするし、次から次へ何とか賞をもらって先生になってゆく、もちろん学問があるし程度も違うでしょう。ここでで勉強するっていったって、百姓が百姓を忘れて勉強した人は別ですけど、とても日本に匹敵するような指導者は少ないですよ、それを育成するってのはもっと難しいことじゃないかと思いますよね、そういう方法もあるにはあるでしょうけど。

（多田）どこの世界にだって初めから指導者になる人はいないはずですよ。いい歌人を集めてその本人に勉強してもらうことがおのずと指導者の出現だと考えてもいいと思うんです

けど。

（高橋）だから、そのための日本とのつながりじゃないんですか、日本からどなたかきてもらうとか。

（上妻）もちろん、日本の本も読まなければいけないし、けれども、直接日本の人から話を聞くことはもっと頭に入りやすいですよ、本を読むよりも、耳から聞くことはたいてい頭に入るもんですよ。印象といいますか、その人の顔を見ながらですから、直接そういった日本の人達と接するということ、あるいは講演を聞くということは非常に大切だと思いますよ。

（高橋）直接、選者の一人に加わっていただくことも考えていいですね。

（多田）たとえば、ここは小塩さんが選者になって、批評をいただくってことも考えられますよね。

（小池）小塩さんだったら、海外の事情も分かってくれてるからいいかも知れませんね。

（高橋）日本の大方の歌人の方というのはほんとなんていいますか、グローバル意識ってのは少ないですよね、その点小塩さんはちがいます。

（小池）日本の先生方もロでは国際国際って言ってるけど、けっこう閉鎖的な面を持ってる場合があるんですね。

（上妻）いやーそうかもしれんですよ、日本という国は、特に国学者なんていう人には多いんですよ、そういう人が。や

はりこっちに来て、水を飲んでどっぷりとブラジルにつかって、というふうじゃないとわからないはずですよ。

（小池）小塩さんにお願いするといっても小塩さんもおいそがしいし、たくさんの作品をってのは無理ですよ。

（多田）今、選者をどうするかというのではなくて、指導者が減ってる、ということについて話し合ってるんですが。

（高橋）コロニアで新しい指導者の出現てのは急には難しいですよね。

（多田）確かにそれに近い人がもっと勉強しないといけないんですよね、誰もが自分が次の指導者だと思うくらいになってです。

（高橋）私だって選者だなんておこがましい、選者になるより導いて下さるいい先生が欲しくて探してる状態で・・・。

（多田）岩波菊治だとか、ああいうカリスマ性のある人が今いないですよね。ただ、そうなろうと勉強する姿勢さえあればついてきてくれると思うんですが。

（小野寺）岩波菊治は生涯経済的にはめぐまれなかったようですね。で、以前アリアンサに脇坂さんという当時椰子樹の同人だった人がいたんです。その人の息子さんにね、お父さんはあんなに短歌に力を入れておられるのにあなたは作歌しないのですか、と聞いたんです。そしたら、絶対にやりません、父があんなことをやっているので家は貧乏なんですよ、だから私は決してやりませんて、そういわれましたよ。

（上妻）私の友達さえね、お前若いころから百姓は好かんかっただろう、ポケットに紙をいつも入れて、といいましたよ。始めはポウパンサの明細書かと思ったそうですよ。私にはこれしか楽しみはなかったですからね。

（小池）大きな目でみれば、親がそんなだったから、子供ががんばったと考えれば、それがよかったんじゃないですか、伊藤佐千夫も茂吉もそうじゃありませんか。

（小野寺）酒飲みの親の子は酒を飲まないっていいますよ。

レベルについて

（多田）ふだん皆さんが考えておられることをいろいろと聞けました。ほかになにか問題点といったものがありましたらこの機会です。会員減少、スローガンからの逸脱、海外との交流、地方歌会との交流、指導者についてなど意見が出たんですが、昔の記念号には作品のレベルのことに触れています。そのことについて何か思っていることがあったらおっしゃってください。レベルということを考えたことありますか。

（上妻）創刊当時というのはね、岩波菊治にしろ坂根総領事にしろこういった人達は程度が高かったんですよ、間違いなく、日本そのものを昔と今と比べているようなもので、ましてこの国で日本語を勉強しないといけないよと言いながら勉

強した人達が中心になって支えていたわけですから、レベルがどうのこうのではなくて、この国でのこれだけのレベルという言い方しかないんじゃないですか。

（多田）レベルという音楽がちょっとまずかったんですか。日本とレベルをどうのこうのは難しいですよね、向こうは日本で生まれ教育を受けた人がやってるわけで、ここは環境がちがいますよね。

（上妻）巧拙を問わず、という言葉が創刊号に出てきていますし、だれもが一生をかけて言い続けたいから続けているわけでね、自分のその日その時のものをかきたてて綴ってるわけです。ですからそれを技術的な面でいやにならないように続けさせるような指導の方法が適者というか指導的な立場にある人の・・・。

（高橋）叱ったりなだめたり。

（小池）日本の短歌なんか見てて、そりゃあ言い回しは上手ですよね、言葉の使い方も上手だし、でも言おうとしてることは、そんなにかわりませんよね。

（小野寺）気がきいているんですけど、魂というものは感じられないですよ。

（上妻）思想という問題でですね、思想という作品になってくると、あるいは粗雑な作品となってしまうこともあるんじゃないですか。文芸的じゃなくて思想か強まったりすると、作品そのものが粗雑なような感じも受けるしね、そんな

こともあるんじゃないですか。でも思想が感じられない作品はまたなんかこう物足れないし、そう思います。

（高橋）どんなに拙い作品でもその人に小野寺さんの言われるように魂がこもっていればね。

（小池）それを歌いたいから歌っているんですからね。

（高橋）それはそれは、日本のかたの詠いまわしはうまいですよ、しかし胸をうつものが少ないですね。魂が感じられないっていうか、言葉をうまくあやつってwいるゲームのような歌が多い。短歌は三十一文字の言霊にのっとったものであるという古代からの短歌の起源というものを尊重してゆきたいと思いますね。

（上妻）ものごとが多様化したというか頭が平均に広がった感じでね、それでいかにこううまく言い回すか、なんか青空ならべが頓智教室のような感じですよ。

（小池）みたいな言葉を使って、リズム感なんかはすばらしいところはあるけど胸をうつってところはね。

（高橋）なぜかっていうといま日本の短歌というものもやはり商業化されてきていると思うんですよ。私、ある方の歌に惹かれてそのかたの主宰しておられる結社に入れていただこうと思って問い合わせたんですよ。そしたらその先生が直接返事をくださるかと思ったら、係の人が印刷したものを送ってこられて、会費はいくらで一カ月に何首提出してとか。そうした規定は納得で

きるとしても、どうも、作品に目を通されるのは先生の弟子のそのまた弟子のような方がされるようで、先生じきじきには見て貰えないらしいということで入る気がしなくなって止めてしまったんです。昔は、師弟関係というのががっちりしていたと思うんです先生も資質があると認めたら、お弟子さんの資質をのばしたいということで大事にするし、お弟子さんも先生は絶対的だったんですよ。いまの結社の傾向というのは主宰の先生が少し有名になると、テレビやラジオに出演されたり、講演に出かけられたり、執筆されたりと大変忙しい。いちいち下っぱの会員の作品に目を通してはおれないし、結社そのものが会員を増やし、結社を大きくしていくということにあるようで短歌の世界も完全に商業化されていると恩うんですね。物質経済優先、地位名誉優先の世のなかで、短歌もまた魂が失われたものになりつつあるのではないかということは、大変さびしいことだと思います。せめて椰子樹はそうした流れに巻き込まれないような確立した存在でありたいと思いますね。

（小池）そういうこと書いている人もいますよ。

（高橋）気がついている方もいるんですね。

（以下略）

綿密な支度をしておかなかったので、話題があちこちへと移ってしまった。が、かえって出席の皆さんのかなりの本音

をうかがうことができたのではないかと思う。熱のこもったお話から、椰子樹六十四年の歴史の重みの受け止めが、そして今直面する様々な問題に対する真剣な取り組み、そこから展望される将来への期待がひしひしと感じられた。「椰子樹」を今日まで担ってきた先輩諸氏から見れば、まだまだ心もとないかもしれない私達ではあるが、その意欲だけは読み取っていただきたいと思うのである。

座談会のつもりが懇親会という感じになってしまい、話の終ったときには、場所を提供していただいた高橋さん宅の居間からの遠い景色が夕暮れの色に変ろうとしていた。

（四月二十一日・多田邦治）

二五〇号以降の物故者と作品

陣内しのぶ

一九九四年六月発行の、二五〇号記念号以来、早くも八年余りの月日が過ぎた。この間に、私共は又、多くの大切な誌友を失った。高齢の大西阿哲氏、関東忠吉氏、清谷勝馬氏、川原比露思氏などであるが、この四氏は揃って殆んど最期近く迄、作歌に励まれたことは驚異に値する。残念であったのは、現役選者であり、作品発表も旺盛であった弘中千賀子氏

が逝かれたこと、病魔に犯されての早逝は如何とも為し難く、それは他の人々にも言える事ではあるが実に惜しかった。二世歌人として刮目された秋永三郎氏、女性として最高の位置を占めた中井益代氏もお年ではあったが哀しい。年令的に若く勝れた作歌者であった川田幸子氏、それに続く中堅として嘱目されていた平松霞・穂島千代・玉木五男氏らなどなど惜しみて余りある。何れも心より哀悼。あげれば限りもない繰り言となる。早く退会された行方正治郎氏は、かつて長く選者であったし、半田知雄氏は作品発表はなかったものの、初期より賛助会員であり、表紙その他の絵画で好意を寄せて下さった方。歌歴は長くなかったが、物故者の中で最年少であった沖和子さんは、長い間椰子樹及び椰子樹に関係ある諸誌の発行に、実に心を尽くして下さった方。突然の心臓発作で逝かれたが哀切に耐えない。私事であるが、この小稿を綴る気力が出たことを、この上ない倖せと感謝している。

会員に若し不幸があった場合、遺族から通知頂ければ問題はないが、報せがなければ、噂や、死亡広告などで調べて、編集者は椰子樹に記載すると云う心配りをしている。会員の死亡はできるだけ速く編集部にお知らせ下さるよう願う。

最後に一言。遺稿を選ぶに当って、故人の一人ひとりに接し、話合うような気持ちになった事を、私事乍ら書き加えたい。

物故者氏名・没年月日・享年

住吉光雄
八八年八月十六日　不明

平松　霞
九四年四月十四日　八十歳

竹山一郎
九五年五月二八日　七五歳

竹内愛子
九六年一月三日　八四歳

設楽昭吾
九六年　不明　六五歳

佐藤いち
九六年一月四日　八三歳

山崎素子
九六年　不明　七四歳

金村孝一
九六年四月八日　八四歳

半田知雄
九六年八月一日　九十歳

中井益代
九六年二月十二日　八八歳

平川恵川
九六年七月二五日　六八歳

藤田美沙子
九六年九月三日　八一蔵
行方正治郎
九七年一月二三日　不明
中井久良三
九七年十一月二〇日　不明
中村政俊
九七年十二月三〇日　七一歳
相良重三
九八年十一月二一日　八一歳
河野美代子
九八年一月九日　六八歳
徳尾季美子
九八年三月二九日　不明
河井美津子
九八年七月十一日　不明
弘中千賀子
九八年五月三〇日　七四歳
穂島千代
九八年六月五日　七三歳
関東忠吉
九八年六月十七日　九八歳
川原比露思

九八年六月八日　八九歳
箕輪新七
九八年十一月六日　八六歳
沖　和子
九八年十月十九日　六十歳
秋永三郎
九九年一月六日　八四歳
川田幸子
九九年二月二日　六七歳
唐沢弘直
九九年三月六日　七八歳
大平綾子
九九年十月一日　八二歳
木村絢子
九九年七月五日　六六歳
佐藤三つ農
九九年八月二七日　八七歳
高木富代
九九年四月二二日　七七歳
清谷勝馬
九九年八月三〇日　九三歳
寺岡晃児
九九年十一月五日　八八歳

小林孝一　九九年十二月十五日　七一歳
田所生三子　〇〇年四月十三日　七九歳
吉本一郎　〇〇年六月二五日　八十歳
大和周房子　〇〇年十月四日　八一歳
小林美寿子　〇一年一月　以下不明
斎藤深志　〇一年二月七日　八十歳
中川荒記　〇一年三月二七日　八七歳
青砥政雄　〇一年七月一日　七七歳
椎野トノエ　〇一年八月十四日　八七歳
高野嘉彦　〇一年八月二三日　八六歳
玉木五男　〇一年十一月十五日　七七歳
大西阿哲

〇二年二月一日　　百歳

・九七年迄、歌を発表された村上音文氏（当時九七歳）ご生存であれば、現在百二歳である。問合せに返信なく不明。

住吉　光雄

蒸気吸入終えたるあとに背を叩く思いがけなし妻の力は

闘病もはや一年を過ぎたれば癒ゆるがに思う越冬ののち

父と子の変らぬ絆おぼえつつ招かれし食卓に心弾みぬ

鶏肉油に揚げて卓上に乗れば皿に取る好奇心より

熱き湯気立つ食卓に昼餉なす恥らう妻と吾とならびて

平松　霞

ふるさとに向う特急「かき号」の窓外に揺れるコスモスの波

休耕田を埋めて淡きコスモスの花にふれ合うふるさとに来て

農村の豊かさ見せて小さき城の形の家が並ぶふるさと

積雲の富士山頂を赤々と染めて初冬の陽は昇り来る

海を背に向う駿河の山なだり実るみかんが朝日に映ゆる

竹山　一郎

故国のインフレを暗示する如く六十円の切手を貼りてある手紙

此の所右に曲ればマリリアと指さす方や青き牧原

十年を一つの町に住み居りて移民の子吾もやや落ち着けり

職人らがストを起こせし仕事場にほうけし如く一日を過ごす

幼らが何か叫びて走り去る中にまじれる吾子の黒髪

設楽（したら）　昭吾

雲の峰驕るにも似て立ち塞ぐを浮き彫に見せる夜の稲妻

新しきケースを据え付け若鶏を満たしゆく日を柱に記す

土地売りて村を出でゆく人ふえぬカンナを巳める兄もその一人

迸るひびきは腕に心地よしホースを引きて鶏舎を洗う

雨の夜の明けて地に敷く花あまた未だ一株の華ぎもてり

佐藤　いち

更に遠き黒き大船を背景に幻の如過ぐる白き帆

徐徐乍ら距離を持ちつつ出でてゆく船に自ずと湧く祈りあり

娘に支えらるる事のみ羨しめる老等よ歩行難の悲しみ知らず

支えられ渚を歩む思いに触れいとおし海星（ひとで）や貝類の殻

今更に海は無辺とつぶやける老の感動ひっそりと消ゆる

山崎　素子

また会わん日のありやなしなつかしき友
と歩みゆくバラ匂う園
わが姿も杖もくっきり影うつす月あかる
くて静かなる宵
茶と香を朝々供うる仏前に今朝はいちじ
くの一果を加う
老いてより使いはじめし香水の知らぬ名
前も二つ三つおぼゆ
遠くよりショパンのメロデー流れ来る午
前八時のガス配給車

金村　孝一

汗乾き塩の吹きたる仕事着を又濡らしつ
つひたに鍬引く
山焼きの無事を祈りて経を誦す父の後姿
あらたまり見る
朝霧にからき煙を交えつつ炭がまのあり
今日も木を切る

官憲の家宅捜索受けし夜は移住の意義を思いていねず

枯牧となりし耕地に佇みて夢多かりし若き日を追う

中井　益代

此処がわが終の住処ぞ身を巡る木草の類の生に触れつつ

冬の蝶一つまた一つたゆたえり仏桑華の乏しき花の辺りを

ひたむきに生くる心と相通うものありて愛しむ一木一草の生

五月晴れの続く日のなかはつかなる光ふくめる赤き花合歓

温め来しもの悉く凍みゆくかかわりばえせぬ山の明け暮れ

平川　恵川（孝）

背の痣親指大に盛り上り三ところありて鈍き艶持つ

皮膚癌移行するやと背の痣に危惧を持ち
つつ数年を経き
背の痣に痛痒兆し此の夏の気節を危惧の
思い深まる
切るべしと事もなげなり若き医師早期切
除を力強く言う
幾許の逡巡あれど癌の危倶払う思いに切
除に踏み切る

藤田美沙子

子を産まぬ三年よ乳房萎えゆきて夫に抱
かるれば淋しき思いす
描きたる夢には遠く生きて来て海に佇つ
夫の構えなき貌
気温とみに下りゆく夜のさびしさに似て
衰えの兆しが早し
幾日も梳かさぬ髪を手洗いの鏡に見しが
臥床に戻る
暫し見ぬ港の空よ夕焼けて誘いの私語告
げたき人あり

行方正治郎

我が命賭けて育てし此の村の湖底に沈む
日の迫り来る
集団移住の企画も遂にむなしくて思いお
もいに去り行く村人
三千本超ゆる果樹らよ三十年の起伏しみ
じみいま顧みる
潮風の吹き上ぐる砂おびただし椰子の林
は半ば埋もれて
奴隷等が故郷アフリカを望みつつ泣きし
とう断崖の上に来て佇つ

中井久良三

出稼ぎの子がローマ字で日本語を書きし
便りを微笑ましく読む
出稼ぎの子が持ち帰りしトランクを開け
れば微かに日本の香り
水田跡の広々とした水溜り鯰が釣れると
子等集い来る

丸木橋渡って隣と往き来せし頃の思出深くなつかし

村人が総出で架けし木の橋は「重量荷物は危険」の札立つ

中村　政利

出稼ぎに来たなど言えず同窓の友に手を振り東京に発つ

面映ゆく賞ひとつ受く如月の握るマイクに身内汗ばむ

釣舟に無理に誘いてきし吾の黙し釣る背に西日冷えさす

どうしても行くかと母の泣きし顔移住する日の消えぬ面影

嘘言えぬ妻をなぐりて哭かしめしあの夜の我は狼なりしや

相良　重三

妹は肝臓癌の告知うく寒さいや増す七月の夜

喜寿祝う花束手にしほほ笑める写真うけ
しはついこぞのこと
幼き日サルカニ合戦地でいきしかの柿の
木は知るや知らずや
がんばれとただそれのみの励ましに酸素
マスクの眼は答えけり
せめてもの八十路望みし甲斐もなく七十
八の春秋を閉ず

河野美代子

陽あたりにカナリヤの籠出しやれば春と
もまごう如き囀り
豊なるだいだい色のアマリリス短き命ひ
たすらに咲く
昨夜の雨上がりし朝の朝顔は色鮮やかに
浮きたちて見ゆ
小雨の中花の蜜吸う蜂鳥は巣にひなのあ
る親かと思う
土割りて棉の芽生えいる夢を見ぬ畝の並
びもありありとして

河井美津子

ひそやかな悦びに似て深みより湧き来る
水の波紋拡がる

幾年の女の哀歓うつしきし古き鏡の光り
は鈍き

故国まで続ける海ぞ足裏の痛くなるまで
熱き砂踏む

身もだえるほどの悲しみ湧き上る喜びも
ありて続く生きの日

一生を働き通した夫の指並べて艶の無き爪
を切る

弘中千賀子

ひそやかに時移りつつ裸木が見する確か
ないのちの呼應

逃れようなき過ぎ去りの翳ひきて夢の残
れる朝雨の窓

時経るに密度濃くなる思い持つ並木の影の
交叉する道

瑕のなき思い出あらず人造の湖にめだかの
繁殖無限
あしうらに冷たき砂を踏みて立つ曇天の
もと鳴る冬の海

穂島　千代（池上カメ代）

渓流の飛沫にぬれいる丸木橋靴を手にして
おずおず渡る
逝きましてすでに幾年お諭しの言葉は俤を
伴いて顕つ
軽やかな交わりにして終らむか夢見るこ
ともあらざりしまま
真夏の時とはなりぬ中天に太陽の位置長
くとどまる
草むらは涼しかるらし日盛りを声低けれ
どこおろぎの鳴く

関東　忠吉

青白き汝が貌よなと言われつつ母と暮せ
し我が少年期

口笛を鳴らして過ぎしかの宵の我が青春
に偽りはなき

炎熱を避けし刹那の大き雷ポトリ冷たき
雨が項（うなじ）に

灯の街とは期くも縁なき我にして畑土踏
まえて通す底意地

抵抗のまだ滅ぶなく老にして真昼に燃や
す摘み草の山

川原比露思

不条理の愛に執するわれの眼に音なくは
じけ散る遠花火

世を狭く愛に生きゆく視野の中かぐろく
見えて夜の向日葵

わがために梅酒つくると言いし人を灯と
もす如く夜半に思えり

鞭ならし迫るが如き悲哀あり日の没る山
にひとり向きつつ

みずからは灯ともすことのなき湖がある
日激しく西日を燃やす

箕輪　新七

有為なる友あまた逝き無為なる我かく残
されて永らえており

でで虫の歩みは吾に勝るかな足跡光らせ
光らせつつ行く

湖の岸につのぐむ芦の芽にさざ波光りよ
せてはぐくむ

ほむ可きは素直にほめ得る身となりぬその
歳月の長き流れに

訪日の旅を戻れば梅の園万朶の白妙我を
迎うる

沖　和子

ブラジルに在りて朝の梵鐘を聞きてはじ
まる日々の営み

清らかな風渡り来るベランダの小鉢の花
の色冴えざえと

わが夫と未来を夢みつつ手植えせし黄の
イッペーよ移り来し頃

唐突に口よりメロディ流れ出る楽しきこ
との多かりし今日は
開発とエコロジーが話題なり林学を学ぶ
娘との夕餉に

秋永　三郎

ＡＹＲＴＯＮ・ＳＥＮＮＡを悼む人の声
巷にみちて津波のように
何をしに生れて来たかと問われたら黙っ
て首を振る人ばかり
南米の流れ移民の子と生まれひっそり死
ねばそれでいいのか
怠慢な国民性に同化して郷に入っては郷
に従う
盆の日は花束抱いて「公平」の眠る墓場に
今年も来たが

川田　幸子

強烈なジャマイカビートにのりにのりス
テップを踏むカリブの島に

カルナバルに踊らず乏しき我なれどこの
大晦日踊り明かさむ

移民とう我縛るもの振り捨てて踏むス
テップよ無我となるまで

故里を遠く離れた島に来て踊る不思議に
酔う大晦日

東洋人は吾等母娘の二人のみ踊れば「M
UCHO・BIEM」の歓声上がる

唐沢　弘直

見晴かす麻州の空に夏雲の競うが如くに
せりのぼりゆく

季ならぬ雨降りついでパイナ樹の若芽は
花に先立ちて萌ゆ

黄のパイナ咲くとう南大河州われの旅情
を誘いて止まず

旱天に花芽立ちたるマンダカルに密かな
希をよせて雨待つ

北伯に雨呼ぶ花の古きより親しまれいる
マンダカル咲ぐ

大平　綾子

暮れ初むる湖に燈寵の灯の映えて水にただよう景の美し

明々と灯をともしつつ進むありかたむきしあり術なく悲し

湖水より冷たき風が吹きはやる寒さこらえて燈籠守る

老人が手を取り歩くさま良きと言われて思う夫在りし頃

六人の子等は独立夫は逝きひっそりと我一人の夕餉

木村　絢子

碧空を衝くがに鋭き岩石の嶺重畳たりアルプス山路

鋸歯の如き峰蒼空を載り裂きて残雪鋭く陽光反す

スキー場ヒュッテの赤き屋根見えて雪なき屋根は鋭く黄ばむ

インジオの伝説秘めし碧玉の水面寂たり
ポルチーリョの湖
白泡をあげ渓下る瀬を早み流れは赤き褐
色の色なす

佐藤三つ農

山峡の道辺にありし秋桜色さえざえと眼
裏にあり
盛んなりし別子銅山胸裡に六十年経て山
に佇ちたり
廃坑となりたる山のそちこちにバンガ
ロー建ち避暑地となりいし
紺青に白き澪作り行く船を見つつ渡りし
瀬戸の大橋
若葉燃ゆる山峡の村の水はり田に鏡の如
く春日照りいし

高木　富代

皺深き八十路の姑の化粧する優しき仕草を
遠のきて見る

豚殺めの聖夜の馳走をととのえるカボクロ
小屋に煙り立ち居り
縫い上げし財布がわりの腹巻きをしかと
巻きしめ夫は旅立
つゆ深き道のほとりに今朝も来て立ち去り
難くせせらぎを聞く
夕陽さす土手に火花を立て乍ら草焼く夫
は汗にまみれて

清谷　勝馬

あの鳥はこちらを呼んでいたりしや後の
谷は千尋の闇
精薄の孫の手車に乗せられてセーロ・ベ
ルデを売るマルコンデ
窓操れば彼方の未明が先ず見えてそこか
ら手前へ次第に自分
褪せて行く茜の先にある久遠荒蓼として
風屯せる
只我のかく居るだけの時間帯出るも叶わで
人も来ぬ日日

寺岡　晃児

瞳に入るもの枯一色の山裾に春さきがけてスイナンの咲く

乾きゆくアポゼンタードの判見つむ三十年勤めし職業手帖

ジャカランダのむらさき空に溶け入りて物憂き迄午後の一刻

唐突にサラクーラの声ひびき来る乾季つづける野の茜空

訪日もし得ず「木杯」に年足らず老母の猫背に冬陽が薄し

小林　孝一

失業者は失格者ときく適応なく再就職の難しき世代

怠慢で解雇を画し労法で儲けたくらむに雇えぬはミクロエンプレーザ

風土にも会話にも不自由に一世経ぬ移民の足には苦闘の傷あと

誘われる企画旅行を断るのも済まぬ気すれど七日もは外せぬ
店の前を通り過ぐる車繁くして新車ばかりの時勢も見直す

田所生三子

昼餉どき若き工夫等が風にゆらぐガス火に寄りて手を拡げおり
磨かれし鍋に逆さの影うつり背かれし杳き日の甦る
妥協せざるわが狭量をかなしみて仰げば無数の星がまたたく
並べ売るバザーの木箱に匂いつつ犇きて咲くベゴーニヤの花
若き等のポ語弾みいる声を背に暮れゆく余光につつまれて佇つ

吉本一郎

霜の夜は痛みにまなこ冴ゆるなり戦に受けし足の弾丸あと

桑束の重きに疲れいる眼に五令の蚕白く
眩しき

木の墓標朽ちていたりき佇めば動く影な
き墓地に鳥鳴く

アバカチの稚実に露は下りいて新たな年
の朝の静けさ

木の呻く声にも似たり自動鋸の重き響き
に森はざわめく

大和田慶子

道すがらふと目にふれしスラムにて売家と
ある立札を見き

鶏痘の接種していつ手に通い来るヒナの
体温

呟けばひたと鳴き声ひそませて寄り添う
ヒナの黒きつぶら目

軋轢音高くきしませ牛車ゆく雨雲低くたれ
こむる中

一世と二世のギャップ埋むるなく実らず
終る吾娘の縁談

小林美寿子

奥庭の滝音冴ゆる控えの間に心に絡みて
朝の読経を聞く

広庭の枯花の下に立つ御僧は昨夜お給仕
給いし人にて

五重の塔天暦五年の作と言う荘厳に立つ
青空高く

せせらぎに沿い上りゆく杉木立筧のあり
て杖とめて寄る

斑影ふみ登りゆく山深く幽韻に聞く深山
うぐいす

斎藤　深志

幼らに与うる菓子もなきままに森にわけ
入りジヤトバ採り来ぬ

豚の餌に刈り採りて来しカルルーより稚
きを選びおひたし作る

山焼きの壮観何に喩うべき火炎地獄もか
くやあらむと

焼け残る枝くぐりつつ焼け灰に播種機鳴
らし唐黍を蒔く
ピッコンもカルルーも野生の茸さえ日々
の食事に慣れしこの頃

中川　荒記

霧こもる古都見てくだる尾根の道茫々と
して風のつめたし
ようやくに訪ね来たりぬ離れ家に住まう
一人の老を見るべく
移り来て三十年を重ぬれどわが家の風呂
はドラム缶なり
忠魂の二字を彫りたる額一つ主と共に古
びていたり
立枯れの白穂にふれて米作に賭けし期待
のまた崩れゆく

椎野トノエ

草に絡みもろく仆れし我が姿そのままに
居て一人笑えり

捨てに行く太れる蛙の幾匹を片手に急ぐ
にかすかに鳴きぬ
幾曲り越えて海へと向う孫のハンドル捌
き鮮やかにして
明治節は遠くに去りて文化の日波限りなく
思出運ぶ
白々と岩すべる水の絶景に孫は車の速度
を落とす

高野　嘉彦

夕映えて暮れゆく森に蜩の声はりあげて
啼くは淋しき
暮れせまり湯に浸り居れば蜩の声に和し
つつ筧の水音
蜩の声を聞きつつ飲む酒を至上と言いし
父今はなし
花の帆を立てて浮草吹かれゆく佇む吾はほ
ほ笑みいたり
鏡餅年毎に小さくなりゆきて雑煮の昆布
も形あるのみ

玉木　五男

右肩に飽きてオームは左側に移り吾が耳く
すぐりやまず
たまに病みて臥す傍に青い鳥オームを置
きて鬱散じたり
奇妙なる声に呟くオームいてペチカの薪
は燃え崩れたり
爪少し痛きに耐うる掌のオーム指の愛咬
存分にせよ
雑言を言わぬオームも気が向けばある民
謡を口笛に吹く

大西　阿哲

独り居のベランダ深く秋陽さしベンチピー
の鳴くが聞こゆる
花咲かぬ仙人掌は五十年入道のごとく軒
下に立つ
わが責の果せぬままに年の瀬の点る聖樹
を仰ぎ思いぬ

病葉のほのかに見ゆるスイナンに雲流るるも秋めきにけり

いかづちの鳴るをひとつの変化とし病みて師走の一日を終る

○竹内愛子・半田知雄・徳尾季美子・青砥石政雄等、作品なし

厨房をおあずかりして・・

岡本　喜代子・・

一九九五年に陣内さんの後を引き継いでから七年が経ちました。陣内さんの或る時期は特に烈しいインフレが続き、会員からの特別寄付などで苦境を乗り切られたこともありましたが、後を引き継いだ私がたいしたインフレもなく、順調に今日までこられましたことは一重に会員の方々の御理解と御協力のおかげに他ならないと感謝しております。

七年も経ちますと、どの地にはどの方と、会員のお名前がすぐ頭に浮んでくるようになりました。会費に添えられた温かいねぎらいと励ましのお便りを読むときが私の一番うれしい時です。

皆様から頂くお便りの中には、数年前、御夫妻で海外旅行をされた時の写真を送って下さった方が、最近御主人を亡くされたというような悲しいものもありますが、「米寿の祝いをして貰った」と家族一同に囲まれた幸せそうな写裏を送って下さる方、花の絵ハガキをたくさん送って下さる方など心温まるお便りがほとんどです。

又、「ウライ在住」とのみ知っていた、音信の途絶えた私の幼友達のことを一寸書きましたら、その友をわざわざ訪ねて下さった方もいらっしゃいました。私と幼友達の橋渡しをして下さったその方は、当時既に知名度も高かった室伏誠二

氏です。数十年振りに友からの第一信が届いた日、セピア色に褪せた昔の写真を探し出し、色々なことをなつかしく思い出しておりました。

靴を履くのは正月か天長節くらいだったあの頃、灼けて熱い砂道や針ねずみの出てくる山道を私達は数人の友達と跣で歩き、拾ったジャトバの実をかじりながら数キロの道を通学しました。正月に買ってもらった靴を枕もとに置いて寝て、夜半に何度も目を覚まし、靴がそこにあるのを確かめ、安心してまた眠るということなどもありました。又、近所には買って貰った靴を履くのが勿体なくて片方だけを傾き、破れたら別の片方を、という男の子がいたことも思い目しました。

幼友達からの手紙を読みながら、「散りぢりに別れても、生きてさえいればきっと又いつかはどこかで逢える」という言葉を噛みしめ、人と人とのつながりや、えにしというものを感じました。このような色々な事を思い起させて下さった室伏氏には心から感謝しております。

その他にもいろんな方がいらっしゃいます。年に二度・三度と会費を送ってくる方や、小切手にアシーナを忘れて送ってくる方、「歌人も高齢化が進み、我も、そして他人もおなじだなあ」とひとり苦笑することもあります。こうして毎日楽しく、相逢ったこともない方々とも『椰子樹』を通して心の交流ができ、大変うれしく思います。

厨房の方も今のところ心配はありませんが、全然インフレ無しとはいえない状態です。昨年後半期ごろより少しずつ物価高騰の兆もあり、油断はできません。会員の皆様の一層の御支援と御協力を心よりお願い申し上げます。

遥かなる歳月の譜

「思い出の短歌・その背景

梅崎嘉明

草枯れし原の斜面に様々の形態なして立てる蟻塚

一九四九年十月、百姓にみきりをつけてサンパウロ市へ移転の途上、枯れた牧草の中に無数の蟻塚のあるのをトラックの上から眺めた一首で、蟻塚は一見同じようでよく観るとトーチカみたいな形、塔のように細長く伸びているのもあって、それを様々の形と表現した。

一九五〇年の八月頃だったか、私の家で歌会を開いたとき発表したもので、岩波菊治先生から「かなりの短歌だ」と初心者の私を励ましてくれた。岩波先生といってももう知らない人が多いが、先生は日本の歌誌『アララギ』の同人でいい

作品を創っておられた。イビラプエラの日本館の庭に先生の歌碑がある。

酔いし友を気づかいながら歩みいし古りて光れる石の舗道を

酔いし友は歌友吉本青夢である。歌会の帰りにプラツサ・ダ・セーからジョメンデス広場を横切り、サン・ゴンサーロ寺院の裏道を通った時の短歌で、その頃はまだ石を敷いた舗道が残っていた。昔のガス灯を模した飾灯がその石道をにぶく照らしていて、何となくうらぶれた気持で歩いたのを思い出す。

病み後の妻いざないて来し園生なよなよと花実もあらぬえにしだ

手術後の妻を詠んだもので、健康はとりもどしていたがもともと痩身の女で、ブラジル人たちの遊園者の多い中にあって、その姿はいたいたしかった。道の辺に揺れている金雀枝に妻の姿を重ねた作品。

いま吹けば鳴らぬ草笛十三の少年にしてひとを恋いにき

十三、四歳になると、ほのかな恋心を抱くものだが、私もコーヒー耕地で隣り合って住んだ少女にあわい思いを寄せたのを後で思い出した作品。その少女のことは『みさ子とわぐり』『ひみつの筐』などの小説に出てくる。

歌友の八巻耕土がいい短歌だから曲ををつけてやろう、などとひやかし半分に言ったこともあったが、そのままになってしまった。

雨は矢の如く降りいし思い出て恋うとしもなき一つの写象

一九六三年頃、ピネロス区の植村かず居での歌会の作品、その頃は作品を深く重くと心がけていて、こういう作品となった。

田舎にいた頃、どしゃぶりの雨の中で、隣の娘が馬で耕作していたが、何のはずみか馬があばれだし、彼女はアラードのまま引きずられ、サイアははがれ、太股もあらわに転倒した。馬は耕具をつけたまま家に帰ってしまい、びしょ濡れの彼女は泣かんばかりにそこに佇んでいた。その姿がいとも哀れで私の心に焼きついていた。それをこういう形で現わしてみたが、別な意味にとってもらってもかまわない。

武本由夫、清谷益次といった先輩に好意的な批評を受けたのもなつかしい。

放埒な心おさえつつかく生きて温厚と言わるる時に苦笑す

若い頃から短気で、我がままな所があって家族に心配をかけたことが再三あった。棉の出荷で町に出て、知人がパラナ方面へ土地の視察に行くと聞いて一緒に出かけ、四、五日も帰らないことがあった。トラックの運転手に視察に行くことを伝えてくれ、と頼んでおいたが、運転手はそんな親切がなかったので家の者は大変心配したという。

サンパウロ市に出てからも歌会に出かけ、そのまま歌友の藤山南歩の家に泊り、翌日そのまま仕事に行き、夕方あたりまえの顔で家に帰るといった放埒なところがあって、温厚などと言われると苦笑せざるを得なかった。

この国に育つとも東洋人の血は濃ゆし洋傘つきて間部学佇つ

ジャバクワラの市営バスの車庫近くに画家の間部学が住んでいた。私の家もその頃アメリカノポリスにあり、ジャバクワラのバス始発所から町に出ると、そこによく間部学が立っていた。私等と同じく幼時にブラジルに渡って、どちらかといえばこの国に生きた年月の方が多いのだが、彼の風貌はどちらから見ても東洋人だ。作品からも東洋の何かを感じる。その間部が洋傘をついて佇っでいる。そのコンポジションが

面白くて一首にした。

解釈に難き絵ながら眺むとき燃えたつ君の生命に触るる

サンパウロの歌人が間部学の招待で彼の家で歌会をひらいた時、壁画ともいえそうな大型の抽象画をまのあたりにして感動を受けたもので、作品に若さがにじんでいるように思える。

人間を食す映画観ていでし街しぶきいて人は軒伝いゆく

パウリスタ新聞文芸欄に投じた一首で、その頃雪原に不時着したある一機の生き残りの人々が、死んだ同僚の肉を食して生命をつないだ、という事実を映画化したものでショッキングな事件としてさわがれた。たいした作品でないが「軒伝いに行く」あたりにリアリティがあるだろう。

霧とざす湖にボートのかしぐとき甦りくる一つの傷み

サンパウロの歌人がリアショ・グランデの湖水に吟行した折のこと、歌会の後でボートをかりて対岸に遊び、帰路急に霧がかかってきた。別のボートには弘中千賀子、陣内しのぶなどが乗っていて、霧に遠ざかるボートからチャーミングに

手をふったりした。こちらからも恋人と別れるかのように甘い声で叫ぶ男もいたが、その瞬間ガクッと舟がかしいだ。擢ではずそうとしてもなかなか動かない。

女性の声は消え、霧はますます濃くなる。嫌な感じだ。

その時、少年の頃友人と舟遊びしてボートが転覆し、九死に一生を得た出来事がふと甦って一首となった。

失楽の日々と言わむか童話剥ぐアポロは夜半に月に降着

アメリカのアポロが月面に降着して世界の人々を驚かせた。月で兎が餅をつく童話も剥がされてしまった。「現世にもう夢は無くなった」と話し合ったもので、失楽の日々というような言葉が生れた。

スカイラヴの破片が近々落下すと生きて憩いの場所は世になし

米ソの宇宙開発は益々盛んとなり、世に及ぼす弊害も多くなる。米のスカイラヴが故障をおこし、近日中に世界のどこかに落下するというニュースが流れた。万一のことを考えた時の作品で、いま読みかえしてもゾッとする。スカイラヴは結局海に落下して人畜に害はおよぼさなかった。

球形の赤きブイ揺れ飢餓感のかぐろきまでに海盛り上る

一九八〇年の全伯短歌大会に投じた作品。その頃、佐藤博三、高橋よしみ、木村正和といった面々が盛んに抽象短歌を創り、それが時代の先端をいくものだ、と力んでいた。私も苦心してこんなのを創ってみたが、永続きせず結局写実傾向にもどってしまった。

梅咲ける下に憩いて同郷の人と語ればとつ国ならず

ボツカツの梅林に遊んだ時の作品で、偶然同郷の人と逢い四方山話をしたり梅花の下でお国なまりで話し合うと、そこはもう外国と思えない。

日本の歌誌『歩道』には一九七六年に入会したが、何年か後に投稿したもので好評を得た。

輪廻転生さもあらばあれうつついま　師の君は地中ふかく降ろさる

武本由夫挽歌の一首、私の半生で最も感化を受けた師で、その死はショツクだった。一九八三年一月二十一日が命日で、もう十八年の歳月が流れてしまった。

かけつけし吾に笑みかくることもなく君は口閉ず堅く口閉ず

歌友光田寿男を悼んだ作品。光田と私は大正十二年の猪生れ、猪は猛突型だといわれるが光田はたしかにそういう所があった。私は内向型猪であったため争うこともなく三〇年来の交遊を持った。酒がまわると西暦二千年まで頑張ろう、などと話し合ったものだが、あっけなく世を去ってしまった。

心一途に逢いし日のあり面影をよびてくちなしの花弁が匂う

私の寡男生活は六年ばかりつづいた。妻が逝った時、娘は十六歳、なまいき盛りでよく口喧嘩をした。喧嘩しながらも娘の気持ちをおもんばかって、大学を出るまで再婚はしないことにしていた。こういう私に同情してくれた一人の女性がいて、時にデートした。心一途というのは心の状態で乱脈というわけではない。分別もあった。その女性が色白であったので、くちなしの花からの連想で生れた一首。

パラグワイとアルゼンチンとブラジルを分かち三叉なる河は濁れり

一九九六年、歩道叢書として歌集『草穂』を刊行した。その中から日本の詩人・評論家の大岡信氏が右の一首を選出、

『新、折々のうた4』に掲載してくれた。親戚、知人といった歌人外の方々からも激励された。こちらの歌人の中には、評の中でとりあげられていた「日本に帰りて死ねと来る便り住みてなじめばしかとも言へず」の方が好きだ、と言ってくれた人もいた。

西暦の二千元朝かにかくに生きて手合はす吾が生命あり

歌謡『椰子樹』に発表した一連の中の一首で、二千年までよく生きられたという感慨を詠んだもの。一連の中には新世紀をにおわせるものもあったので、新世紀は二〇〇一年から出発だと注意してくれた方もいた。

とつくにに住めばはるけき人恋ほしましてまほろば大和し恋ほし

私は永年県人会の仕事もやらせてもらったが、奈良県海外協会の会長萩原善之助氏とは同村のよしみで兄弟のような交遊をたまわってきた。最近ひょんなことから、県内に私の歌碑を建ててやろう、ということになり右の1首を送付した。

建立場所は斑鳩町法降寺近くの上宮遺跡公園内で聖徳太子ゆかりの地でもあるという。かたじけないことである。

二〇〇一年十二月

「遍　歴

青柳　房治

五〇号を持って一つの節目として特集号出して六回目、三百号を迎える事になり、その都度計り知れない努力を惜しまれなかった編集と係の方々に、深い敬意と感謝を捧げるものであります。『椰子樹』誌には殆ど欠詠状態での不義理の者が、文章をかくのもおこがましく不適格と言わざるを得ませんが、私の遍歴を書いて、その責めを果たしたいと思います。

成田空港から東へ三〇キロ程行った山あいの村、千葉県香取郡山田村府馬が私の生まれ故郷です。さらに東北へ少し行った隣村が、「天保水許伝」で有名な「笹川の繁蔵」が活躍した笹川です。戦後まだ物資の少なかった昭和二〇年代が、私の日本における青年時代です。単調な索漠とした日々を送っていた二八歳のとき、隣の栗源町出身の県会議員八代重信氏の県出身ブラジル移住者への訪問談を聞き、その講演に魅せられてブラジル移住を決意したのが私の経歴です。

東隣りの東ノ庄町からサンパウロ州スザノ市郊外福博植民地へ、一年程前に移住していたＳ・Ｙという方に、手紙で現地の事情を問い合わせ確かめてから、ブラジル移住を決心し

ました。こうして一家五人がＳ・Ｙさんのお世話になってブラジルへ移って来たのが一九五九年二月五日のことでした。スザノ産業組合の原田敬太さんの借家で記念すべきブラジルの第一日目を過ごしました。Ｓ・Ｙさんのお世話で二アルケール程の土地を求めて移住生活を始めたのが三月末のこと、泥壁の住居からの出発です。目標を養鶏に定めて、七歳の長女をグルッポに入れ、近くの山からユーカリを伐って育雛場を作り、鶏舎を建てて準備しました。

日本で百姓をしていたとはいえ、鶏のことには全くの素人で、ましてや大工の経験がある訳でもなく、見よう見真似で育雛器を作り、餌箱を作っての出発です。丁度その頃アメリカから新しい交配種ハイラインその他が入って来はじめていて、産卵率が従来のに比べて抜群で、養鶏業は順調な滑り出しでした。一〇〇メートルの鶏舎を建て、まだ珍しかった金網ケージを取り付けたのもこの頃のことです。今思えば、百姓の、特に養鶏の良かった時代で、住居をレンガ建てにしたのも、車を買ったのもこの頃のことです。

十年程して、当時スザノ市で農業機械の販売をしていた八巻耕土さんに勧められて、「スザノ短歌会」に入れていただきました。ずぶの素人で右も左もわからず苦労したのが一九六八年五月のことと思います。最初の作品は

雛小屋の夜回り終えて灯を消せば夜霧は白く

吾を包めり

で、当日先輩に煽てられて、お褒めの者葉を戴いたことが思い出されます。酒井繁一先生や山崎益一さんとも初めてお目にかかりました。

一〇〇メートル鶏舎を次々と建て、一九七五年には、三万羽を越える養鶏場になっていました。隣り近所との生活にも格差がなく不自由は感じなかったのですが、子供は大きくなるし、デスペーザは嵩むしで、ゆきづまりを感じるようになっていました。長女はアルモニヤの学生寮から、次女はサンパウロの下宿から学校に通っていました。

その頃サンミゲールの町に卵とフランゴの店を開け、忙しい日を送っていました。これが大失敗でした。「二兎を追うもの一兎をも得ず」と言いますが、忙しいだけが取り柄で、結局いいことは何にもありません。鶏の世話が満足でなく、薬の投与を怠り、当時流行していたニューカッスル病の洗礼をうけ、毎日毎日鶏の死骸を埋める酷い目にあいました。お陰さんで鶏からは追い出されて、撤退することになりました。

「さて、これからどうしよう。鶏におい出されてどうしますか。少しは知っている積もりの野菜でも作るか……」

友人の世話で隣のモジの町から十キロ余りの所、セザールデソウザに五アルケール余りの土地を見つけ、しばらくスザ

ノから通うことにして、ブルドーザーを入れ開墾・整地をして入植の準備をしました。住居を作り、ビニールハウスを建てて、いよいよムダンサしようとした矢先、一九七八年四月八日、丈夫であった母を逝かしめ、その死を見送りました。行年八二歳の一期でした。

こうして諸事雑然としていたのも、この頃のことと思います。モジの新耕地からの帰り道、長年お世話になった福博植民地に何かを残してゆきたいものと、村で文芸に興味のある人々を短歌や俳句に勧誘して、一九七八年九月一三日、酒井繁一先生・池田豊年師をトップに戴き、福博文芸クラブを創立しました。

爾来、月一度の開催で二〇〇二年一月現在で、二九三回を終えました。今年の八月には二五年三〇〇回を迎えますので記念誌を出版して、ささやかな祝宴を催したいと思っています。この二五年の間、青柳房治は第十一回国民文化祭富山文芸祭で入賞しました。作品は

古びたる財布の底に産土の護符あり　異国に住みて久しき

です。青柳ますさんはＮＨＫ大会と国民文化祭で秀逸賞を戴き、寺尾芳子さんは岐阜県民文化祭で知事賞を、内谷美保さんは岐阜県民文化祭で奨励賞を戴きました。又、野村康さん

は明治神宮二〇〇一年秋の大祭で特選にはいりました。佳作には大勢の人達が入り気を吐いております。

セザールデソウザに移ってからピニールハウスに菊を植え、露地にパウマを植え、土地の良い所にはトマトを入れて、私と家内とエンプレガード十四、五人で賑やかに忙しく働きました。ビニールハウスには菊の外に日本から種子を取り寄せ、カボチャ台にキウリの芽接ぎ栽培をし、四月末に種子下ろしするポプリンニヤの長期取り栽培にも挑戦しました。籾殻を焼いて煉炭の無菌苗床を作ったり、冷蔵庫を作って野菜の予冷出荷を試したりしました。町の農産物品評会では、イチゴの麗紅で金賞をいただきました。儲けは薄かったですが、百姓には百姓なりの面白さがありました。主体は花で、花は好きでした。

一九八〇年代に入ると、国の政治・経済が荒み、インフレーションが進んで、その都度金の呼び名が変わりました。八〇年代の中頃には、人任せであった花弁のベンダが上手く回らず、回転収入が滞ってしまいました。だからと言って一人での生産と販売には無理があり、良いベンデドールに巡り合うのは中々困難でした。生産と販売は車の両輪のようなもので、反発しあう面もあり、上手く両立させるのは中々困難でした……　日本での先輩に、六〇歳で定年退職してから学校に行きなおしたS・Mという人が近所にいましたので、詳細を手紙で尋ねたら、日本で六カ月以上働いて利殖票を貰え

れば金が出る、という返事が返ってきて、日本行きが急に本当になりだしました。私がいなくとも困らないようにしてから、日本行きの事を急いで勉強し、準備をして判らないことは問い合わせることにしました。千葉県鎌取の「グリーンサービス」と云う可なり大手の造園会社が、私の身元を引き受けてくれ総てがきまりました。こうして一九八九年三月末、三〇年振りに故郷に帰りました。

「グリーンサービス」は有り難いと思う程親切に対応してくれ、実質一八二日働いて利殖票を職安に届け、来月からの給与に期待しつつ、試験に臨みました。十一月一日同期生十五人と二緒に、千葉県印旛郡芝山町牧野の県立芝山高等専門校に入学しました。同校は庭園管理士の養成校で半年と一年のクラスがあって、寄宿舎賄い付きで、まあ設備は整っていると云っていいところでした。一日八時間制で、午前中は授業、午後は実技が多く組まれていました。舎監は老人で、とても良い人で助かりました。授業を終えてからは、良く手紙を書きました。結婚してから女房に手紙を書いた事などなかったから、大変な勉強をさせて貰ったことになります。芝山は成田の隣ですから、よく成田へも遊びにいきました。成田公園もお隣さんで……

学校を出てから、佐倉の「赤門」と云う造園会社に勤めました。「赤門」は主としてゴルフ場の造園を手掛けていました。この辺りは東京近郊でゴルフ場が多く、妹婿も好きで年

中クラブを振り回していました。此処に半年程いて、埼玉県三郷市の造園会社で二年ほど働きました。ここは同じ造園会社でも、家庭やマンション及び公園の造園と、それらの管理がほとんどでした。途中で二年に一遍の帰国をして、又日本に帰り、市川の子会社に勤めました。主に東京での仕事でした。日本にも慣れて、日曜・休日には栃木、遠くは長野県の農家のあちこちをよく歩きました。そして私にもできる新しい農業を探ってみました。いくら新しい農業でも、デスペーザのかかり過ぎるものでは困ります。昔四Hクラブにいたのが、思わぬ所で役に立ちました。ありがたいものです……

二年ほどして、友達のいる湯沢のスキー場に移りました。ここは季節外は暇で、よく群馬の温泉に遊びました。そしてブラジルから家内を呼んで、草津を振り出しに北陸から東北を二週間かけて歩きました。今後それがどれだけ楽しい思い出になるでしょうか……

六四歳の十一月に、足掛け五年余りでブラジルに帰ってきました。子供達は父親がいない方が、かえって順調に仕事を伸ばしていました。しかし、第二の故郷ブラジルの社会は大きくかわっていました。僅か五年の間に、日本への出稼ぎが激増し、村の青壮年の層がめっきりといなくなってしまいました。経済とは、政治とは、全く恐いものだと思いました。「出稼ぎ」は移住者の社会に多くの功罪を置いていきました。私共が、その昔この国に移ってきたのと大同小異はあるにし

ても……　日本行きの前後十年間に詠んだ歌に次のようなのがあります。

インフレ時代

・クロトンに風立ち騒ぐ診療所妻待つ間を故なく歩く
・空き鶏舎の目立ちて続く村ぬちに白き埃がひとしきり舞う
・疲れ残る身に甘草の色あたらし朝の靴紐締め終えて立つ
・汝が肩に手を置き充つる日もあるか畑帰りの靴の砂振る
・花作りやめて久しき納屋の裏ひと本赤きパウマが開く

出稼ぎ時代

・古里の利根の尾花が連休に倦みしまどろみに入りきてゆる
る
・利根に沿う故郷の停車場石炭の置かれし辺り月見草咲く
・屈辱も耐えねばならぬ出稼ぎの寮のかたえに梔子匂う
・眠り足らぬ旅の眼にきらめきて零れ止まざる駅の噴水
・寒しじみ生きて触れ合う桶の中出稼ぎ寮の夜のしじまを

ブラジルに帰ってきて

・出稼ぎに過疎となりたるこの村に野生化したる大根が咲く
・老いしとも老いずとも思う身のめぐりビニールハウスに風がはためく
・ブラジルに古稀祝われし夜のしぐれイタペチの嶺にいかず

ち光る

・老いて尚いささかの夢もやしつつ剪定鋏を皺の手に持つ

・身辺を整えゆかな古稀すぎて拙き歌帳の整理を急ぐ

日本からブラジルに帰ってきて、息子達がやっている農産物の仲買商を手伝いながら、日本で習って来たというか覚えて来た新しい農業がやりたくて、モジの農村地帯やイビウーナのシャーカラをそれとなく見て歩きました。日本ではビニールハウス内の設備や機器が進歩していました。日本にいた頃、栃木や長野の農村をよく歩きました。

短歌との出会い

宮本マルシア留美子

人生にはいろいろな出会いがあり、その中でも私にとって短歌との出会いはとても大事なものであった。日系三世であり、しかも私の年齢で短歌を詠んでいることは珍しいことかも知れないが、今の自分にはごく普通のことにしか思えない。しかし短歌に出会えたのは、吾恩師のお陰であったとつくづく思うのである。

池上カメヨ先生は、一生を日本語教育に尽くした日本語教

師である。短歌の世界では「池上カメヨ」ではなく、「穂島千代」として知られていた。私は池上先生には、五歳の時からお世話になった。日本語の読み書きをはじめ、日本についてのいろいろなお話・道徳の他にも、日本の文化の一つとして短歌を教わった。日本から見て地球の真反対にあるブラジルで、移民としてブラジルに渡ってきた人々の子供、そしてその孫にまで短歌を教えることに努めた先生は少ないのではないかと私は思う。池上先生はとても厳しかったが、それは私達生徒のためであったと、自分で「教師」というものを経験した今では理解できるのである。

五歳で日本語の勉強を始め、カタカナ・ひらがな、そして漢字が少し読めたり書けたり出来た八歳ぐらいの時から、短歌を学び出したとの記憶がある。五・七・五・七・七・七といった決まった形の短い文を作るのは、幼い私には面白いゲームのようであった。そのゲームにはいくつかの定められている規則があった。今でもはっきり覚えているのが、「短歌には『です』『ます』を使わないこと」、また「その短い文が絵にならなければならないこと」というこの二つである。あの頃、短歌はゲームのようであり、難しいものではなく、面白いものであると気楽な気持ちで習得したため、このように今まで続けて来られたのではないかと思えるのである。日本語学校に通っていた八年間はもちろん、卒業後も細々ながら短歌を続けたので、短歌とは出会って以来、一度も別れた事は

ないと言える。私は今、三十歳になったばかりだが、短歌を始めて既に二十年以上経っていることになる。

日本語学校に通っていた頃には、一週間に一度は、短歌の時間があった。一首作っては先生に見てもらい訂正してもらっていた。その日誰が一番多く短歌を作れるか、友達と競争したこともあった。時には題が出され、全員が二首ずつ作って、名前を書かずに一首ずつ別の紙切れに書きこみ、それを箱の中に入れる。全員が出し終わったところで、上級生がそれらを黒板に書き出し、その中から最も良いと思うのをいくつか選んだ。まるでミニ短歌会のようであった。また短歌会と言えば、池上先生は何回か他の短歌の先生を招待し、授業以外の日に私達の学校で短歌会を実施したこともあった。池上先生は、あの頃既に『椰子樹』の会員であり、「少年少女」というコラムに私達生徒の作品を載せていた。毎年九月に行われる全伯短歌大会にも、「少年少女」を対象とした特別な賞があった。しかし年月が過ぎていくにつれ、家庭での日本語会話がだんだんと少なくなり、生徒達の日本語能力も低下し始め、授業の基本内容である読み書きでさえも困難になり、短歌の勉強までには至らなくなっていった。

池上先生は、日本語教育に対し絶望的な気持ちで退職されたと思う。しかし先生は、新しい教え子に短歌を教えることが不可能であっても、昔の教え子には短歌を忘れさせないようにと、卒業生を対象に「日本語を守る会」をつくったが、

余り成果はあげられなかったようである。日本語学校の卒業は、ブラジル中学校の卒業と同時であったので、生徒の大半は高校へ進学するために大きな町へ出て行ってしまった。そのため、例え月に一回でも、短歌を学ぶために皆が集まることは難しかったのである。そんな中で私は、地元の高校・大学へと進学したので、日本語学校卒業後も池上先生のアドバイスを受けながら、作歌を続けることができたのであった。

二十年間という、短歌との長いつきあいのすべてが順調だったわけではない。面倒な気持ちになったことも度々あったし、池上先生が私のことをいろいろと心配して下さることについて、「もう卒業したのに、ほっといてくれないかな。迷惑だな」と思ったこともあった。逆に先生は、私が短歌を見てもらいに伺うと、どんなに忙しくても、喜んで直ぐに添削して下さった。他の町に引越して行った時も、手紙や電話で、いつも私のことを応援し続けて下さった先生である。上手下手は別として、現在では短歌との縁は絶つことのできないものとなり、一生今のようなつきあいを続けていきたいと思っている。

ある時期には、「作歌しなければ池上先生に悪い」と思いながら、短歌を作っていたことがあった。しかし、池上先生は四年前に亡くなられた。池上先生は私にとって、日本語の、そして短歌の唯一の先生であったため、今でも「もっとお話を聞いておけばよかった、いろいろと御相談したかっ

た」と思うことが度々ある。

一応独り立ちをして短歌の道を歩んでいるとは言うものの、歌人と言えるようになるまでには、まだ長い道のりが必要である。沈む夕日、満月の夜空、鳥の囀り、流れる川の音、このような自然の美を心の目で見、その美しさを言葉で表現するのが短歌であることを、池上先生には教わった。私はこれからも短歌を通じて、自然の美、心の神秘を表現していきたいと思う。

「自らが光らねば」

小野寺　郁子

歌人「野田勝太郎」と言っても、多分ほとんどの人が「そんな名の人は知らない」と、思うであろう。けれども「明石海人」と言えば、まだ大方の歌人は「ああ、あの長島愛生国（ハンセン病療養所）で療養中に有名な歌集『白描』を刊行した作者」と、思い出されるであろう。

第二次世界大戦後に「プロミン」という特効薬が出現する以前は、ハンセン病は「癩病」とよばれ、不治・遺伝する病として、忌み嫌われ、極度に怖れられていた。そして病人だけではなく、罪もないその家族までが世間から排斥されたのであった。その為、当時は一旦この業病と診断されると家に

居ることは許されず、どこかの離れ島にある療養所に移され、家族や縁者に迷惑がかからぬように、患者は名前を変えて社会から縁を切ったのである。松本清張原作の有名な映画『砂の器』にも、そのような場面があったと思う。全快して家族のもとに帰る、という望みも持てぬまま、中には島で患者同士がかりそめの結婚をして、お互いに看取り合う、ということもあったようである。また、断種手術までほどこされたとも聞く。

野田勝太郎は、一九〇一年に静岡県で生まれた人で、発病したのは二十五歳の春であった。当時、両親と妻、一歳余りの長女との五人家族で、秋には次の児が生まれることになっていた。小学校の教師をしていたが、将来は洋画家になりたい、との夢を持っていた真面目な人であった。

思いもかけぬ衝撃的な診断を受け、さまざまに悩み迷った後、最初は兵庫県の明石楽生病院に入院した。「明石海人」という名は、そこから来ているようである。四年程後、明石楽生病院が閉鎖したので、海人はそれより長島国立愛生園に移った。

画家を志していた程の人だから、もともと秀れた感覚の持ち主あつたのだろう。自由詩を作り、またホトトギス派の俳句も作った。療友たちからは「物識り博士」と揮名を付けられて、皆から信頼されていた。

しかし、その頃から病状は容赦もなく進み、頭髪も眉毛も

抜け落ち、爪が無くなり、指が湾曲しはじめていた。レプラの残酷さである。刻々と崩れゆく我が身のおぞましさ、悲嘆、恐怖、苦悩のあまりに一度は発狂した。また、療友に見付けられたので未遂に終ったけれど、自殺もしようとした。

そのようなことがあって後に、短歌結社『水甕』に所属する歌人でもある内田守人医師が長島に赴任してきた。閉ざされた精神世界に生きる、屍のようになっている病人たちに、内川医師は短歌を普及させようと思いたち、月一回の歌会を開き、指導をしてガリ版の歌誌も発行した。その内田医師に師事して、海人が作歌を始めたのは三十歳を過ぎた頃からであろう。

短歌に出会った彼は、これこそが、自分の境涯を表現するのに最も適した詩型であると思いを定め、以後は病む身の生き甲斐として短歌一筋に専念した。

そして、その精進の成果として一九三八年、改造社刊行の『新萬葉集』に歌十一首が入選したことによって、いっせいに世の注目をあつめた。それが機縁となり、海人は改造社の『短歌研究』や、また前川佐美雄の温かい支援によって『日本歌人』にも多くの歌を発表するようになった。

「深海に生きる魚族のやうに、自らが燃えなければどこにも光はない」という、有名な言葉を巻頭にかかげた歌集『白描』を刊行したのは、その翌年の一九三九年の二月である。それは歌壇のみならず、各方面からも絶賛を受け、歌集はべ

ストセラーになった。

その年の十一月に、海人は自分の命のような『白描』を、すでに盲目になっていた身に抱きしめて、短く劇的な生涯を閉じたのであった。

『新萬葉集』に載った十一首の作品より少し抽いてみよう。

・梨の実の青き野径にあそびてしその翌の日を別れきにけり

・送り来し父がかたみの綿衣さながら我に合ふがすべなさ

・童わが茅花ぬきてし墓どころそのかの丘にねむる汝（いましし）か

・更へなづむ盗汗の衣もこの真夜を恋へばはてなしははそはの母よ

・拭へども拭へども去らぬ眼のくもり物言ひかけて声を呑みたり

島の療養所に来て後、父親と二番目の子が亡くなったのである。どんなにか家に帰ってみたかったことであろう。家族を想う海人の切実さがひしひしと読者の胸に迫る作品である。そしてこの頃より、やがて盲目となる兆が見え始めている。

少し順序が前後するが『白描』に、病名を宣告された時の思いを詠んだ歌がある。その中の数首。

・診断を今はうたがはず春まひる癩に堕ちし身の影をぞ踏む

・妻は母に母は父に言ふわが病襖へだててその声を聞く
・陸橋を揺り過ぐる夜の汽車幾つ死したくもなく我の佇む
・鉄橋へかかる車室のとどろきに憚らず呼ぶ妻子がその名は
・父母のえらび給ひし名をすててこの島の院に棲むべくは来ぬ

まだ多くあるが、この中で私は姉に「妻は母に」の歌に心打たれる。妻、母、父、作者と、四人の様子を簡潔に描写してあって、辛いとも、悲しいとも言っていないが、その四人の心情が手に取るようによく解り、四人の絶望の嘆息までが聞こえてくるようで、読者にも切ない臨場感を与える。

病状が進んでからの歌は、介護する療友に口述筆記してもらっている。

・偶々に逢ひ見る兄が在りし日の父さながらのものの言ひざま（面会）
・うすら日の坂の上にて見送れば靴の白きが遠ざかりゆく・歯にしみて慰問の餅の冷えなすも不惑には至らぬ命なるべし
・脱走の夜ごとの夢はおづおづと杳き団欒の灯を嗅ぎまはる
・すこやかに育てばまして歎かるる幼き命わが血をぞ曳く
・盲ひてはもののともしく隣家に釘打つ音ををはるまで聞く
・手さぐれば壁にのこれる掛鏡この室にして我盲ひけり
・切割くや気管に肺に吹入りて大気の冷えは香料のごとし

ついに喉が侵されて、気管を切開した。その悲惨さを、では

なく、肺に吹き入る空気のうまさに焦点を当てて詠っているところに私は驚く。そして「自らが燃えなければ、光らなければ」といった言葉が、改めてずっしりと胸底にひびくのである。どれ程の悲痛・苦難を超えた上での心境なのであろうか。

他にも清澄な秀歌がある。

・眼下の干潟に遠く一ついる鵜は鳴かずみ冬の乏しさ

・さくら花かつ散る今日の夕ぐれを幾世の底より鐘の鳴りくる

・星の座を指にかざせばそこここに散らばれる譜のみな鳴り交す

・葦の葉を捲きて鳴らして朝明はひとよにきはまる命おもはず

・いづくにか日の照れるらし暗がりの枕にかよふ管弦のこゑ

終りの歌は、盲目となってからの作品である。もはや目では見ることのできない日の光を、枕に伝わる幻聴の音楽として感じとっているとは、何と研ぎ澄まされた感覚であろう。

『白描』が出来上って来た時に、

・癩者吾が命をかけし歌書をまず園長の大人に捧げむと、世話になった慈父のような療院の園長への感謝を詠んでいる。

そして、

・おほかたは命のはての歌ぶみの稿を了へたり霜月の朔

詠みたいことを詠み終えた達成感。そのあと、

・病む歌のいくつはありとも世の常の父親にこそ終るべかりしか

の一首に私は心ゆさぶられる。どんなに歌集が誉められようとも、それより世の常の父親として、子を慈しんで育てたかった、という心底からの偽りのない詠嘆である。

『白描』の印税は、かなり大きな額になったらしい。彼はそれをまず、永年の不孝の万分の一の償いとして故里の母に贈り、また一部を、同病者の短歌運動の為にと提供した。それはのちに「明石海人賞」として使われることになった。

『椰子樹』誌三〇〇号記念号への文として、私はあまり相応しくないものを書いてしまったようだ。慶びや、お祝いの文はきっと他の方々が書いて下さることと思う。

一度は深い絶望の淵に陥った人が、盲目となってもなお、作歌に精進し、最後まで歌を生き甲斐として、患いを昇華させ、精神を高めていく事を得た、短歌の持つ「力」というものを私は思うのである。

その短歌に拠り集う私達が『椰子樹』三〇〇号を刊行できるのは、まことに果報なことである。

（参考資料…荒波力著「よみがえる『万葉歌人』」）

幻の歌集

藤田　朝寿

歌人志津野華絵の提案で、回覧誌『寄生木』を出そうと言う話がもちあがったのは、昭和十九年の某月であった。その頃、チエテ移住地には短歌の実作者が二十人近く居たので、「回覧誌を出して一人でも多く同じ趣味の人を殖やし、ゆくゆくは移住地の短歌誌に育てあげたい」と云うのが華絵の夢であった。

或る晩、私は歌を見せてもらうため志津野家を訪れた。添削が終わり、歌評もすんでから華絵は「珍しい本をお借りしているので見せましょう」と云って、部屋から一冊の古めかしい本を持って来て私の前に置いた。本は和綴で、一目みて並の本でない事が分かつた。表紙の真中に「千千逎舎（ちちのや）集、千種有功（ちぐさありこと）」と書かれてある。行書の毛筆の字が素晴しい。

「公卿さんの本ですね。」

「そう、公卿さんの本です。よく分かつたのねー。」

と云われる。

「千種有功（一七九七～一八五四）江戸末期の歌人。号は千千逎舎、左近衛中将。香川景樹と交わり、二条派の歌風を脱

し、一種の風格を持った。歌集『千千迺舎集』『日枝の百枝など』

表紙をめくると、上質の和紙に黄葉した公孫樹の葉をあしらってある。歌は草書で一行書き、一頁に五首書いてあり、木版刷の歌集である。

しばらく草書の字を見つめていた私は

「何と読むのですか。」

と尋ねると、

「私にもよめないのよー。主人が生きていてくれたら、このような字は訳なく分かったのに。」と云われるのであった。

華絵の亡夫、甚一は能書家であると共に、文学の嗜みの深い人であった。

志津野荘、このペンネームで、昭和十二年頃聖州新報紙に連載小説を寄稿していた。その新聞の切抜きを、私は華絵から見せて貰ったことがある。

「それで、この歌集の持主はどなたですか。」「この歌集はねー、K君が高津の奥さんの蔵書の中から、希覯本だと云って借り出して、私の所へ持って来たのです。」

「それじゃ、高津の奥さんに聞けば分かりますね。」

「そう、高津の奥さんは教養のある方だから、読んで聞かせてもらえば良いのだけれど、この歌集を持って行ってお聞きする暇が私にはなくて、今のところお手あげよ。でも、家に主人の使った草書つきの本があるから、ぼつぼつ調べて見

る。」

と云われるのであった。

『千千迺舎集』の所有者、高津の奥さんのご主人はベラ・フロレスタ市街地でホテルを経営すると共に、現在のペレイラ・パレット市迄の乗合いバスをお抱えの運転士に一日一往復ではあったが運行させ、自身は棉花仲買人もやり、我々ベラ・フロレスタ管内では一番の顔役で、大きな家にはいつでも二、三人の居候がいた。奥さんから『千千迺舎集』を借り出したK君も、その中の一人であった。

K君の兄は華絵門の一人で、私には兄弟子になる。歌は弟のK君の方がより巧みであった。『寄生木』創刊号が出たとき、K君の作品を読んで「彼にはとおく及ばない」と私は思った。

吾妹子の小指の傷を見てやりつつほのかに通うぬくみうれしも　　K

高津の奥さんが歌を詠まれる事は、私は短歌を始める前から知っていた。チエテ移住地は毎年入植祭が行なわれたが、十五周年祭は盛大に催された。余興に宝探しがあり、賞品は一等から五等まであった。五首の短歌にそれぞれ謎入りで、解読出来た人が宝のクジを得ると云う趣向であった。

焚火スル人山ヒトノテノヒラニ握レル宝タレゾ見出ス

この歌が当日の一等の賞品が当たる宝クジの隠し場所であった。私が市街地へ着いた時は、一等の宝クジ探しの真最中であった。大勢の青壮年が鍬を持って高津ホテルの前庭を削っている。それを見ている人で、歌に詠まれているような人山である。吾れこそ宝クジを得ようと、必死に庭を削るので土埃りが舞い立つ。そこへ高津の奥さんがとび出して来て、

「皆さん、庭をいくら削っても『宝クジ』は有りません。土挨りが家の中に入って困るから止めてください。宝クジは私がかくしたのだから、他の所を探して下さい。」との言葉で、皆んなが鍬の手を止めたとき、

「アッター！宝クジ見つかった！」と誰かが叫んだ。

「オーイ、どこに有った。」

と、異口同音に聞く。

「ここの仙人掌の中にあった！」

と言う。

「俺は、ホテルの前庭に焚火した跡があるから、てっきり宝クジは土の中に隠してあるとばかり思った。（焚火をすると顔がホテルで）何だサボテンの中に有ったのか。」

と誰かが言う。大騒ぎの中に一等の宝クジは見つかった。メデタシ、メデタシである。前記のような歌を作られた高津の

奥さんは並の人でないことが良く分かる。

華絵の提案で出すことに決めていた『寄生木』創刊号は昭和二十年の上月に出されたが、その中に千種有功の歌が載っていた。華絵は「苦心惨憺してやりと三首だけ読むことが出来た」と語った。ところが公卿の歌としては似つかわしくない歌なので叱驚させられた。何と三首とも狸を詠んだ歌であった。いま思うと、千種有功は当時としては進歩的な殿上歌人であった事がよく分かる。とに角、有功の歌三首で『寄生木』創刊号を飾る事が出来た華絵の満足思うべしである。(『寄生木』は華絵の期待に反して三号誌で終った。)

想えばあれから五十有六年の歳月が知らぬ間に過ぎ去った。私は折につけ今でも「幻の歌集」となった『千千迺舎集』を思い出す。

五年前であった。聖市の老人クラブ会館で「ベラ・フロレスタ会」が催されるので私も出席した。運よく高津のジョルジ君と同席したので、それとなく『千千迺舎集』のことを持ち出して、「今の私なら読めると思うので貸して頂けないだろうか。」と言うと、「母の遺品は大切に蔵ってあるから調べてみます。私には必要のない本。有ったら進呈します。」と言われるのであった。うれしかった。

翌年の「ベラ・フロレスタ会」も同会場で開かれた。ジョルジ君も見えていた。

「藤田さん、遺品の中に『千千迺舎集』は無かった。妹が形見に持っていったのだと思う。
と云われるのであった。
私はハッと気づく事があった。妹のＡ子さんは北御門家（公卿の出）へ嫁がれていたので、お母さんの形見に持って行かれたのであろう。良かった、あの本はＡ子さんが持って居られるのが一番ふさわしい。北御門家で家宝の一つに加えられて蔵って居られることを思うと、私はほのぼのと心あたたまるのであった。
コロニアでは数少ない希観本の一つ、『千千迺舎集』を若き日に手にとって見る事が出来たのは、私にとって生涯忘れることの出来ない眼福の一つであった、と沁みじみ想う今日この頃である。

一五一～三〇〇号

発表作品数上位者

1	五二〇首	陣内しのぶ
2	五一九首	酒井祥造
3	五一〇	水本すみ子
4	五〇〇首	井本司都子
5	四九九首	岡本利一
	〃	小野寺郁子
7	四九三首	末岡芳三
	〃	上妻博彦
9	四八四首	桜井　正巳
一〇	四八〇首	小笠原富枝
11	四七七首	中村教二
12	四七三首	中西静世
13	四六九首	青柳　ます
14	四六五首	宮本留美子
15	四六四首	柴倉知余
16	四六一首	山岡樹代子
	〃	川上美枝
18	四五六首	田口愛子

『椰子樹』に期待を寄せて

渡辺　光

文章を読んだり書いたりしていると、言葉を漢字で表現する事によって意味が即座に分かるし、漢字の使い方によって、ニュアンスが微妙に異なってくる。読ませる漢字と読む漢字、様々な言葉の表現方法があるのだが、日本語は本当に美しいと思う。私は短歌に出会って益々それを感じるようになった。三十一文字という限られた字数を縦横無尽に操って修飾する技は無限の広がりを持つ。何でもない視野の中の一つの動きが、言葉によって読者の心をゆさぶる力を持っている。三十一文字を組立てて、自己満足でこれで良しと思っても、選者の添削一字の助詞の差し替えで、歌の広がりと感動を表現する事になるのに驚かされる事再三である。初心者は斯くして学んでゆくものではあるが、趣味として始め、趣味で終わろうとするとなかなか上達しないものであるが高齢者の社会の一員となった今は、価値ある趣味として続けたいと思っている。

『椰子樹』誌が三〇〇号となった事は、コロニヤ社会での唯一の価値ある財産ではないだろうか。何事に於いても続く事の難しさは周知の事であるが、先輩諸氏の弛みない日本文化伝承への熱意があったからに他ならない。

最近の日本語の乱れは、ＮＨＫで放映されている日本国内の日常生活の会話を聞くと「実に情けない」と思われる方がコロニヤでは多いかと思う。戦前・戦中の正しい日本語を教わって育った人達で、短詩型文学を趣味としている方が多い事から当然の事ではあるが、初めて日本語を学ぶ人達にとっては、正しい日本語と最近の若者言葉との判別がつかないと思われる。

最近の教師は生徒に合わせる事に努力している。昔は教師や親の指導で生徒が成長していったものだが、現在の教師や親は、子供達が使う流行語をより早く覚えて生徒達の会話の仲間に入る事が、生徒達の人気を得るための手段となっているらしい。凡ゆる漫画を読み、ギャグの一つでも出して、生徒達の生活に順応する事を考えているそうである。教師の質は第二の問題で、優先するのは生徒の人気をとる事であるらしい。生徒の使う言葉を訂正注意したり、生徒とのやりとりが出来ない昔流の真面目一方の教師は完全にシャットアウトされ、疎外視され続け、校内暴力や学級破壊へとつながるのである。

親も然り、子供の顔色を窺う習性に変化してきた。「威厳」と云う言葉は死語になりつつある。これも日本語の乱れが大きな要因ではないかと思っている。六世紀後半頃より盛んに詠まれた抒情詩としての和歌は、見事なまでに美しい日本語である。これが消滅して、得体の知れない日本語に変って行

くであろう事を考えると、正に「日本沈没」ではないだろうか。

外国に於いて日本語を習得する事は大変な苦労である事は言うまでもないが、日本語を国語とする我々の祖国に於いても短歌人口は高齢化して、若い人が大変少ないと聞いている。然し歌会始めの応募者は年毎に増え、十代の人達が毎年入選する事を考えると、地域によっては盛んに指導されているようである。日本古来の伝統に基づく短詩型文学は、これから先ももっとジュニア層に浸透していって欲しいと思う。今こそ若い世代の人達と共に歩み続ける工夫をしなければならないように思うのだが……日本語の難しさもあって習得者が年々減少の一途を辿っている事からしても、短歌の世界に馴染めるかどうか疑問ではあるが、ジュニア短歌を啓蒙して行く事が大切かと思う。文語体が難しければ口語体で挑戦して見るように、日語学校などで指導されてみたら……と思っている。いずれにしても絶やしてはいけないと思う。

海外での日本の伝統文化の伝承は予想以上に困難な事であるし、一世の人口が年毎に減少して行く事は自然の現象であるからして、二・三世と移行して行くにも、彼等にとっては余りにも高度な日本語学習になってくるようであるが、決して不可能ではないと思う。小さい時から言葉に慣れ、用語に慣れ、多くの作品を読む事で第一歩が踏み出せるものと思う。幸いにも今だったら、『椰子樹』誌に愛着をもっておら

れる先輩の方々が必ずや良き指導者となられる事と思う。『椰子樹』会員の平均年令を考えると、そうゆっくりもしておれないのではないだろうか。

短歌研究誌上で、某英文学者の記事の中で興味ある文章があったので引用して見たいと思う。

短歌は動詞、俳句は名詞の詩である。これが両者の最も大きな差異であろう。日本語はもともと動詞的な音膿である。短歌は、日本語の特質をうまく生かしている。動詞が生きているのである。それにひきかえ、俳句は名詞が柱で動詞の影はうすい。ときに全く動詞がなくてもりつばに句になる。短歌では先ず考えられない事である。動詞の詩、和歌・短歌が古来、すぐれて女性的文芸であったことを考えると、女性の作り手の多くなった俳句が動詞的になりつつあるのは偶然ではない様に思われる。動詞が軸になれば、連続によってメロディを奏でる。短歌は音楽である。名詞は点である。重ねるものではなく離して不調和、非連続の関係におくことで不調和の調和、非連続の連合の視覚的効果をあげる。

短歌は音楽、俳句は絵画と割切って考えると両者の関係がはっきりする。初め短歌を作っていて、なかなかうまくいかず、俳句へ転じて名をなす、という例はいくらもある。音楽がいけなくて絵画が合ったという事であろう。逆もない訳ではないだろうが思いあたるケースがない。習得の難度は音楽も絵画も差はないはずであるが、どうも音楽の方が時間がか

かりそうだ。明治以降、ヨーロッパの芸術を学んで来た歴史を振り返ると、絵画は三十年位すると本格的洋画が描けるようになった。

ところが音楽の方は、まともな音を出すことが出来るようになるのに六十年位かかっている。色々な事情はあるにせよ音楽は絵画よりマスターするのが難しいのである。すくなくとも時間がかかる。短歌の方が俳句よりも難しいらしいのもひとつにはこの為であろうと思われる。

今欧米で俳句に心を寄せている人が増えているというのに、短歌を作ろうとする動きのある事は聞かない。名詞構文のヨーロッパ語を使っている人達に、絵画的な俳句がより親しみやすく感じられるという事もあろう。短歌の味わいが分かり、作ってみようという外国人が現われるにはもう少し時間がかかる。

以上記事の抜粋であるが、確かに短歌の難しさは作歌する皆さんは周知の通りだが、三十一文字の叙情詩は読む人の感動を呼ぶ日本語の美しさが濃縮されているように思う。だからこそ絶やしてはいけない伝統文化であると思う。今後も続くであろう『椰子樹』に期待したい。

『椰子樹』三〇〇号に寄せて

敦賀　葵花

『椰子樹』二〇〇一年一二月（二九七号）に「三百号記念特集号原稿のお願い」を見て、駄文を綴ることにした。

私は、一九四八年四月に、パウリスタ新聞社に、経営担当者として入社したのであったが、事情があって、編集部で筆を執ることになり、歌人清谷益次さんと机を並べた。そんなわけで、初めて『椰子樹』誌を見たのは、そのころであったように思うし、その年、第一回短歌大会があって、記者の立場で出席したようにも思う（思い違いかも知れないが……）。

私はパウリスタ新聞社に七年つとめ、俳句大会の世話をしていたから、清谷さんは、記者の立場で、俳句大会に出席されたような気がする。だから『椰子樹』とのご縁は浅からぬものがあるわけであるが、俳句一本槍であった私は、歌を作ることがなかった。短歌大会で、アベック歌合せに興じたことがあったけれど……しかし、エメポイ実習場時代（一九三一～三三）には、「葵花」というペンネームで、盛んに歌を作っていた。

故里を知らず来たりて異国の文学に親しむ妹を持つ我

という当時の一首を思い出す。妹を耕地の学校に通わせてい

たのだったろう。

さて、現在の『椰子樹』とのつながりは、二八五号からである。私が、ふとしたことから、三十一文字に、あらためて、親しみ始めたのは、一九九八年半ばごろで、以来、毎日毎日、その時々の出来事や感想を、いわゆる腰折れとして書きとめている。

私の俳句歴は七十年を越えるが、さっぱりモノにならない。短歌もなおさらと思うが、とにかく作りつづけて『椰子樹』の作品欄で勉強させて頂いている。齢九十を越した私。ルイ・バルボーザの許「死ぬまで学ぶ」つもりである。（二〇〇二・一・二〇記）

思いつくままに　阿部　玲子

「二世なのに、へー」と言われる私が短歌に興味を持ったのは未だ少女の頃であった。日本語学校の読本の中で良寛の歌の調べのやさしさに惹かれたのだった。

私の生まれたのはノロエステ線の第一アリアンサ植民地であるが、近くに岩波先生、武本先生、中江克己さんなどが住んでおられ、父母はその頃より皆さんと一緒に作歌していたようである。父は其の後、日本語教師として上聖したが、そ

の内に武本先生、中江さんも上聖される。岩波先生も近郊にお出でになり、他の仲間の皆さんと歌会を開いておられた。『椰子樹』が創刊される戦前には、坂根総領事も作歌しておられた。この坂根総領事の尽力で『椰子樹』創刊の運びとなったのであった。当時、公邸で歌会が開かれたこともあって、父母が楽しそうに連れ立ち出かけるのを見て「歌会は楽しいのだなあ」と思った。その母も世界大戦の始まる五日前に亡くなった。丁度私が十二才の時だった。父は「樋田陽荘」、母は「樋田美沙子」のペンネームで、『椰子樹』第一号や『コロニア万葉集』にその名が残されている。

私が十八才の時、はじめて父に連れられて八巻耕土さんのお宅の歌会に出席した。父に「出して見なさい」と言われ、二首ほど投稿して二点ずついただいた。その時の一首。

めまぐるしい街より帰り歩みつつ自分の心の反省などする

その時、武本先生・中江さん・徳尾さんなどから「お母さんに負けないように作歌を続けなさい」と励まされた。それからぼつぼつ歌会に出席するようになり、『椰子樹』にも「樋田玲子」の名前で投稿するようになった。第一回の全伯短歌大会にも出席した。何回目かの大会の時、弘中さんと知り合いお隣に坐ったこともあった。その頃の全伯短歌大会は、地

方の方達との親睦の意味でいつも大会後には二次会があり、最後には喉の披露をするのであった。今でも清谷さんが美声で唄われたことが思い出される。

若い方で、則近佐稚子（谷佐稚子）さんと言う方がその頃『椰子樹』に投稿しておられ、文通してお友達になった。モジで則近正義さん（佐稚子さんの兄）が歌会を開かれた時に、初めて佐稚子さんとお目にかかった。サンタ・テレジンニヤと言う洞窟のある岩山での歌会だった。

お手紙にて知りにし人と岩山の道たどりつつ語る今日の日

その時も徳尾さんがほめて下さった。

ビグワの越村由起子さんが『椰子樹』に投稿されるようになって大会でお友達になった。その後村越氏が再婚され、家族で上聖された。岩波先生がお亡くなりになられ、その次の短歌大会で、私と由起子さんが先生の「故郷の歌」を踊ることにしては、と言うお話があった。武本先生が作曲なさり、父が振り付けをすることになった。由起子さんは花柳流の踊りを習っておられたが、私は学校で習ったお遊戯しか踊ったことがないので断ったが、勧められて踊ることになった。ピアノの伴奏は岸本クララ（現在綱島）さんがして下さった。大会では皆さん大変喜んで下さった。由起子さんとは其の

後、一緒に植物研究キャンプに参加したことがあった。その時の一首。

朝日差す彼方の山の一処炭焼く煙白くのぼりぬ

当時私はピネイロスに住んでいたが、すぐ近所に坪内広代さん・葛西妙子さんが住んでおられた。明治生れの方達で、個性の強い方達だった。「歌を作るなら『万葉集』を読まなければ」と言って葛西さんが『万葉集』を貸して下さった。その頃の先輩の西田さん・開沼さんも私のあこがれの人達であった。忘れられないのは、吉本青夢さんのことである。『椰子樹』の選者をしておられた頃、いつも良い歌評をして下さった。私の結婚した当時に住んでいたラッパ区でキタンダをしておられた。奥様と別れられたりして、一般の通念としては社会に受け入れられる人ではなかったかも知れないが、人間としては純な人であった。海の歌を作り、才気のある方だった。

叔父の光田寿男（母の弟）が作歌をするようになり、いろいろ教えてくれたり、励ましてくれるようになった。叔父からはその後、若山牧水の歌集をもらった。優しい良い叔父であった。

私は結婚する少し前に作歌を止め、二十年余を空白に過ごすことになり、弘中さん・陣内さん・小笠原さん・水本さん

と、優秀な方達が活躍された良き時代に同席出来なかったことを残念に思う。空白の時代にも歌が忘れられず、パウリスタ歌壇に幾度か投稿して、米沢さんから歌評をしていただき嬉しかった。

一九八十年代になり再び作歌するようになったが、いつも支えて下さった中江さん・武本先生が相ついでお亡くなりになった。武本先生は「玲ちゃん、歌を持って来なさい。見て上げるから」といつもおっしゃって下さったが、その頃は先生に褒めて頂けるような良い歌が出来なくて先生の御厚意にむくいることが出来なかった。その後、井本惇先生が選者になられ、これからしっかり勉強しようと思っている時に急にお亡くなりになり、本当に残念だった。

作歌するようになってからも一向に歌が出来ないので、『椰子樹』へも投稿出来ず、サンパウロ歌会へ二首（その頃は二首だった）出すのがやっとだった。出しおくれていたりすると、安良田さんから「あなたの作品が未だ来ていませんよ。早く出して下さい」と催促が来るので、それから頭をしぼってやっと出すのであった。その頃は植村かずさんがお元気で、大会の時や歌会で活躍しておられた。このような方がおられるから、大会や歌会もスムーズに運ぶことが出来るのだとしみじみ感じた。その植村さんも病を得て、早く亡くなられた。

大会の名札を毛筆で丁寧に書いて下さった中井益代さんを

思い出す。おだやかで誠実な方だった。岩波賞を受賞された時にお祝いを申し上げると、「阿部さん、短歌だけを一筋に勉強しなさいね。その内にきっと岩波賞をいただけるようになりますよ」とおっしゃったのが忘れられない。古い歌人の方達も、徳尾さん・川原さん・中井益代さんと櫛の歯が欠けるように逝かれ、淋しくなった此の頃である。現在選者である先生方も御病気がちであったが、一日も早く御健康になられ、いつまでもお元気であられるように心からお祈りする。

私がいくらかでも歌が川来るようになったのは、一にも二にも先生方や先輩の方々のお陰だと感謝して止まない。

思いつくままに書いて見たが、振りかえって見ると、短歌は私の心の支えであった。これからも努力して良い歌を作って行きたいと思う。そして『椰子樹』がこれからも永く存続することを願って止まない。

盲者蛇に怖じず　田中　朝子

『椰子樹』三〇〇号を記念して何か一筆を」と編集部よりの御指示に拙い筆を執ることになり、改めて顧みると私の狭い視野ながら『椰子樹』が短歌を嗜む者に与えたものは、以外に大いなるものであることの思いを更に深くし尊重の念がわく。

『椰子樹』創刊までの経緯は、武本由夫師と徳尾渓舟師が『椰子樹』記念一〇〇号に詳しく書いておられる。改めて目を通すと、第一号発行は一九三八年十月一日とある。本年（二〇〇二年）の三〇〇号で、六四年経過している。一口に六四年と言えども半世紀を上回る年数で、人間の一生の寿命に対等する年数である。

更に驚くことは、ブラジルでは一九二六、七年頃から短歌運動が芽生えていたことで、それは笠戸丸移民が移住して二十年足らずの移民初期の最も険しい時期のことであり、それから十二・三年後に第一号創刊が成されている。当時の移民の殆どは、農業で基盤を築かんと辛苦を嘗めつつ荊棘の道を辿っていた時代で、そのさなかに文芸への心の余裕を抱き、創刊に漕ぎつけた功績は、驚異の一語に尽き、感服するのみである。

『椰子樹』がこれほど長く継続できたことは、単に「移民の郷愁の拠り処」と言えないものがあるのではなかろうか。言葉や風習の異なるブラジル社会で生きゆくには、幾多の苦況に耐えなければならない。特に言葉の不自由は日々の生活に忽ひびく。その反面、次第に使用薄らぐ自国語への渇望は焦燥感を伴い、文芸へと傾いてゆくのではなかろうか。小塩卓哉氏のコロニア短歌評論文に「ブラジル移民の精神とも言える」とあるが、当を得た評論であると思う。

この来し方六四年は、こうした移民の精神より芽生えた歌

壇に、それを追う幼少時移住した、言わば準二世の成長に伴い日系コロニアの基盤確定しゆく時代であった所以とも言えるであろう。『椰子樹』が現在までその精神を担い続けて来られたことは、その間直接発行に携わった諸氏の計りしれない熱意と精励がうかがわれる。

私が『椰子樹』に入会した頃は、『椰子樹』経歴四期「飛躍の時代」（一九五九～一九六六年）であった。その飛躍しつつある歌壇に「盲者蛇に怖じず」の譬えの如く、初心者の私が飛び込んだのであった。当時は既に創刊に協力した人の幾人かは逝去されておられたが、コロニア歌壇の大御所武本由夫師を始め、安良田済師、中江克己師、徳尾渓舟師、清谷益次師、井本惇師は指導の立場に肩を並べて、男女の優秀な歌人の勢揃いで、確固たる歌壇が成り立っていた。

私が『椰子樹』入会を思いついたのは、『婦人公論』の文芸欄に度々「ブラジル　石塚やす」とあるのが目にづき、その秀逸な作品に感嘆したからであっつた。石塚やす、中井益代、開沼貴代、川原比露思の諸氏は、日本で基礎的素養を培われたようで、その歌風は短歌の伝統を重じた音律正しい、洗練された技法により、品位の高い歌で、その作品を基に学ぶところは多かった。

日本の前衛歌の流れに沿って、コロニア歌壇もその傾向にあった時代で、初心者の私には難しく苦痛となり、幾度となく挫折せんとするところ、届いた『椰子樹』を手にすると、

歌友の熱心さに絆されて、辛うじて作歌を続けるという状態であった。丁度その頃、一首の前衛歌が問題となり、大場時夫氏対武本由夫師の誌上論争が三号続いて載った、ことがあった。それまでの私は雲を掴むような作歌姿勢であったが、それを境に短歌は吾が裡に行儀よく居座ったようであった。

例年の全伯短歌大会は、指導者諸師の雄弁な評論が交わされて、大会は年々活気づいていった。そんな評輪を聞きつつい勉強になった時代であった。当時はコロニア歌壇は益々興隆の途にあり、武本師が「幼少期に移住して、この国で短歌的素養を培った人々が招来した興隆である」と記しておられるが、その「人々」の準二世は、先輩がお膳立てしたところに割り込んだ幸運児である。

その幸運児も自然には逆らわれず、老齢化している現在、コロニア歌地を思うと一抹の寂しさが絡むるのは否めない。一人でも多く後輩が現われて、継続して呉れることを切に願ってやまない。

不死鳥　　酒井　祥造

初めて『椰子樹』を知ったのは、サンパウロ市に住む妹を通して植村かずさんから送ってもらった一九八三年の六月号

で、それまで遠い存在であった。

短歌誌に心ひかれて読み返すうちに入会して見ようかと考え始めた。日伯歌壇に投稿していて、選者の弘中先生が『椰子樹』の選者もして居られるからと、思い切って一九八四年に入会したのだった。初めての投稿を選して下さったのは井本惇先生で、尊敬する先生方にお会い出来ると楽しみにしていた全伯短歌大会以前に、酒井繁一先生も亡くなられ、ひどく気落ちしたがそれでも大会に出席しようと一人で出聖した。

大会では各先生方、会員の方々にも暖かく迎えられほっとしながら席に着き、初めて植村かずさんにお会いし、同郷の方でもあり親しくお話をしたのであったが、次の年には亡くなられ、一期一会の人となった。色白のほっそりした優しい人であった。

当時の大会は百人以上の出席者で賑やかであり、弘中先生のあざやかな司会で一日を楽しんだ。あれから、毎年欠かさず大会に出席しているが、その後幾人か亡くなり、一九九八年には弘中先生も亡くなられた。『椰子樹』を読み返して見ると一九八三年当時の投稿者の半数近くが亡くなられたかと思う。

二〇〇号記念号のあとがきに、「一〇〇号の時、果して二〇〇号記念まで続くかしと編集部の方は思って居られ、当時三〇〇号など遠い未来と感じた会員も多かったと思う。それ

がついに三〇〇号に達したのであるから、年六回発行の短歌誌と思えばおどろくべき記録と言えよう。まして十年前の狂乱インフレを乗りこえて来たのであるから、当時の編集部の方、会計の方の苦心は想像に余りあるものであったと思う。『椰子樹』をつぶしてはならぬとの会員の思い入れが、ここまで支えて来たのであろう。

さてこの先の四〇〇号は？せめて井本格さん、宮本るみ子さんのような若い方が、二・三十名も居たら大丈夫なのだがと思ってしまう。不死鳥のようにあと二十年続くだろうか？つくづく昔の日本語禁止と戦争が、若人の短歌俳句の経読を大方絶ってしまったことが残念でならない。

『椰子樹』に入会してから、短歌の歴史に興味を持って『万葉集』も読む様になり、千三百年も前の日本がこれほどの文化をもっていた事に驚き、更に二千年前すでに和歌の原型があったらしいこと、三十一文字の定型に無限の事象を詠み込める文化をきずいた事に、日本民族の偉大さにあらためて感じ入り、準二世である私も短歌の勉強ができたことに感謝をおぼえる。万葉集を読んで、千三百年前の人々が今と余り変らぬ言葉を使っていたこと、感動を素直に歌に詠んでいたことを知ることができた。また、女性の恋の歌の多いことも驚きである。ここにわかりやすい歌を一部を選んで書いてみる。

・月読の光に来ませ足引の山をへだてて遠からなくに（六七〇）
・君がゆく海辺の宿に霧立たば吾が立ちなげく息と知りませ（三五八〇）
・防人に行くは誰が夫と問ふ人を見るが羨しき物思ひもせず（四四二五）
・朝寝髪われは梳らじうつくしき君が手まくら触れてしものを（二五七八）
・朝ゆきて夕は来ます君ゆゑにゆゆしくも吾は欺きつるかも（二八九三）
・稲つけばかかる我が手を今宵かも殿の稚子がとりてなげかむ（三四五九）
・君待つとわが恋ひをればわが屋戸のすだれ動かし秋の風吹く（四八八）
・夕闇は路たづたづし月待ちて行かせわが背子その間にも見む（七〇九）
・夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものぞ（一五〇〇）

万葉以後は上流社会のあそび事になったらしいが、和歌は文化の花と咲いて全国に知られるようになった。戦国時代でも和歌がたしなみとして絶えなかったのだから不思議なくらいだ。やがて和歌からわかれ、俳句が生れ、明治に子規が写

生歌写生句の祖となって現代に続き、未来も絶えることはないであろう。

『昭和万葉集の秀歌、戦争と人間』にあった兵士や銃後の妻たちの歌に心打たれたので、一部を書いて見る。

・五人の子と妻をのこして来し兵はついに語らず妻子の上は
・さらぬだに収入少なきこの歌を予備召集の令状うけにけり
・灯り消し日本の港去る船のデッキに群れて兵の黙せり
・大方は言あぐるなくひたぶるに戦ひ死にき幾人の友
・万歳の叫びをあびて征く吾の車窓に母は声なくすがりぬ
・み仏となりたる夫やかなしかる吾が胎動を誰に告げまし
・かならずや生きて帰ると言ひがたき君と朝の町を歩めり
・焼跡に土と石とを積み重ねこのうつつなを遊べる幼ら
・大き骨は先生ならむそのそばに小さき頭の骨あつまれり
・よりそえば体いとしく它うなりたしかに夫は帰り来ませり
・征く日まで夫のにぎりし鎌の柄の手ずれしたしみ我は稲刈る

二五一～三〇〇号（計五〇回）全号出詠者（十名）

井本司都子　酒井　祥造　陣内しのぶ　末岡　芳三
上妻　博彦　桜井　正巳
宮本留美子　田口　愛子　岡本　利一　小野寺郁子

猪名川堤からの眺め

藤田あや子

『椰子樹』三〇〇号記念特集号に何を出そうかと考えて居る時に、今迄の歌とのかかわりをふと振り返って見た。

小学校と女学校で、綴方の時間に作らされたのが一つずつあった様に思うが作品は全然記憶にない。青春の会社勤めの時、日曜、課長に連れられ田舎へピクニックして、昼食休みに俳句の好きな課長が句会を開いて皆に一句作れと云う。季語等全然知らなかったので、十七字でなく三十一文字綴ったのだが、途中歩いて来た猪名川堤からの眺めが故郷を思い出させたので、昔の事だが割とよく覚えて居る。

山城の猪名の河原に生う芹は清き流れにたゆたいて居り

こんな調子のものであった。後で男性課員からマネヨウ調だ

と褒められ赤面、以後作らない事に決めた。

自分が和歌に親しんだ始りは子供の頃の百人一首だが、日本人にとって和歌は身体に例えたら皮膚の一部の様に思う。第一に国歌「君が代」、小学校国語で習う「敷島の大和心を人間わば」や「東風吹かば」等。若い頃の友人の多くは九條武子や与謝野晶子等女流歌人に憧れて居たが、自分は余り興味はなく読まなかった。学校の遠足で吉野奥山の木立の中の「西行庵」を見て西行に憧れ、拾い読みしたが残念乍ら本は持っていない。一つ覚えているのが

願わくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ

若かったけれど戦中であり、空襲もあり死は身近であった。もう一人好きだったのは石川啄木で

働けど働けど吾が暮し楽にならざり　じっと手を見る

吾が家も貧乏であった。そして北上川ならぬ、故郷土佐の山川を懐かしんだ。ある夏、海水浴の帰り砂浜で小蟹をみつけ、指先に持って帰りの満員電車に乗ったのだが、ガタンと車がゆれた拍子に蟹が手許から離れ、間もなく近くで悲鳴が上った。「イターッ、誰だ蟹を車に持って来た奴は」　もう一つ好きで忘れない歌が正岡子規の

瓶に活けし藤の花房短かければ畳の上に届かざりけり

国語の先生が教えて下さった。源氏物語の現代訳を読み、習字で行成流のかなを練習するついでに平安の歌に親しんだけれど、万葉の歌の方が好きである。

御民われいけるしるしあり大君のさかゆる時にあへらくおもへば

日米戦初期、日本軍の景気の良い頃練習した色紙が今も残って居る。悲しい思い出は「海行かば水漬く屍」の曲が再々ラジオから流れ、玉砕々々の末の終戦。男性は健気な歌を残して出征、戦死し、残された女も亦沢山の歌を作り、新聞や雑誌に載った。

大君のみ楯とはてしおんあとに笹りんどうのとわにかをれる

誰の作かわからないが、友人が書いてくれた短冊が箱の底から出て来た。

大阪が灰侭になる一週間前運良く郷里に疎開し、自分の食う物位は作らねばと百姓の真似を始めたら、性に合ったのか農業が好きになり、平和になった大阪から友人が「帰って来い」と誘ってくれた時も行かず、何回かの見合いに振ったり振られたりし乍ら田舎が離れられず「折角町の学校にやった

のに」と父をがっかりさせて、三十才で農家に嫁し、間もなくブラジルに移住し、以来ずっと田舎住いで農業を続けている。多分、大都会にあった母校卒業生二万何千人中異色第一番かと自負している。

ブラジル生活の始まりはサンタマロの夫の姉の家で、姉の家族が大事にしてくれたので楽しかったし、幸運に恵まれ移住十年で現在の土地を手に入れた。がその後に苦しい十余年が続き、子供等が成人、夫々自分の生活に入ってやっと落付いて読書する気持のゆとりが出来た様に思う。

一九八〇年頃の猛インフレの始まり頃、漸く家を建て電気が来、電話が通じ、テレビも視る事が出来るようになった。やっと本箱を寝室に据えて、日本から箱につめて来た儘の本を列べ、電燈の下で読書が楽しめる様になった。息子も「お母さん、もう畑へ出なくても良いよ」と云ってくれた。そして還暦を祝ってくれた。一九八七年八月やっと訪日出来た。父は既に亡く、病床の母を見舞い、墓参りと親戚廻りに大方を費し、高知に住む同窓生の一人と会う事が出来ただけで一ケ月の旅は終った。

併し私の訪日を知った友の一人が、翌年サンパウロへ来た。進出企業に働く息子に会いに来たのだが、卒業生名簿から私の住所を探し手紙をくれ、サンパウロから電話が来た。「近いから来てちょうだい！」私は叫んでいた。サンパウロ市から二五〇ｋｍを迷い迷い四時間かかって尋ねて来てくれ

た。そして日本へ帰った彼女は、私の事を大いに宣伝するだけでなく、私宅宛の封筒を書いて友達に配ったり、同窓会では皆の寄書を集め写真を送ってくれた。仲の良かった何人かから手紙が来た。その中の北野よしゑさんは『白炎』を送ってくれ始めた。一九九〇年二月号が最初で、手紙の往復は年に一、二度、『白炎』も年二冊位であった。

九七年五月『白炎』四冊と皇后様の歌集『瀬音』が届いた。何かお礼をしたいとサンパウロの本屋を尋ね、椰子樹社と清谷様のお宅を教わった。古い日記を探してみると、「九七年七月九日　娘が清谷様宅へお伺いし、『幾山河の賦』と『岩波菊治』と『椰子樹』を頂いて来た」とあった。『幾山河の賦』は一通り読んでから北野さんに郵送し、『岩波菊治』は作歌の勉強に最適と時々読んでいる。

自分が何時から和歌を作り始めたかと古い記録を探したら、九四年十二月、高知の義妹宛への手紙に

蒔きつけの終りし畑に雨ぞ降るこの喜びを君に伝えむ

と云う歌とも云えないのが出て来て、多分初作。翌年八月、義妹宛に

年毎に枝拡げ行くイペー樹の花は真黄に今盛りなり

の覚え書があって、他にもイペーの花を詠んだのが列び、ボツボツ作り始めたらしい。

弟夫妻は俳句の稽古をしていた様子で、弟が九三年五月に膵臓がんで亡くなった後、毎月手紙が来て「悲しい淋しい」と云い続けていたが、手紙の終りにはいつも俳句が四・五句書いてあって、私にも作れと勧めてくれて居た。それで和歌より先に俳句を少し作ってみて、何十か書き残してある。『白炎』を読んでいる間に何となく真似してみたくなり、又自分には和歌の方が作り易い。

どんな気持で新聞に投稿したか思い出せないが、パウリスタ新聞への初出詠が九七年八月二三日で、

歌詠むを勧めてくれし友ありて老の楽しみ一つ殖えたり

緑畑赤土枯野と色分けて霞む春野は遠く静けし

吾が家の畑の高みに登って眺めると、パラナパネマ河の向うに以前は広々と牧野が拡がり、白い牛が点々と居たが、今は数軒のバタタ作りが借地し、バタタやその後へミーリョ、豆等次々と植えるので、何時見てもくっきりとした幾何学模様が色を替えて美しい眺めが楽しめる。

清谷様と小野寺様からお誘いのお手紙を頂いて、椰子樹社へ入れて頂いたのが九八年度からである。以来新聞も『椰子樹』も皆勤である。目的はボケ防止であったが、今はそれ以

上に、夫の介護疲れのストレス解消に役立って居る。暇を作っては農場内を歩き廻って、歌材を探し乍ら足腰を鍛えて居たが、昨年頃から夫の側が離れられなくなり、好きな眺めが詠めなくなった。その代りＮＨＫを時々覗くのを楽しみにしているが、俳句の時間があるのに和歌の放映がなくて惜しい。ブラジルには俳人の方が多いかと思うが、和歌好きが結束運動して、和歌も視られる様にならないものかと願って居る。

添削で思い出したのは「浜」の題詠で

大波に巻かれ塩飲み流されて立てざる儘に砂浜に坐す

と出したのを、

大波に巻かれ深みに流されしが危く救われ砂浜に坐す

と直された。本当の体験は大波に巻かれ、塩飲み流されたが、深みでなく浅い方へで、膝の力が弱っている士に流れが早く、足の先・手の先が砂に触る程浅い所で立てない。仕方なく仰向けに浮いて砂に着く迄流される事にして、沖から来る次の大波や、沖に立っている

孫の方を見ていた。浜の方を見なかったのが大失敗で、コットリと誰かの膝の上に抱かれる恰好で地に着いた。アレッと見上げたら、年配の頑丈な男性の顔があった。自分がどんな声を発したか知らない。心臓が潰れる思いで飛び上って、一

目散に夫と娘が休んで居る高みの木蔭に向って走った。ウバツーバ海岸十年位前の事であった。「浜」の題で思い出した海岸での失敗を又、歌に作り腐して失敗を重ねてしまった。何時か練り直して本当の歌に出来ればと、考えては居る。

去年六月、日本から姪と甥夫妻三人の来客があり、沢山の土産を貰った。他の親戚から預って来たと云う品も沢山あって、御礼の手紙を預って行っても良いと云われた。丁度その頃、ニューヨークの娘が雑誌と一緒に軟筆を送って来、毛筆同様に使えるので昔稽古したかな書を思い出し、郵送されて来る新聞の帯封を拡げ、色紙代りに「いろは」と書きなぐり楽しんでいたので、ふと悪戯心が起り、お礼の気持を歌にして短冊に書き持ち帰って貰った。客が離伯する迄の二十日余り、暇を盗んで懸命に習字をし、戦前買溜してブラジル迄大切に持って来た短冊を使った。恥の書き流しとも思いつつ、安上りであった。

はらからの消息聞きつつ喫む新茶に故郷の温み体中に拡がりぬ

いただきし海山の香り部屋に満ち土佐に帰りし心地して居り

等々大変喜ばれて、又電話を貰った。

いか程に続かんものか古き紙集めて綴じて歌帖となしぬ

九七年七月頃の作で、その後今日迄に作った歌は千を越して居る。兎に角何でも彼でも三十一文字に纏めて書き留めたものである。

自分には歌の良否はまだよく解らない。好き嫌いはあって、大凡そ締麗な気持の良い解り易いのが好きである。

一五一～三〇〇号

同人集・推薦欄掲載回数上位者

1　三六回　西田　季子
　　〃　酒井　祥造
　　〃　三浦　千里
4　三三回　清谷　勝馬
5　二九回　弘中　千賀子
6　二五回　中村　教二
7　二三回　玉木　五男
　　〃　桜井　正巳
9　二二回　岡本　利一
一〇　二一回　阿部　玲子
一一　二〇回　上妻　博彦
一二　一九回　川田　幸子

一三　一八回　加藤　操
〃　井本　格
一五　一六回　山岡　樹代子
一六　一五回　末岡　芳三
〃　安部　栄子
一八　一四回　中西　静世

武本由夫先生に短歌を学んで

高橋　瑛子

「この頃、どうも食事が進まないので困ります。何を食べてもおいしくないので、いやになります」という心もとない武本由夫先生のお手紙を、添削して頂いた歌稿と一緒に頂いたのは、一九八二年九月二十五日でした。数カ月前から頻繁に検診などを受けておられたのですが、もしや良くない病気でなければ良いがと、私はお手紙のこのお言葉にとてもひっかかり、悲しい気持ちにかきたてられていました。そして不幸なことにこの危惧は現実となり、それから約四カ月後の翌年一九八三年一月二十一日午前六時十五分、まだ日本人男性の平均寿命にも届かない、七十二才の生涯の幕を閉じられたのでした。

四十数年前私は、現在では「ブラジル日本文化センター」

と呼び名の変わった、サンパウロ日本文化協会に勤めていました。新しい建物に移る以前の、当時のサンパウロ日本文化協会の事務所は、リベルダーデ広場の小さなビルの五階にありました。

武本先生を初めてお見かけしたのはその頃でした。まだ今のブラジル日本文化センターの建物が出来上がる以前の、大正小学校の古い建物の一角でした。当時、そこで先生は、日本語教科書の編纂に携わっておられました。黒縁の眼鏡をかけられ、その眼鏡の奥からきっと見据えられたときは、怖いと言ってもいいほどの一徹さを持った、とても近寄り難い雰囲気さえ感じられたものでした。まだ社会経験も浅く、若かった私には、周囲の人に接するにも、ものごとを体験するにも、怖じけがあったのかも知れませんが、いかにも好々爺となられた、晩年の先生の大変くだけたお人柄は、五十才そこそこであったと思われる当時の働き盛り・男盛りの頃には微塵も感じられませんでした。二十年経て、その方に短歌の御指導をいただくことになろうとは、考えてもみないあの頃でした。

それから何年か後に、先生はサンパウロ日本文化協会の会報『コロニア』の編集に携わることになられ、私も何カ月か先生のもとで会報作りのお手伝いをさせて頂いたこともあり、武本先生の御存在は職場の中でも大変近くなっていきました。が、それも五年ほどの期間で、その後私は結婚を機に

サンパウロ日本文化協会を退職し、先生もお好きな文学一筋の道へと文化協会を辞され、『コロニア文学』誌などの編集発行へと御尽力されることになりました。

私が短歌を作ってみたいと思ったのはどういうきっかけであったか、物理的に育児の手が離れ、また設立以来の、夫の会社の経理事務の手伝いを退いてからのことでした。お住まいが近くということもあって、軽い気持ちで「短歌を作ってみたい」と云う私に、先生は「短歌を作るならみてあげるよ」と快く言ってくださったのが、私が短歌の世界に首を突っ込んだきっかけとなりました。「その道を極めるためには、みんな死にもの狂いだからね」とは、『椰子樹』の会員の方達をさしてよく言われる言葉でした。なにごとも中途半端で、なげやりなものを持っている私に、果たして短歌に死にもの狂いになるほどの情熱と気概を持つことができるかどうか。とにもかくにも、この頃から作歌への一歩を踏み出すことになったのでした。

「添削・助言は手紙で」ということで、私はまず五首作って送りました。それは全く短歌などとは程遠いもので、ただ単に単語を三十一文字に組み立てて羅列したにすぎないもの、または散文のようなものでした。それに対して、先生からは作品の添削に加えて、はじめての返信では、なんと便箋五枚にも及ぶ長い緻密な助言を書いて送って下さったのでした。小さな文字でびっしり書かれた「一言一句は、教え導

こうとされる方の暖かい熱意と、迫力が滲み出ていました。この助言は作歌を志す人には大変参考になるもので、私ひとりで読んで保管しておくにはあまりにももったいなく、いつかこの先生の助言集を広く公表できたらとも思っています。その時の書簡文の一部をあげてみたいと思います。

一九八〇年一一月一四日

武本　由夫　　高橋　暎子様

お手紙及び詠草受け取りました。短歌を作りはじめると、いろいろな疑問が生じるものです。短歌は大体一千四百、五百年くらいの歴史をもっています。そして、日本人が生きてきた時代、時代の生活感情・感覚・人間観・社会観というようなものが歌われて来ています。それらをひっくるめて、日本人の人生観を土台として、その上に今日の、日本に生きる日本人の人生観（各人各様の生き方の総合的な生き方を基盤として）が詠まれています。ブラジル日系は、やはり、ブラジルに生きる日系としての人生観を（各自の生活に根ざして）詠んでいます。究極的には「人間とは何ぞや」ということへの問いかけを、作歌という作業を通しておこなっていると言えましょう。人間、この不可解なものに対する挑戦が、今日の文明文化を生みだしてきたように、未来を望んで、挑戦によって、人間への解明作業は継続されます。そして、時代、時代の文化を作り出して行くものと言えます。作歌も自

分自身を究明し、て行く作業であって、それを通して、文化発掘に参加するということです。

こういう考え方を前提として過去の作品を読めば、おのずからその歴史的価値とその存在価値が解るはずです。貴女が提示した啄木や善麿の作品も、短歌という伝統的な文学の流れの中にあって、これらの歌人が生きていた時代精神を象徴するものと言えます。そこに価値を見出だすことができれば、この作品を正解したと言えましょう。

この二首を現代短歌の代表的な作品と並べて、その存在価値を問うのは正しい理解の仕方ではありません。現代短歌者の持つ理解からいえば、この二首は大変理屈っぽくて、しかも大変幼稚な思想を根底として述べた感懐といえます。しかし、彼らが生きた明治・大正の時代は、近代文明論を背景として、言うとすれば、日本の曙時代です。日本の詩歌人が西洋詩論をどうこなして、日本の詩歌を近代化するかに腐心した時代です。この二首など、そうした試みを実行した代表的作品といえます。二首ながら口語脈の文語で書かれています。作品の発想そのものも、徳川時代までの伝統を断絶しよう、とまでいかなくとも、全く異った発想（西洋的な）によって作ろうとしています。

啄木も善麿も、古今・新古今の流れを汲む徳川末期までの短歌の伝統を踏まえて、その流れの中にあって、西洋詩論を取り入れ、短歌（和歌）をどう改革して、時代精神を打ち出

そうかと苦心した作家です。しかしこの二人の行き方は、未来への展開を持ち得ませんでした。なぜかというと、二人ながら、観念的な象徴論が理念の土台をなしていたからです。二首をよく読んでごらんなさい。観念的な感懐が詠まれていることが解るでしょう。こういう作風を追求していくと、人間がおいてけぼりを喰って、「神」の世界が対象になる外、行き方が無くなります。そうなると文学ではありません。

後略

サンパウロ日本文化協会に勤めていた当時、会報『コロニア』では毎号「職員だより」として、職員の文章を掲載する欄が設けられていました。そこで、ある号に掲載されたYさんの文章、これが大変楽しく面白いものであったので、武本先生に共感してもらうべく「面白いですね」と申しあげたら、先生は内容の面白さには触れることなく、文章や文法・仮名づかいの間違いをことごとく指摘されたのでした。先生の意外な受け取りかたに怖いほどの思いがしたのと同時に、先生の文章に対する異常なほどの潔癖さのようなものを、その時私は思い知らされたのでした。ですから、先生の書かれる一文一句はまさに、国語の教科書のお手本になるような完璧なものでした。一字の訂正も無く、このようにして澱みなくして書かれた先生の短歌論・助言は延々と続くのでした。

この時に、私は啄木と善麿のどのような歌を提示したのか

記憶にありませんが、こうした歌に惹かれ、こうした歌を目指したい旨を書いたのだと思います。人情的な事柄を詠うということが、当時の若かった私の心情に重なり、石川啄木の歌に、さらに私の裡なる批判精神が土岐善麿の歌に惹かれ共鳴し、憧憬に至らせていたのかもしれません。

しかし、先生の教えに沿って、正しく短歌を学ぶ以前のこの私の考えは、写実を重んじる先生の教えとは全く異なったものでした。そのことをくどいほど書簡によって、先生は説かれたものでした。くどいほど先生から説かれた写実主義でしたが、先生が亡くなられてからは、いつしかその掟を破りそうになりながら、先生がいつも指摘しておられた「響くものの、寝呆けた歌」を私は作り続けているのではないか、先生が居られなくなった今、そんな不安にかられる事もあります。折々に先生の助言を思い直し、また初心に返り、また横道に逸れ、といったことの繰り返しを重ねている私です。

現在日本の巷に氾濫する短歌作品の傾向など、今まで先生が生きておられたらどのように批評し、批判されるのか、せめてもう五年、いや三年でも良い、生きていて頂けたらという悔しさと共に、そんな思いが去来してきます。

助言文に加えて、お送りした作品には一首一首に「O」や「×」、「◎」がつけられ、その上「この作品、このままでよろしい」「素材も表現法もよろしい」「上句をもっとすっきり

と」「この作品は佳作です。大変素直に詠めています。やたらにリキンだり、コチョウしたりするのが一番いけないのです。感覚の平衡を失わないこと。これが現代作歌人の心得です。その意味で、この作品は良質です」などと簡単な小評が書かれて返信されて来ます。チェックされ、小評を貰い、成績結果が返信されて来るのが心待ちになり、その助言や小評に沿って、新しい作品を作って送付すること三十回近く、先生が病床に就かれる日まで続きました。

さすがに、先生が床に就かれるようになってからは、作品を見て頂くことは遠慮するようにしましたが、お見舞いにうかがった私に、先生は病の床の中から「作品はどうしましたか。持っていらっしゃい」と言われるのでした。

瀕死の床にてソーロ打ちつつ作歌するこの業病の火
の消ゆる日は何時

と詠われ、この作品を最後に逝ってしまわれたのですが、執念とも言える、文学に対する凄まじいまでの思いは、指導を頂く側にもひしひしと伝わってくるのでした。息絶え絶えの病床の中から作品を持って来いと言われる執念に応えて、厚かましくもまだ作品を持参していた私でしたが、体力の衰えきってしまっている先生に、添削や助言をして頂くという気持ちはすでに、毛頭あるはずもありませんでした。私が病床

に持参した作品に日を通しながら、「これは良い」「これは良くない」と指摘されるお姿を、涙を飲む思いで眺めていた私でした。

澱みない文章を書かれる先生は、なにごとにつけても、冗舌な方でもありました。毎月のサンパウロ歌会にはお供をさせて頂き、私の車で送り迎えをさせて頂いたのですが、車の中でも先生の話題は常に尽きることがありませんでした。ある時は、優れた歌人の生きかたと思想について、ある時はコロニア歌人仲間の人物論、ある時は植物の名前と種類について説明され、植物博士のような方であったりと、くったくなく気さくなお人柄からほとばしり出るような豊富な知識は、おそばにいて全く退屈するということはありませんでした。そのお話を聞くだけで、どんな講演を聞くよりも大きな充足感が得られたものでした。特にその道の文学のお話に関しては、まさに口角泡を飛ばしてという表現そのままで、とどまることはありませんでした。

御自宅では観音様のようなふくよかな奥様に見守られながらひとしきりしゃべり、しゃべり終われば必ずお酒がつきものという先生でした。一生を書きに書き、しゃべりにしゃべって、果ては飲みに飲み、奥様の大きな掌の上で存分に動き回って、力尽きてしまわれた先生でした。

歌会で先生のお供をさせていただいたのは、一九八二年の全伯短歌大会と毎月のサンパウロ歌会でした。そしてその年

の十月のサンパウロ歌会への御出席が最後となりました。

一九八二年九月二五日

武本　由夫　　高橋　咲子様

二十二日付お手紙及び詠草、二四日に受け取りました。大会の空気がお気に召したとのこと、うれしく思います。みな懸命に作歌していることは、あの迫力ある雰囲気からも見て取ることができます。俳句・川柳も作る人が何人かいましたが、「女流歌人というのはよく働くなあ」といって感心していました。盛沢山のプログラムがどんどんこなされていくので、会の進行もすっきりしていて、多くは女性の働きによって進められているので、感心したようでした。小生は、全伯俳句大会（現代派）、全伯川柳大会に　も毎年招待され、午前中の式にだけ出席します。会の運営・進行など、短歌大会が一番すっきりしています。

中略

来月第二日曜日は歌会ですね。よろしくお願いします。

後略

ちなみに、先生の御出席が最後となられた全伯短歌大会は、私にとっては初めての参加でした。

こうして、先生からのお手紙と添削も、女性の活躍ぶりを称揚して下さったこのお手紙が最後となりました。

先生が亡くなられてからの私は、最後の締め括りをする人のいなくなったサンパウロ歌会がそうであるように、いえ、その何倍もの虚ろな気持ちで、しばらくは全く進むべき方向を見失っておりました。けれども、この貴重な助言と教えの数々は、決して忘れることはありません。

生前、先生は口ぐせのように、当時孫のお守りをしておられたという有能なJさんを指して、「女性でも才能のある人は、孫の守りなどしてちやあいけないよ」と、格別な広い心を持って言っておられ、それは才能の無い私にも、女性としてどんなに大きな励みになったことか。古い明治の生まれの先生でしたが、「女は家にあって、夫に従い」などとは決して言われませんでした。そして、会えば決まって「歌集を読んでいますか」と、勉強ぶりを気にして下さってもいました。それは住む世界を異にされた今も遙か下界を眺め、見守られながら、今でも気にして下さっている、そんな気がします。

「歌集を読んでいますか」と師の声す裡なる荒野を歩みゆくとき

大切な二年余りの御指導と助言の数々を常に念頭に、魂のこもる短歌を目指して、作歌し続けてゆきたいと思います。

地方歌会だより

タウバテ短歌会の経緯

田中　朝子

一九八九年十月十一日タウバテ日本人会旧会館に於いて、八人の会員を以ってささやかな「タウバテ短歌会」が発足しました。

開会の挨拶につづき自己紹介が行われ、次に簡単な短歌についての手解きがあり、席題「春」で、一同作歌に取り組みました。短歌会での作歌は初めての人達で、些か緊張が見えましたが、それぞれなんとか作品は出来上がりました。農大出身の柴田純男氏、その夫人柴田君子さん（日本では教師であられたとか）、『のうそん』誌に小説などを投稿しておられた高野みさをさん、戦後移住者の若い人と二世の有島文子さんというメンバーでした。

出来上がった作品は、初歩の人としては割り合いに素直な作品揃いで高点を得た柴田君子さんの一首は、

初めての短歌を生みだす苦しみの七人をよそに春雷しきり

でした。作歌第一歩の緊張した一同の心理状態を把握した一首でした。私はこの歌会はすばらしい成長を期待できるのではと密かに喜びを感じました。そして、前もってお願いしてあった安良田済氏に早速作品を送付して、批評をお願いしました。氏はお忙しいなかを繊細な評をして下さり、一同感謝しつつ励んでいたのも束の間、眼の手術に依りお願いできなくなってしまいました。

その後なんとか行っていた歌会は、徐々に二人、三人と増え、第十二回の歌会には中田一鳳氏が入会し、行動機敏で作歌意欲旺盛な彼の入会は一同を促し、会は活気づき、作歌意欲が漲ってゆくのが見えだしました。行動に屈託なく自ら進んで協力して呉れるのには力強く思っていました。

ところが程無く、病気で欠席する人や亡くなる人が相ついで、余儀なく閉会する状態となり、一九九三年二月十一日、第三十三回歌会を最後に閉会するに至りました。

以後三年余閉会となっていたところ、玉手瑠璃子さんと有馬文子さんの会員勧誘の奔走が実り、再び「タウバテ短歌会」を開催する運びとなりました。因みに玉手瑠璃子さんは、『椰子樹』の故会員柳田威氏の息女です。前期三十三回に引き続き、第三十四回歌会として、一九九六年五月九日、十人の会員に依って、再び開催することができました。

再度の歌会には、新聞歌壇に投稿し、『椰子樹』会員でもある江頭初夫氏並びに壮年期の人二、三人が加わり、前回に

も増し張り切って、少人数ながら毎回和気藹々のもとに行われていました。

私の拙い手解きにも拘らず一同は、若芽が芽ぶく如く上達が見えてゆき、特に二世の有馬文子さんは、「六十才を越えて、このような勉強に恵まれて幸い」と、辞書や短歌用語辞典などを求めてせっせと励み上達してゆくのには、年齢に拘り消極的な者と、拘りなく積極的な者との差をまざまざと見せられた思いでした。

一同の中でも中田一鳳氏は、積極性に伴い詩的素養も備わっていたようで、短歌に対する情熱はものすごく、忽ち秀でて、ＮＨＫ歌壇でも再三佳作人選するようになっていきました。将来性があると見て、サンパウロ歌会への出席を勧めていましたが、一向に関心が見えず、意外で惜しい気がしていました。

一九九八年は、タウバテ短歌会発足以来初めて喜びが重なった年でした。

四月二十一日は、タウバテ温泉に於いて、サンパウロ短歌会との合同歌会が催されました。

十月八日、中田一鳳氏のＮＨＫ入賞祝賀会。

十月二十五日、有馬文子・田中朝子の明治神宮秋の大祭佳作入選。

翌一九九九年は、第百回明治記念綜合短歌大会で、梶田な

つさんが特選の部に入賞し、更に大きな慶びの年でありました。

五月九日、特選入賞祝賀会。

特選歌　　梶田　なつ

やへざくら何の花かと問う人に日本のさくらと教へよろこぶ

一同が励んできた証として、二年連続の慶びに恵まれて、いっそう作歌気力の漲った和やかな歌会として、毎月行われていましたが、「好事魔多し」の譬えの如く、再度歌会を起すべく会員集めに奔走した玉手瑠璃子さんの逝去につづき、ようやくサンパウロ歌会へも出席するようになり、益々その実力を発揮しだし、将来はコロニア歌壇へ貢献できる人物であろうと見做し、期待をかけていた中田一鳳氏の一身上に唐突に生じた事情で、氏の出席は不可能となり、寂しい歌会となりました。

それに加え、老いゆく親の身を案じる子等に引き取られてゆく人、不況ゆえに日本へ行かれた人等で、入会者無く細々と継続していましたが、熱心な有馬文子さんの逝去に依り、二〇〇一年二月十四日第九十回の歌会を最後に、又も余儀なく閉会に至りました。

顧みるに起伏の激しい短命な歌会でしたが、少人数であればこそ培われた厚い交情は稀で、人と人との出会いの何と貴

いものかと思いを深くし、いつまでも我が裡に抱きゆくものの一つとして感慨をあらたにしております。

心より故人の冥福と、離ればなれとなった歌友らの健勝を祈ってやみません。

サンパウロ短歌会の展望

鎌田　英雄

サンパウロ短歌会の略歴（一九九四年一月迄）は既に二五〇号別冊特集号（一九九四年六月）に掲載してあるので、ここでは省略し、その後の一九九四年二月からを対象として経緯を述べる。

歌会の催される場所は、現在、聖市内の山形県人会会館を借用させて頂き、毎年の全伯短歌大会の九月を除く他は毎月第一日曜日の午後一時より開かれている。

同会のモットーは月毎に幅広い表現分野を開拓し、自在性を求めながら独白の感慨の主張、それに多彩なる意見交換や寸評をしながら活性化と視野の拡大の努力をすることで、常に自在にうたう姿勢に熟成の度を深めている。

一九九六年十一月に三五〇回を迎え、記念として一三一ページの『光源都市（三）』が刊行された。又、二〇〇一年六月には第四〇〇回を迎えるに至って、一六四ページの『光

源都市（四）』が刊行された。

尚この期間中会員の歌集として……

一九九六年　『草穂』　梅崎　嘉明著

一九九八年二月　『うづ潮』　上妻博彦／泰子共著

二〇〇〇年三月　『クワレズマ』　高橋咲子著

等が出版された。サンパウロ短歌会会員ばかりでなく、ブラジル在住歌人の著書としていずれも高く評価されている。特に高橋咲子歌集『クワレズマ』は日本の大岡信氏の「折々のうたしに取りあげられ、歌評が述べられている。

現在、会員は大サンパウロ圏内に限らず、遠くはオリニョス、タウバテ、ヴアリニョス、モジダスクルゼス、スザノという地とも密接な連携をとり、投稿ばかりではなく月例会への出席も頂いている。尚、会の常連メンバーは次の通り……

阿久津孝雄、阿部玲子、新井知里、安良田済、井恒節、井本可都子、内川愛季、梅崎嘉明、江頭初夫、大塚清、岡本喜代子、小笠原富枝、尾崎都貴子、小野寺郁子、鎌田英雄、上岡寿美子、小池みさ子、上妻博彦、上妻泰子、近藤照、陣内しのぶ、高尾一、高橋暎子、高橋よしみ、田口愛子、竹山三郎、多田恵子、田中朝子、寺田雪恵、中沢綾子、西田季子、藤田朝日子、古屋泉、古山孝子、前田芳子、水本すみ子、山岡樹代子

以上の三十七である。

前回の二五〇号別冊特集号にも記してある通り、歳月の流れに連れ老齢化を伴い、会員数の徐々の減少が免れられない状態にあるが、その反面、又、幾人かの入会もあり、現在の会員数を保つことが出来て居る。その上、当会が今までより以上、永続的な存在を携える為、会員一同常に進展を計らい、又そのように励んでいる。

もしもこれを機会にと思われる方があれば、是非サンパウロ短歌会にお気軽に参加して頂ければ、会員一同の光栄でもあり、又大歓迎致します。

あらくさ短歌会の発足

高橋よしみ

「あらくさ短歌会」が結成されたのは一九九九年一月八日。既にその萌芽は何年間か三、四人の愛好者の間で温められながら、決行へ踏み切れず逡巡をくり返して居たその矢先、小塩卓也氏の御来伯があり、講演拝聴に及んで俄然触発された発足であった。

異国に於ける日本人社会の老齢化によって衰えてゆく日本語の将来性は予想されながらも、尚且つ、東洋に日本があり、此の地に日系人の生活がある限り双方の交流も、日本語も廃れる事はあるまいと云う楽観的観測と共に、遠い将来に

於ける移住民の渡伯をも夢見て、日本語を愛する者達の些やかな集りとなった。

主旨は短歌の灯を守る後継昔養成と、日伯両語訳の歌誌編纂である。移民の生きを綴る歌詠みの足跡を消してはならぬと云う思いがあれば、先ず歌筵を調えるのは旧歌人をおいて他にない。＝会場は自宅＝会費なし＝表現語は自由＝作品二首＝歌会は月一回、午後一時＝名称は「あらくさ短歌会」八巻氏が持参された名称の中から全員がこれを選んだ。

初歌会は十五名の予想が九名になったが、新年会をかねて互選で賑わった。

出席者＝八巻夫妻・卯ノ木・畔柳・金村・金谷・橋本・梅崎・高橋よしみ

欠席投稿者＝上妻・高橋咲子

当日の高点歌は畔柳、橋本の二名が二首共に同点で一位を獲得して、歩み出しは上々であった。以後少数ながら新会員を迎え、四年目の現在は欠席投稿者を含めて二一名となって居る。新会員の中、数名が日本語教師である事も末頼もしい。

二〇〇二年一月から奈良県人会々館を拝借し、移転した。会員の要望により、先ず先輩の梅崎氏から短歌の解説講義を受ける事になった。無料奉仕である。男性歌人五人ながら各々、独自の見解の持主で、今後順次に蘊蓄を傾けて頂くことになる予定である。

日本の歌壇へ海外移住者が応募できる様になり、既に旧歌

人達は何がしかの賞を授かったが、新人の金谷さんが早くも明治献詠歌に人選した事は朗報であった。石の上にも三年とはいえ、奥深い歌の道は末だ序の口、「あらくさ短歌会」の前途は険しい。大いに精進をのぞみたい。

比の三年間、題詠、即詠、吟行詠など試みたが、常に歌会詠を中心に合評研鑽を重ねてきた。欠席者にも歌稿を送り、選歌と歌評を頂いている。また、会員外の愛好者も客人として歓迎して居る。

次に全会員の近詠を記す。　（順序不同）

笑い声聞こえて来そうな日溜りで収穫したる豆を干してる
多田恵子

歳末の雑踏の中に友を見しいたく老けいて声かけ得ざり
金谷治美

新春を揃いて祝う四世代元朝の席に朝日輝く
橋本孝子

赤とんぼハミングすれば洋こえて耳朶によみがえるふるさと訛り
中田みちよ

夜行バス一人ねむれぬつれづれに一旬詠みたし上弦の月
中野摩尼手

テロにより高層ビルはアメリカの誇りと共にくずれ落ちたり
山田節子

紫陽花の色とりどりの華やぎに梅雨の重さをしばし忘れる

井上励子

高波の岩うちしぶく朝まだき太古の幻想さそうイタニヤエン

近藤照

蘭の花咲き乱れたる我が庭に思い出させる亡母の後姿

西田まさ子

亡き人に手向けの花か童顔の媼つみ来る野路の草花

千田修子

花去りしイペー老木の空洞に誰があずけた封筒の白

道田まさえ

散り敷きし桜の黄葉の美しさを掃かずにおきて友等に見せむ

久保田昌子

年令のせいにしておこう忘れたる買物とりに坂道を戻る

高原万里

芽接ぎせし牡丹桜の芽が伸びて花開く日をただに思えり

春名宏文

たてよこに織りなす出会い紡ぎつつ狭きコロニアあやに関わる

金村文子

渋滞は何処まで続く雨の中チエテの水位刻々上る

竹山三郎

金鈴の音色おもわせこの朝つばなの原に鶉鳴きつぐ

藤田朝日子

たまたまや師走みそかの夜半の月後架の窓ゆさせるさやけさ

上妻博彦

車中より手を振り去にし幼な孫の描き残したる漫画絵いくつ

高橋咲子

日蔭して見放くはろけき街道に待ちて久しき子の車見ゆ

高橋よしみ

争いのつきぬ世界を語りつつ約まりはブラジル称賛となる

梅崎嘉明

ゆかりの人々

臥すわれを慰むるごと病室の窓近く来て鳴けるサビアよ

八巻培夫

陽のぬくみ残れる蒲団に寝んとす明日あるを恃み静かに眠る

故寺岡晃児

滅びゆくものは美わし日本の女のことば水茎のあと

木村正和

子供らの声は聞けねどイメールしてはるかに伝える母の想いを

渡辺美代子

元朝に誕生したる蝶五匹雨の晴間に放たんとする

畔柳道子

糸走る竿操りつつ右、左、妻かたわらに手綱をかまえつ

卯ノ木利郎

母親の仕事が済むのをじっと待つ水着の女児の心は海辺

日高敬子

身も心も嬉れしく弾む八十路にて陸上競技にかける執念

高橋幸太郎

一本のカヌードとなり蜜を吸うベイジャフロールの密かな羽音

滝友梨香

地下鉄の最なかにありて人は皆かくも競いて下り出でて行く

由良薬水

モジ同好短歌会

中村　教二

一九九四年一月は「モジ同好短歌会」が新規に発足して一年目であった。

当時の会員は、『椰子樹』会員の平松霞、中山清風、太田かよ、下津てる、古関良男、中村教二らを中心に下津武治、新井清、高田四郎、蓮沼信一、井上幸輝、阿部秀子、平田正子の十三名であった。

会員の高齢化が進んでいたとは云え、月々の例会も順調に、その内容の充実も目に見えて来ていた。

処がそれからしばらくして、主柱と頼む平松姉が急逝され、その後間もなく下津姉が家事の都合にて退会され、つづけざまに中心人物を失った。細々と歌会を続ける間にも下津

武治、井上幸輝、蓮沼信一、高田四郎、新井清、阿部秀子らと物故者が相次ぎ、残された者達は茫然自失の状態、会の運営も危惧された。しかしその後、渡辺たかよ、遠藤保子らの新会員を得、九七、九八、九九年と順調に月々の例会を続ける事が出来た。

新世紀があけて三月、高齢の為中山氏が退会され、中村も又体調悪く例会への出席もおぼつかなくなり、協議の結果、二〇〇〇年初頭を以て遂に、一九八四年以来通算百九十六回にして、伝統あるモジ地方の短歌会の幕を閉じた。　因みにこの間、歌会にとって記憶に残ることは次の成績である。

一九九六年平成独楽吟入選
　秀作　下津てる
　佳作　中村教二
一九九七年宮中歌会抽入渦
　中村教二
一九九九年武本文学賞入賞
　中村教二
一九九九年岩波菊治短歌賞入賞
　中村教二
二〇〇〇年岩波菊治短歌賞人賞
　下津てる
二〇〇二年宮中歌会始入選

中村教二

野に山にイッペイの花咲き満ちて吾がうまごらの国の春なり

福博短歌会

杉本　鶴代

一九七七年九月十三日、婦人会を母体として文芸クラブを設立、短歌会、俳句会が発足し、短歌会には酒井繁一氏を指導者に迎えました。

一九八四年酒井先生逝去により、河村哉太郎、山本和多留氏の指導を受け、又特別会員としてバストス在住の森重扶美さんに、かずかずの御支援をいただき現在に至っております。

二〇〇二年に二十五周年を迎えますので、記念号を発刊し、祝宴を予定しています。

現在会員二十三名

青柳房治　青柳ます、入江貞子、植松周子　内谷美保　奥村敏江　黒木ふく、草野きくえ、酒井嗣朗、酒井文子、桜井みつえ、杉本正　杉本鶴代　滝ゆきを、寺尾芳子、栃沢秋穂　中沢綾子　野村康、原君子　春名宏文　藤原よしこ

吉田洋子

昨年は福博村入植七十周年に当り、文芸クラブの功労者として青柳房治氏が表彰されました。

カンポス短歌会の動向

春名　宏文

亡き友が自慢の暖炉に火を入れてわずか四人の歌会はじむ

九四・九五年は集まる者が四名、投稿者が三名あって「カンポス短歌会」も何とか続けられていた。

九五年五月、投稿者の一人武藤とみさんが亡くなった。

逆縁の子を持つゆえの悲しみを歌につづりて来し君なりき

熱心な作者で作品も多く、勉強されていたが、おしい方を亡くしてしまった。

高齢者ばかりの歌会に辻倫子女ざかりの歌境を見する

この方の若さに期待していたが、短歌の道は難しいとみえ

て二、三年で作品を発表しなくなってしまった。
集まる者が三人では歌会にならず、時おりスザノの小野政子さんが遊びに来られると、歌会を開くようにしていた。それも九九年の一月、安部栄子さんは、

名を呼べばあるかなきかの尾をふりて我に寄り来る小犬のナナは

この歌を最後に歌会にも出席しなくなり、作品も選歌もしなくかなってしまった。家族の方にたずねると、体は至極元気なのに、物を読んだり書いたりしなくなったと言うことである。
こうして「カンポス短歌会」は削減してしまったが、二〇〇〇年の一月から高橋よしみさんの世話で、高原万里と私は「あらくさ短歌会」に寄せて頂き、出席することは難しいが、月々の投稿だけはかかさず続けて現在に至っている。

全伯短歌大会
一九九四年以降の記録

第四六回（九九四年九月十一日）

会場　エスペランサ婦人会サロン

出席者　七四名

応募作品数　二九六首

司会　小野寺郁子

初参加者　重道千代子　山元治彦　河野美代子　鈴木竜尾　道勇佳子

総合得点一位　清水さかえ

一位獲得作品

【代表選】

闘病の夫へとつくる減塩食共に食しつつ冬越さんとす

小池みさ子

【互選】

紅を引く事もまれなる一生にて汝の終りのうすき粧い

大塚　清

【題詠「里帰り」】

里帰りうながす文を年ごとに書きくる母も老い深めいむ

多田邦治

【アベック歌合せ】

新築の木の香漂う厨辺に心充ちつつ思う過ぎ去り

小池みさ子・清谷益次

第四七回（一九九五年九月十日）

会場　エスペランサ婦人会サロン

出席者　七四名

応募作品数　三〇二首

司会　多田邦治

総合得点一位　山岡樹代子

一位獲得作品

【代表選】

老いづきてゆく寂しさに添うごとく風鈴細き音に鳴るタベ

川田幸子

【互選】

共に歩む日のまたありや足萎えの夫が靴を磨いておけと言う

下津てる

【題詠「百年」】

この国に百歳となりし父はいまイペー花咲く庭に憩えり

山岡樹代子

【アベック歌合せ】

ハンドルを捌く君の手たしかにて二人の旅路風のさやけし

西田季子・岡本利一

第四八回（一九九六年九月八日）

会場　エスペランサ婦人会サロン

出席者　七八名

応募作品数　二八八首

司会　小池みさ子

総合得点一位　古関良男

一位獲得作品

【代表選】

逝くときはわたしが先よと言いし妻の陽にぬくもれる墓石洗う

川原比露思

【互選】

妻の声届く範囲に在り馴れてわが看とり来し年月思う

桜井正巳

【題詠「川」】

風わたる空を映して大陸をつらぬく川の水静かなり

多田邦治

【アベック歌合せ】

許されし君と今日行く初旅に髪ととのうる姿見の前

西田季子・上蜜博彦

第四九回（一九九七年九月十四日）

会場　エスペランサ婦人会サロン
出席者　八二名
応募作品数　三二二首
司会　多田邦治
総合得点一位　中田一鳳

一位獲得作品

【代表選】

病む足を引きずりにつつ老いの身の限界として庭を巡れる
大西阿哲

【互選】

盲いたる妻の手をとりま白なる山茶花の花に指を触れしむ
中村教二

【題詠「陽光」】

陽光を浴びつつ前を行く夫の広き背中を楯とし生き来ぬ
高橋咲子

【アベック歌合せ】

はるかなる青春の記憶に摘みし薔薇日記のページに今も保ちつ
高橋よしみ・安良田済

※この年はパウリスタ新聞創刊五〇周年に当たったところから、これを記念してパウリスタ歌壇歴代選者（生存者のみ）、及び全四九回大会皆勤出席者が表彰された。

〔歴代選者〕米沢幹天　川原比露思　水本すみ子、小野寺郁子、清谷益次

〔皆勤出席者〕川原比露思

第五〇回（一九九八年八月二三日）

会場　エスペランサ婦人会サロン

出席者　七五名

応募作品数　三四二首

司会　多田邦治

総合得点一位　川田幸子

一位獲得作品

【代表選】

鈍りたる指もどかしく乾鱈をさきおればふっと寒流ひびく

小笠原富枝

【互選】

捨て難きもの嵩みゆく身のめぐり整理さるるはわが死後ならむ

山岡樹代子

【題詠「早春」】

早春の野にさわらびを摘みしことなつかしみつつブラジルに老ゆ

寺田雪恵

【アベック歌合せ】

さわやかな香りをのこし過ぎてゆく君のうしろで見るは切なし

森久子・藤田朝日子

※この年は『椰子樹』創刊六〇周年」

「全伯短歌大会第五〇回」「ブラジル　日本移民九〇周年」に当たった意義深い年であり、参加者の作歌にも真剣さがみなぎっていた。なお、『椰子樹』創刊当時からの歌人で、作歌活動を続けていた安部栄子・三油千里・西田季子・秋永三郎（故人）の四氏に記念品を贈呈し、その功績を称えた。また、日本の新進歌人・文芸評論家小塩卓哉氏の特別参加もあり、ブラジル　の作歌者に声援を送って頂いた。

第五一回（一九九九年九月十二日）

会場　エスペランサ婦人会サロン

出席者　六二名

応募作品数　二九二首

司会　小野寺郁子

総合得点一位　安良田済

一位獲得作品

【代表選】

棄民とも言われし頃の移民にて在外選挙権申請に戸惑う

八巻汀石

【互選】

辿り来し苦難の途には触れずして長病む妻の髪を杭きやる

滴草ひろし

【題詠「初春」】

杖つきて歩む並木路流れゆく雲やわらかき初春となれり

西田季子

【アベック歌合せ】

老いそめしいのち愛しく寄り添いて余生の幸をつくづく思う

高橋よしみ・斎藤深志

第五二回（二〇〇〇年九月十日）

会場　エスペランサ婦人会サロン

出席者　六九名

応募作品数　二七四首

司会　高橋暎子

初参加者　有沢まり子　坂みつる　関谷八重子　藤田あや子　若杉好

総合得点一位　米沢幹夫

一位獲得作品

【代表選・互選】

眼帯を外して凝らす視野の中とびゆく蝶の沁みて明るし

米沢幹夫

【題詠「日溜り」】

日溜りに椅子を持ち出し長病みの夫の頭髪整えやりぬ

藤田あや子

【独楽吟】

たのしみはブックフェアーでほしき本数冊見つけて手に持ち

し時　　上妻泰子

※この年、大会史上初の試みとして「独楽吟」がプログラムされ、「アベック歌合せ」が一時中止された。「本年の　プログラム進行具合によっては、次大会から『アベック歌合せ』を再開する」との運営委員会の決定による。

尚、この年の七月に聖市で展覧会を開いた秋田県人の書道家、石黒寛邨氏による折帖「ブラジル・コロニア百人一首」が会場に展示され、更に後日特別賞として、日本の大家村上俄山氏の色紙が贈呈された。

第五三回（二〇〇一年九月九日）

会場　エスペランサ婦人会サロン

出席者　五八名

応募作品数　二五〇首

司会　高橋暎子

初参加者　前田よし子　稲垣八重子

総合得点一位　久米光春

一位獲得作品

【代表選・互選】

執着を捨てて生きゆく晩年の背に柔らかし冬の陽射しは

久米光春

【題詠「初孫」】

新しき世紀を担う初孫のもはや少年の確かな歩み

高橋暎子

【独楽吟】

ブラジルは大らかな国老いてなお育む夢のまだあるぞよし

山岡樹代子

【アベック歌合せ】

ときめきて君を待ちいし日も遙か杖つきてパイナの散る道を行く　上田幸音・梅崎嘉明

※特別賞として、前年と同じく、村上俄山氏の色紙が贈られた。

随筆・寄稿・連載他

二九五号
「前略草々」　酒井祥造・清谷益次
二九七号
「随筆　日本の堤防」　酒井祥造
二九八号
「ＮＨＫ全国短歌大会に出席して」渡辺光
「梱包の歌集は日の目を見た」藤田朝日子
二九九号
「国民文化祭の短歌を見て」　酒井祥造
「玉木家の姉兄」　富樫苓子
「短歌に対する純粋な熱意」　小塩卓哉
三〇〇号「うた人、長谷草夢作品と回想」上妻博彦

連載
安良田済　「渓舟の文学的道程」
　二四四～二五八号で十四回にわたって連載。
安良田済　「武本由夫の文学的世界」
　二五九～二八八号で三十回にわたって連載。

清谷益次　「私の三十行鑑賞・K」
二二八～二八九号で五十回にわたって連載。
安良田済　「酒井繁一の世界」
二八九号より現在も連載中。
清谷益次　「心に残るブラジルの純粋叙景歌」
二九二号より現在も連載中。
高橋暎子　「短歌にかかわる用語」
二八九号より現在も連載中。
「定型」をテーマとした連載第一回目より毎号、短歌実作者または作歌を始めたばかりの人達のために、五句三十一音節の短詩型を機能させている用語について、例歌を換げて分析しながら、丁寧な解説を行なっている。
上妻博彦　「ブラジル短歌植物辞典」
二八四号より現在も連載中。
ブラジルの植物について説明し、その植物が詠み込まれたコロニア歌人の既発表作品もあわせて紹介している。

宮中歌会入選及び佳作

（一九九四年以降）

一九九六年　お題「苗」

入選

しその苗抱いて帰りて水やれば日本がそこに舞ひ降りてくる

新井知里

佳作

制服の姿稚なき一年生祖母われの手に生ひ立ちしなり

清水さかえ

一九九七年　お題「姿」

入選

筑波嶺に姿の似たる山近く異境の士を耕して生く

中村教二

二〇〇〇年　お題「時」

入選

移りすんでラテンの国に老いしいまときに信濃の夢をみるかな

神津正

二〇〇二年　お題「春」

入選

野に山にイッペイの花咲き満ちて吾がうまごらの国の春なり

中村教二

「老荘の友」　歌壇の現状

水本すみ子

「ブラジル日系老人クラブ連合会」発行の「ブラジル老荘の友」は三十三チセン×二十五チセンの小型新聞版で毎月一回発行されています。この会報の短歌欄担当選者は当初より、

米沢幹夫　一九七四年四月～一九八〇年十二月
川原比露思　一九八一年一月～一九八五年一月
八巻培夫　一九八五年三月～一九八八年十二月
川原比露恩（再任）　一九八九年一月～一九九二年十二月
小笠原富枝　一九九三年一月～一九九四年三月
陣内しのぶ　一九九四年四月～一九九六年一月
水本すみ子　一九九六年三月～二〇〇二年五月現在

となっております。

水本が担当した当初は投稿者四十名でしたが、年末頃には五十二名となり、一九九九年六月に宇宙飛行士向井千秋さん提出の、宇宙よりの短歌「宙がえり何度も出来る無重力」の下句をつくることを提案しましたところ六十余首の詠草が集まり、選者の清谷益次さん・小笠原富枝さん・陣内しのぶさん・多田邦治さん・小野寺郁子さん方も「応募者の皆さんの

年齢を感じさせない意欲と、その着眼力の良さに惹かれた。『宇宙』という超現実的な世界をわが身に引きつけての発想も仲々のもの」と大変好評でした。これに力を得て、投稿者皆さんの作歌意欲を満たす意味にもと、年一回の予定で題詠の「誌上競詠（コンクール）」を催すことに致しました。

一九九九年九月
　出題「国際高齢年を生きて」
　　応募歌数八十一首
二〇〇〇年九月
　出題「新世紀二千年」
　　応募歌数五十九首
二〇〇一年九月
　出題「日差し又は陽射し」
　　応募歌数六十八首

と歌壇は順調に経過しているようでしたが、何と云いましても高齢者の会ですので、しばらく投稿が途絶えていると思うと、それは作者が体調を崩して床についておられたり、或はかえらぬ旅路に出られたりという状態でした。新しい投稿者も少しずつ増えているのですが、何回か投稿して後そのまま休んで了ったりで、せっかく増えていた投稿者も現在はもとの四十名前後という現状になっております。

コロニアの短歌関係著作
（一九九四年以降刊行）

一覧

一九九四年

『椰子樹二五〇号別冊特集号』
清谷・安良田編集　椰子樹社刊

『いのち折々』
弘中千賀子文集一四五頁
日伯毎日新聞社・日伯文化連盟刊

『黒き液』
多田邦治歌集一六五頁　四一八首　近代文芸社刊

一九九五年

『ジャカランダ』
畑本文子歌文集一六六頁　七一〇首　のうそん（永田久）刊

『青春の賦』
谷口範之歌集　三一〇首

『酒井繁一歌碑建立記念遺歌集』
寺尾芳子ほか編集

『幾山河の賦』

日伯修好百周年記念合同歌集一四一名各二〇首
清谷・安良田・陣内・小野寺編集

一九九六年
『草穂』
梅崎嘉明歌集一二〇頁　五一二首　短歌新聞社刊
『光源都市（三）』
三五〇回記念サンパウロ短歌会合同歌集　三十六名各三〇首
『続々句短歌集』
瀬古義信歌文集

一九九七年
『松風』
武地志津随筆・俳句・短　歌集二五二頁　五七二首
『南回帰線　第五集』
ロンドリーナ短歌会合同　歌集二十五名各五十首
『三人集　心のともしび』
身吉勉・長谷川多喜子・　大平綾子合同歌集

一九九八年
『短歌と日記に見るブラジル移民』
梶山季之三十三回忌記念出版（『積乱雲・梶山季之―その

軌跡と周辺』所載）　季節社刊

『うづ潮』

上妻博彦・上妻泰子合同　歌集一八三頁　千四百首と二三〇首　トツパンプレス出版社刊

『ピラルク』

小林久美子歌集一六八頁　三九八首　砂子屋書房刊

『生涯節目ふしめの歌』

『椰子樹』誌創刊六十周年　記念合同歌集　安良田・小笠原・小野寺・多田・清谷　編集

一九九九年

『花紅に』

川田幸子歌集一二七頁　三　三五首

二〇〇〇年

『クワレズマ』

高橋暎子歌集一七四頁　四　〇八首　そうぶん社出版刊

『帰らざる日々　わが青春の文芸作品集』

河村武雄文芸作品集　二　四二頁　短歌二百五首

日毎叢書刊

『思えるままに』

瀬古義信続続歌文集　短歌　二五五首

『南回帰線　第六集』

ロンドリーナ短歌会合同歌　集　一八名各五十首

二〇〇一年

『三人集　心のともしび（二）』

身吉勉・長谷川多喜子・大　平綾子（追悼）合同歌集

『ひとりごと』

金子秀雄短歌随想集一六七　頁　四五五首　ニッケイ新聞社刊

『相場の中で』

滝友梨香歌集一八一頁　三八四首

『海越えてなお　移住者たちが短歌に綴った二十世紀』　小塩卓哉著　本阿弥書店刊

明治記念綜合歌会

特選・入選及び佳作

（一九九四年以降）

一九九四年

春　佳作　青野妙子・飯田静子・川上光春・中川原正子・

古田格三郎・森田吉久
秋　特選　加藤喜代子・三上忠弘
佳作　青野妙子・坂光男一九九五年秋
佳作　岡本喜代子・竹田加代子
一九九六年
春　入選　片山良一・久米光春
佳作　小林二男・竹田加代子
秋　佳作　青野妙子・秋村蒼一郎
一九九七年
春　入選　久米光春・小池みさ子
佳作　梅崎嘉明・篠田マサ・瀬古義信・高橋よしみ・光瀬みさ
秋　入選　藤田朝寿
佳作　青野妙子・稲垣八重子・井本司都子・上用幸音・大月博・大場時夫・岡本喜代子・川上美枝・久米光春・小斎棹子・小林嘉子・坂光男・桜井正巳・佐藤知子・信太千恵子・篠田マサ・柴田道子・瀬古義信・高橋よしみ・玉木五男・中田一夫・古山孝子・堀石初枝・堀石凡生・光瀬みさ・宮本留美子・森田吉久・八巻汀石・横手竹影
一九九八年
春　佳作　秋山るり・阿久津孝雄・上田幸音・小野里好郎・片山トミエ・金子三郎・清谷勝馬・久米光春・古賀ミツカ・小斎棹子・上妻泰子・小林嘉子・滴草ひろし・高橋よし

み・高橋暎子・西アサノ・西田季子・藤田朝寿

秋　特選　八巻汀石

入選　森田吉久

佳作　青柳ます・新井知里・有馬文子・梅崎嘉明・小野寺郁子・古賀ミツカ・坂光男・佐藤秀逸・杉本三千代・瀬古義信・高橋よしみ・田中朝子・寺田雪恵・中西静世

一九九九年

春　特選　梶田なつ

入選　金谷治美

佳作　青柳ます・阿部玲子・井唯よね子・井本司都子・上田幸音・古賀ミツカ・信太千恵子・柴田道子・杉本鶴代・田所君子・寺田雪恵・原君子・細梅鶴村・山岡樹代子・八巻汀石・渡辺悦子

秋　特選　藤田朝寿

入選　信太千恵子

佳作　伊東国子・大月博・小野里好郎・久米光春・篠田マサ・春名宏文・森田吉久

二〇〇〇年

春　入選　新井知里

佳作　折笠明・久米光春・上妻博彦・信太千恵子・中村教二

秋　入選　武地静子
佳作　青柳房治・青柳ます・尾崎都貴子・坂光男・崎山美知子・桜木光子・杉本鶴代・瀬尾天村・中村教二・増田秀一

二〇〇一年
春　特選　綱島クララ
入選　石塚吟衛・藤田朝寿
佳作　新井知里・伊東国子・大岩和男・岡本利一・柴田道子・瀬尾天村・中沢綾子・中村教二・細梅外史・堀石初枝・増田秀一・八巻たけ

秋　特選　野村康
入選　桜井正巳・立花操・増田秀一
佳作　青柳ます・小原みつ子・加藤喜代子・久米光春・古賀ミツカ・篠田マサ・清水さかえ・田中朝子・八巻たけ

※「明治記念綜合歌会」は毎年、明治神宮参集殿において、春と秋の大祭ごとに催される。
ブラジルでは、一九六七年に徳尾渓舟と大場時夫が委員となり、以後大場時夫、箕輪新七を経て、現在は小池みさ子が担当している。

『椰子樹』命名について

「・・遂に多少の困難は青年らしく覚悟すると共に先づ同好者一致の親しい和やかな心持を力にして、最近いよいよ雑誌発刊に取りかかる運となったに付ては、柄にも無い私が、其の題各選定の相談を受けリオの椎木詩兄とも謀った末、とりあへず「椰子樹」とつけて見た。

これは、樹木の名を附した一流の短歌雑誌が母国に相当多いばかりでなく、詞兄の当のやうに、『ブラジル気分の横溢、亭々と聳ゆる有様が、若い人達の気持にも合ひはせぬかと考えたからで、年の進んだ者は年の進んだ者らしく、すくすくと延びゆく雄々しい椰子樹の将来の姿を胸にハッキリ描きながら静かにしみじみと、本誌の誕生を祝福したい心に出づる次第である・・・」

創刊号巻頭・坂根嵯峨　より

記念号編集委員

清谷　益次　安良田　済　陣内　しのぶ　小笠原富枝
水本　すみ子　岡本喜代子
小野寺郁子　高橋　暎子　小池みさ子　阿部　玲子
上妻　博彦　多田　邦治

この八年間のできごと

一九九四年

カルドーゾ大蔵大臣・ＵＲＶプラン発表

スールブラジル農産組合中央会（南伯）が任意解散

田中総領事着任

アイルトン・セナ　事故死

新貨幣レアル実施

ブラジル・ワールドカップ四度目の優勝

練習艦隊サントス入港

コチア産業組合中央会が任意解散

事業団移住事業部廃止される

一九九五年

カルドーゾ大統領就任・メルコスール発効

初のブラジル出身関取誕生「隆涛」

神戸・淡路震災　日系人にも被害

セン・テーラの暴動始まる

東京でサリンガス事件

日伯友好病院新館完成

日本大使館で職員らがストライキ

日伯修好百周年記念式典に紀宮さまが出席

一九九六年

初の日系州都市長・クリチーバ・谷口市長

ＦＩＦＡ・二千二年ワールドカップ日韓共催を決定
ペルー・リマ市で日本大使館占拠事件
日伯両首脳が相互訪問
身分証明書更新
渡辺マルガリーダ、橘富士雄、広川郁三、半田知雄・死去
一九九七年
間部学画伯死去
日本館取壊し解決
天皇皇后両陛下来伯（ブラジリア）
一九九八年
経団連会長ら来伯
南米銀行がスダメリス銀行に合併される
日本移民九〇年祭
ワールドカップ・ブラジル準優勝
第一回「郷土食と郷土芸能フェスティバル開催
日系正副市長十九人訪日
一九九九年
カルドーゾ大統領再任
橋本梧郎さんに吉川英治賞
在外選挙人登録名簿の申請開始
援協特養老人ホーム完成

南米銀行消滅
アマゾン移住七十周年

二〇〇〇年
ブラジル発見五百周年
初の海外選挙実施
日本法務省発表　在日ブラジル人二二万四千人
在伯日本人　七万九千五百人
ＩＢＧＥ発表　ブラジル人口　一億七千万
「コラソンエス・スージョス」刊行

二〇〇一年
秋の叙勲・ブラジルで受賞なし
節電開始
アメリカで同時多発テロ事件
写真展・戦後移住船出直前

（あとがき）

日記帳を見ると二千年十二月の運営委員会で、三百号記念号刊行可否が話題となり、編集部としては「椰子樹」が存続している限りは刊行したい旨意思表示する。二千一年四月の運営委員会の第一議題として、記念号に関する質問があったが、その場では答弁に窮していたので後の大会準備委員会で刊行作業に入る旨を報告した。

先ずこれまでの記念号に目を通す。多田氏とは暗黙了解「分を明らかにして結ぶ」、二百五十号以前を考えないこと、先輩によって完璧にされた「椰子樹」の史実を損なってはならないし、その力もないと自分に言い聞かせる。原稿が集まれば出来る、と多田氏に励まされた。

早速、高齢者に直に会って面談し、執筆を依頼した。（これは私の思考）それからはただひたすら。途中普通号と記念号の原稿受信が混雑するハプニングも起きた。それぞれに頭を痛めたのが座談会までと、それが活字に見えるまで。多田氏は会社の仕事で多忙でもある身で会社の近辺を離れられない、夜更けに電話で連絡しあうほどの全力投球ぶり、それに土、日と折角の休日に宅に押しかけたりもした。

今ここに一年と数カ月をもって一件落着。これ幾重にも執筆を戴いた会員の皆様の自発的なご協力と感謝感激。一言付け加えると、こと編集に関してはコンピューター操作の出来ぬ者はもはや原人に等しいと思った。だがともかくも、心の通い合う「椰子樹」はこれからも健在であることだとの思いを強くした。

二〇〇二年八月　上妻博彦

部屋のなかには本が、いただいた原稿が、そしていろいろな資料がちらかったままである。これらは六十四年にわたって連綿と積み重なってきた「椰子樹」のいのちそのものであ

り、そのひとつひとつにはひっそりとではあるが、熱いものが脈々と流れつづけているように思えてならない。今、こういったものに囲まれていると、創刊当時からこんにちまで、この短歌そして「椰子樹」に惜しみなく血や涙を注いできた、もちろん会ったこともない、顔も知らないひとりひとりが今の私達に温かい眼差しを向けているような気がしてならないのである。

この貴重な歴史の一端にはからずもかかわることになってしまったが、この記念号に注いだ私のエネルギーなんぞはうしろに積み重ねてあるうずたかい「椰子樹」にくらべれば、ほんの一滴にも及ばないものである。この記念号の編集を終えながらすでに次の号へと思いを移してゆかなければならない。いうまでもなく前途は決して平坦なものではないであろう、が、だからこそ誰かがやらねばならないともいえるであろう。この一冊に寄せる思いは人それぞれに違ったものであろうが、「椰子樹」は将来に向かってまだまだ前進を続けてゆかねばならないという意志をこのなかから少しでもくみとっていただければ、編集を担当した者にとってそれ以上の喜びはないのである。

二〇〇二年八月　多田　邦治

短歌誌「椰子樹」三〇〇号・記念号
二〇〇二年八月　発行
編集・発行所「椰子樹社」　多田邦治（KUNIHARU TADA）方
Rua das Camelias, 835, Condominio Arujazinho-1,
Aruja, SP, BRASIL CEP:07400—000